

326

60



始



326

60

交渉資料第四編

滿洲ニ於ケル日支合辦會社定款 前編
支那會社法ト外國人 後編

附錄 支那會社法並ニ關係法規

南滿洲鐵道株式會社

總務部交渉局

交涉資料第四編

目次

前編	滿洲ニ於ケル日支合辦會社定款	從 一頁至 七二頁
後編	支那會社法ト外國人	從 七三頁至 一二五頁
附錄	支那會社法並關係法規	從 一二七頁至 二六八頁

大正
3. 12. 16
寄贈

口
局
寄贈本

前編

滿洲ニ於ケル日支合辦會社定款

茲ニ滿洲ニ於ケル日支合辦ノ主ナル諸會社並合辦事業ノ參照トナルヘキ日本人
經營ノ諸會社ノ定款ヲ蒐ムルハ以テ將來我國人ノ滿洲ニ於ケル會社事業ノ發展
ニ資セムカ爲ニ外ナラス

各會社ノ定款ヲ記スニ先タチ之レカ梗概ヲ示セルハ一目各會社ノ現狀ヲ知ラシ
メムカ爲ニ過キス此ニ依テ彼レヲ看過セサラムコトヲ要ス、而シテ其ノ精粗一ナ
ラサルハ一ニ編者ノ意ニ從フノミ、編中一切ノ記事ハ大正三年七月ノ現行ニ係ル。

大正三年十月

交渉局 第一課

前編 滿洲ニ於ケル日支合辦會社定款

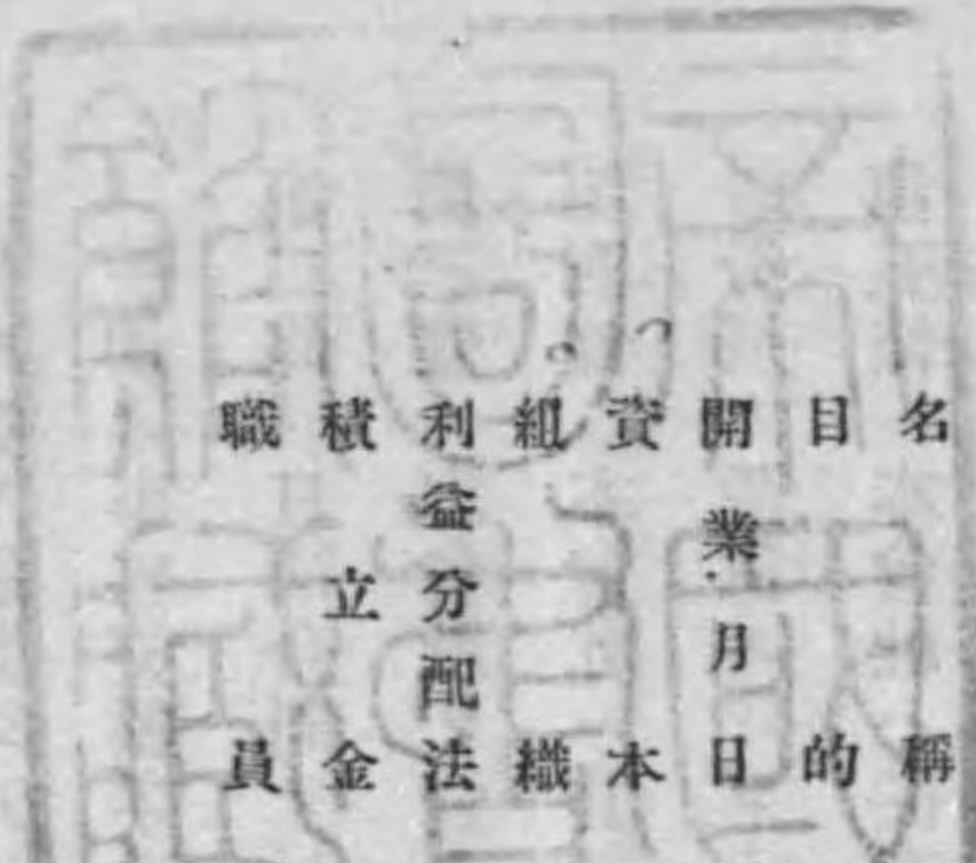
目次

一、鴨綠江採木公司.....	一
一、商辦本溪湖煤鐵有限公司.....	一一
一、遼陽電燈公司.....	一九
一、鐵嶺電燈局.....	二五
一、奉天瀋陽馬車鐵道有限股分公司.....	二九
一、營口水道電氣株式會社.....	四一
一、株式會社正隆銀行.....	四六
一、滿洲製粉株式會社.....	五六
一、日清燐寸株式會社.....	六一
一、瓦房店電燈株式會社.....	六七



鴨綠江採木公司

一 梗概



名 鴨綠江採木公司
 稱 鴨綠江右岸帽兒山ヨリ二十四道溝ニ至ル間該江面ヲ距ル六十清里内ニ於ケル木材採伐
 目 的 明治四十一年九月二十五日(光緒二十四年九月一日)
 開 業 日 三百萬元但シ日清兩國ニ於テ各半額ヲ出資ス
 資 本 株式組織
 組 織 收入中ヨリ一切ノ費用ヲ控除シタル純益ノ百分ノ五ヲ報効金トシ其殘餘ヲ株主ニ均分ス
 利 益 分 配 法 資本金額ノ三分ノ一ニ達スル迄純益ノ百分ノ五
 積 立 金 督 辦 一 名 支 人
 職 員 理 事 長 二 名 日 支 人 各 一 名
 理 事 技 師 及 其 他 ノ 職 員 若 干 名 (日支人各同數)
 存 立 期 限 理 事 以 下 ノ 職 員 ハ 理 事 長 協 議 ノ 上 決 定
 特 權 二 十 五 箇 年 但 シ 期 限 ノ 更 新 ヲ 爲 ス コ ト ナ 得
 採 伐 界 外 及 ヒ 渾 河 ノ 森 林 ハ 從 來 ノ 清 國 木 柁 ノ 伐 採 ス ル 所 ナ ル モ 該 木 柁 ノ 所 要 資 金 ハ 本 會 社 ヨ リ 貸 出 ス コ ト
 及 其 ノ 採 伐 セ ル 木 材 ハ 江 浙 鐵 路 公 司 所 要 ノ 枕 木 及 渾 江 沿 岸 ノ 居 住 民 自 用 ノ 爲 ニ 直 接 賣 却 ヲ 爲 シ 其 ノ 餘 ハ 市
 價 ニ 依 リ 會 社 ニ テ 買 取 ス ル コ ト
 會 社 所 要 ノ 機 械 及 伐 木 ニ 必 要 ナ ル 器 具 等 ニ ハ 一 切 ノ 稅 金 釐 金 ヲ 免 除 ス

二 日清合辦鴨綠江採木公司ニ關スル取極書

大日本國特命全權公使男爵林權助大清國外務部會辦大臣那桐各本國政府ノ委任ヲ奉シ明治三十八年十一月二十二日即チ光緒三十一年十一月二十六日締結セル滿洲ニ關スル日清條約附屬協約第十條ノ規定ニ基キ日清合同材木會社ノ章程ヲ協定スルコト左ノ如シ

第一條 鴨綠江右岸帽兒山ヨリ二十四道溝ニ至ル間該江面ヲ距ル六十清里内ヲ劃定シテ界ト爲シ(奉天ヨリ委員ヲ派シ日本委員ト會同測定シテ標ヲ立テ界ヲ示ス)界内ノ木材ハ日清兩國合資ヲ以テ採伐事業ヲ經營スルモノトス但シ會社創業ノ始ニ於テハ兩國ヨリ員ヲ派シ局ヲ設ケテ營業シ一箇年後一切ノ事務整頓妥當トナリタルヲ俟テ兩國ヨリ招商承辦セシムヘシ

第二條 日清合同ノ材木會社ヲ鴨綠江採木公司ト稱ス

第三條 本會社ノ資本ヲ參百萬元トシ日清兩國ヨリ各半額ヲ出資スヘシ

第四條 本會社ハ其ノ總局ヲ安東ニ設置ス又本會社カ必要ト認ムルトキハ督辦ニ届出ノ上夫々各地ニ分局ヲ設置スルコトヲ得

第五條 本會社ハ從來ノ清國木柁ノ事業ヲ保全スルコトニ同意ス因テ第一條ニ聲明セル劃定界内ハ會社ノ採伐ニ歸スルモ其ノ界外及渾江ノ森林ハ仍ホ從來ノ清國木柁ノ採伐ニ歸スルモノトス但シ木柁ノ要スル資本金ハ本會社ヨリ借入ルヘシ其ノ採伐セル木材ハ江浙鐵路公司所要ノ枕木及渾江沿岸居民自用ノ木材ヲ木柁ヨリ直接買取リ得ルノ外其餘ハ全部會社ノ買収ニ歸ス會社ハ市價ヲ按シテ之

ヲ發賣シ任意壟斷スルヲ得ス

第六條 會社自ラ採伐セル木材及木柁ヨリ買収セル木材ニシテ清國政府及清國諸官署ニ於テ之ヲ需用スルトキハ護照ヲ差出シテ會社ヨリ買取ルヘシ但シ此ノ場合ニハ會社ハ實費ニ依リテ計算シ價格ヲ高ムルヲ得ス

第七條 本會社ノ營業期限ヲ二十五箇年トシ滿期ニ至リ清國政府ニ於テ會社ノ經營事業ヲ尙ホ妥當ナリト認ムルトキハ會社ハ清國政府ニ出願シテ期限延長ノ許可ヲ求ムルコトヲ得

第八條 本會社ニ督辦一人ヲ置キ奉天督撫ヨリ東邊道臺ニ命シテ兼任セシメ會社ノ經營事業ヲ監督ス又理事長二人ヲ置キ日清兩國ヨリ各一名ヲ任命シ會社一切ノ業務ヲ經理ス其ノ他ノ理事技師等ハ理事長協議ノ上選任ス若シ界内ニ於テ入山伐木ノ爲別國人ヲ兼用スルノ必要アルトキハ理事長ヨリ豫メ督辦ノ認可ヲ求メ之ヲ定ムヘシ

第九條 本會社ハ毎年末ニ於テ其ノ年内一切ノ事業報告書及收支計算書ヲ作成シ兩國當該官憲ニ提出シテ査閲ヲ受クヘシ

第十條 本會社ハ其ノ收入中ヨリ一切ノ費用ヲ引去リタル純益ノ百分ノ五ヲ報效金トシテ清國政府ニ上納シ殘餘ノ利益ハ日清兩國株主ノ均等分配ニ歸ス會社ノ費用ハ任意支出スルヲ得ス期ヲ按シテ會社使用人ノ俸給其ノ他一切ノ經費額ヲ豫算シ督辦ニ提出シテ認可ヲ受クヘシ

第十一條 會社設立ニ關スル一切ノ辦法ハ此ノ大綱議定ノ後一箇月以内ニ奉天督撫及在奉天日本總領事ヨリ各一名ノ委員ヲ任命シテ詳細ナル章程ヲ商議セシメ協定ノ後之ヲ會社ニ交付シテ遵照辦理セシメ三箇月以内ヲ限リ開業スルモノトス以後會社ニ於テ別ニ規則ヲ定ムル場合ニハ督辦ノ認可ヲ經テ施行スヘシ

第十二條 本會社ノ納付スヘキ木材稅ハ奉天ニ於テ詳細ノ章程ヲ商議スル際兩國委員ニ於テ從來規定ノ稅額ヲ查明シ地方官ニ商議シ同意ノ上酌減スヘシ但シ會社カ輸入スル機械及伐木ニ必要ナル器具等ニ就テハ一切ノ稅金釐金等ヲ免除スヘシ

第十三條 本會社開業ノ後ハ日本國政府ハ現在ノ鴨綠江木材廠ヲ全ク撤去スルコトニ同意ス

大日本國特命全權公使 男爵 林 權 助 團

大清國外務部會辦大臣 那 桐 團

大日本國明治四十一年五月十四日

在北京

大清國光緒三十四年四月十五日

三 鴨綠江採木公司業務章程ニ關スル覺書

大日本國領事岡部三郎大清國奉天度支司使張錫鑾各本國政府ノ命ヲ奉シ明治四十一年五月十四日即チ

光緒三十四年四月十五日協定セル鴨綠江採木公司章程第十一條ノ規定ニ基キ該公司ノ業務章程ニ關スル覺書ヲ協定スルコト左ノ如シ

第一 章程第四條ニ所謂清國銀元ハ北洋銀元ヲ指スモノニシテ將來奉天銀元カ確實ニ流通スル後ニ至ラハ便宜改メテ奉天銀元ヲ用ウルモノトス兩國最初ノ資本金ハ便宜兩銀ヲ以テ出資スルコトヲ得此ノ場合ニハ開業當日ニ於ケル北洋銀元ノ相場ニ照シ換算スヘキモノトス

第二 北京取極書第六條ニ依リ清國政府及清國諸官署ノ買取ル木材ニ對シテハ本會社ハ實際直接ニ要セル費用及税金以外ニ會社ヲ維持スルニ必要ナル俸給其ノ他一切ノ經費ノ步合ヲ加フモノトス

第三 本會社成立以前ニ要スヘキ創立費ハ兩國ヨリ一時之ヲ立替ヘ置キ會社成立ト同時ニ會社ヨリ全部償還スヘキモノトス右創立費ノ豫定額ハ七萬元以内トス

第四 銀行ヨリ預ケ金ヲ引出ス際ニハ兩理事長ノ連署花押ヲ要スルモノトス

第五 本會社ノ營業ニ關スル警察事宜ハ凡テ清國警察ノ管理ニ歸ス

第六 本章程ハ兩國委員ノ協商ヲ經テ酌定シタルモノニシテ先ツ試ニ之ヲ施行シ商辦ニ改メタル後ニ至リ不都合ノ點ナキヲ認タルトキハ即チ之ヲ該株式會社ニ交付シテ遵守辦理セシムヘシ

章程第五條ニ載スル所ノ本會社職員ハ商辦ニ改ムル際酌量シテ留任若クハ解職スルモノトス

大日本國領事 岡 部 三 郎

大日本國明治四十一年九月十一日

在奉天

大清國奉天度支使 張

錫 六 鑾

大清國光緒三十四年八月十六日

四 鴨綠江探木公司業務章程

大日本國領事岡部三郎大清國奉天度支使張錫鑾各本國政府ノ命ヲ奉シ明治四十一年五月十四日即チ光緒三十四年四月十五日協定セル鴨綠江探木公司章程第十一條ノ規定ニ基キ該公司ノ業務章程ヲ協定スルコト左ノ如シ

第一條 本會社ハ明治四十一年五月十四日即チ光緒三十四年四月十五日ヲ以テ日清兩國間ニ議定セラレタル日清合辦鴨綠江探木公司ニ關スル取極書竝本章程ニ遵照シテ營業スルモノニシテ明治四十一年九月二十五日即チ光緒三十四年九月一日ヲ以テ開業ス

第二條 本會社ハ取極書ニ從ヒ兩國ヨリ員ヲ派シ局ヲ設ケテ開業シ一箇年後一切ノ事務ヲ整頓妥當トナリタルヲ俟チテ兩國ヨリ招商承辦セシムヘシ本會社開業ノ後ニ至リテ更ニ株式募集章程ヲ定ムヘキモノトス

第三條 本會社ノ資本金三百萬元ハ開業ノ日ニ於テ日清兩國政府ヨリ各半額ヲ出資ス商辦ニ改ムル際

ニハ各其ノ資本金ヲ全部回收スルモノトス

第四條 會社ノ資本金竝收支一切ノ勘定ハ凡テ清國銀元ヲ以テ定トナス且ツ兩理事長協議ノ上日清兩國ノ銀行ニ分存スルモノトス

第五條 本會社ニ置ク職員ハ左ノ如シ

督辦 一人

理事長 二人

理事 二人以上

技師及其他ノ職員若干名

督辦ハ奉天督撫ヨリ東邊道臺ニ命シテ兼任セシメ會社ノ經營事業ヲ監督ス

理事長ハ日清兩國ヨリ各一名ヲ任命シ會社一切ノ業務ヲ經理ス

理事ハ理事長協議ノ上選任シ各政府ニ報告スルモノトス

技師及其ノ他ノ職員ハ理事長協議ノ上之ヲ採用ス

理事以下ノ員數ハ成ル可ク兩國人中ヨリ同數ヲ出スモノトス

第六條 督辦ノ報酬ハ本公司第五會計年度即チ本年十一月一日ヨリ毎年五千元ト定メ理事長ノ俸給ハ毎年一萬元トシ理事ノ俸給ハ理事長協議ノ上之ヲ定ム(大正元年十一月二十八日改正)

第七條 技師及其他ノ職員ノ定員數並俸給定額ハ理事長ヨリ督辦ニ協議ノ上表ヲ製シテ之ヲ定ム

第八條 本公司ノ文書帳簿中主要ナルモノハ日華兩國文ヲ用キ各一通ヲ備ヘ其ノ會計帳簿ハ第五會計年度即チ本年十一月一日ヨリ洋式簿記法一通ヲ備ヘテ取調ニ便ナラシムヘシ兩國ハ官吏ヲ派シテ隨時會社業務ノ施設ヲ監査シ會社ノ金庫帳簿及諸般ノ文書ヲ檢查シ且ツ會社ニ對シ營業上諸般ノ計畫及景況ニ關スル報告ヲ求ムルコトヲ得(大正元年十一月二十八日改正)

第九條 本會社一切ノ決算記數ハ凡テ陰曆ヲ用キ以テ取引ニ便ナラシムヘシ商辦ニ改ムル際ニハ直チニ決算ヲナスモノトス

第十條 本會社ハ日清兩國ノ合資ニ係ルヲ以テ相互協商ノ上許可スルニ非サレハ本會社自ラ増資ノ爲メ借款ヲ爲スコトヲ得ス

第十一條 本會社ハ純益ノ百分ノ五ヲ積立金トス此ノ積立金ノ額ハ資本金ノ三分ノ一ニ達スルヲ以テ限度トス

前項ノ積立金ハ前條ニ做ヒ相互協商認可スルニ非サレハ使用スルコトヲ得ス

第十二條 理事長ハ歲入歲出ノ豫算表ヲ調製シ督辦ノ認可ヲ受クルモノトス

前項ノ豫算ハ款項區分シ收入ノ性質及支出ノ目的ヲ明示スヘシ

第十三條 收入支出其ノ他會計ニ關スル規定ハ兩理事長ニ於テ協商議定シ督辦ニ報告スルモノトス

第十四條 本會社カ取扱フ一切ノ木材ニ對スル税金ハ從來規定ノ山價及客稅ノ稅則(山價及客稅ノ稅則ハ別表ニ依ル)ニ照シ其ノ二割ヲ減シタルモノヲ本會社ヨリ納付スヘシ船捐ハ仍從來ノ規定ニ照シテ辦理シ本會社トハ關係ナキモノトス其ノ他木材ニ對スル檢査料、捕盜費等ノ各種ノ諸掛、料金等ハ一切之ヲ免除セラシル若汽船ニ積載シテ輸出スル場合ニハ船捐ノ代リニ海關規則ニ依リテ輸出稅ヲ徵收セラルヘシ本會社ノ納付スヘキ山價、客稅ハ從來ノ慣例ニ從ヒ木材ヲ本會社ヨリ賣却スルトキニ納ムルモノトス

本會社ノ營業及所得並會社使用ノ機械、伐木器具等ニ對スル税金諸掛ハ一切免除スルモノトス但シ會社所有ノ土地ニ對スル租稅ハ尙從來ノ規則ニ照シテ納付スルコトヲ要ス

第十五條 江浙鐵路公司所要ノ枕木ハ木杷ヨリ直接ニ買取ルコトヲ得ルモ必ス該鐵路公司ノ執照ヲ携帶スヘシ而シテ該執照ニハ數量ヲ明記シ先ツ東邊道臺ニ呈シ證明加印ヲ受クルヲ要ス輸出ノ際ニハ本會社督辦ヨリ員ヲ派シ檢査ノ上通過セシムルモノトス

第十六條 渾江沿岸居民自用以外ノ木材ハ凡テ本會社ノ買取ニ歸スヘキハ已ニ北京取極書ノ規定スル處ニシテ先ツ地方官ヨリ之ヲ告示シ若北京取極書ニ違背スル者アル場合ニハ隨時本會社ヨリ地方官ニ協商議制シ假借スヘカラサルモノトス

第十七條 漂流木ノ整理ハ本會社之ニ任スルモノトス但シ漂流木整理ニ關スル規則ハ理事長協議ノ上

督辦ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム

從來存在セル木會ハ本會社成立同時ニ該管地方官ヨリ告示シテ悉ク解散スルモノトス

第十八條 本會社ノ伐木地域ハ北京取極書ニ從ヒ鴨綠江右岸輪兒山ヨリ二十四道溝ニ至ル間江面ヲ距ル六十清里ヲ以テ界トナシ兩國ヨリ委員ヲ派遣シ該管地方官ト會同測定ノ上圖面ヲ作り標ヲ立テテ之ヲ表示ス

第十九條 本會社ハ森林ノ狀況ヲ酌量シテ伐採スヘキモノニシテ採伐計畫ノ順序及毎年伐採シタル地域、面積並樹木ノ種類等ハ逐一圖表ヲ作りテ奉天督撫ニ報告シ其ノ查閱ニ備フヘシ

第二十條 本會社カ伐木、運木、編筏、運筏ニ要スル一切ノ人夫ハ專ラ清國人ヲ雇用シ以テ地方民生業ノ保護ニ資ス若別國人民ヲ兼用スルノ必要アルトキハ取極書ニ從ヒ督辦ニ商議シ其ノ認可ヲ求メテ之ヲ定ムヘシ

第二十一條 木材ノ賣買ハ本會社ノ營業ニ屬スト雖モ清國料棧等ノ仲買人ハ從來ノ通り開店シ隨時本會社ト打合セノ上仲買業務ニ從事スルコトヲ得ルモノトス

大日本國領事 岡 部 三 郎 印

大清國奉天度支使 張 錫 鑾 印

大日本國明治四十一年九月十一日

在奉天

大清國光緒三十四年八月十六日

商辦本溪湖煤鐵有限公司

一、梗概

名 稱	商辦本溪湖煤鐵有限公司
目 的	本溪湖煤礦ノ石炭ノ採掘、販賣 コークスノ製造販賣 廟兒溝ノ鐵礦ノ採掘鐵礦ノ製造販賣
設 立 年 月	明治三十八年十二月開業
資 本	清國北洋龍銀四百萬元 (大正二年十二月七百萬元ニ増資)
組 織	有限公司 株數四萬株 一株北洋銀百元 日支各切半シテ引受 支那持株ヲ鐵株、銀株ノ二種トス 鐵株 三千五百株 銀株 一萬六千五百株
株 式	記名式 任意讓渡ヲ許サス但シ支那政府ノ持株ハ之ヲ讓渡スルコトヲ得

利益分配法

年八釐(八分)但シ公司ノ利益之ヲ爲シ得サルトキハ八釐以下ニ下スコトヲ得
營業費及利益配當ヲ爲シ尙剩餘アルトキハ左ノ方法ヲ採ル

一、五分ヲ報効金トシテ支那政府ニ上納ス

二、二分ヲ積立金トス

三、十三分ヲ日支持株數ニ應ジ按分ス

督辦一名、奉天交涉使(現今ノ制度ニテハ外)

公司ノ事務監督

總辦 日支各一名、事務ノ管理職員ノ監督

日支人 各一名

查賬員

豫算及決算

職員ノ事務分擔

總辦 二名(日支人各一名)

秘書科長 二名(同)

同科員 二名(同)

庶務科

科長 二名(日支人各一名)

科員 六名(日人五名、支人一名)

金庫(庶務科ニ屬シ科長ハ兼務)

科員 十二名(日人八名、支人四名)

配給所

科員 七名(日人五名、支人二名)

取締係

係員 五名(日人三名、支人二名)

醫院

科員 七名(日人五名、支人二名)

販賣科
科長 二名(日支人各一名)

科員 一名(日人)

會計科

科長 二名(日支人各一名)

科員 十名(日人六名、支人四名)

製鐵部

技師 七名(日人六名、支人一名)

部員 八名(日人)

探炭部

部長 一名(支人)

科長 一名(日人)

技師 一名(支人)

技手 七名(日人)

科員 三名(日人二名、支人一名)

科員 二十四名(日人十名、支人十四名)

小頭 三十一名(日人二十四名、支人七名)

機械科

科長 二名(日支人各一名)

技手 三名(日人)

科員 五名(日人三名、支人二名)

小頭 九名(日人)

修業科
 科長 二名(日支人各一名)
 技手 三名(日人)
 科員 五名(日人三名、支人二名)
 小頭同待遇者 八名(日人)

二 定 款

商辦本溪湖煤鐵有限公司總則細章

原文ハ漢文ナリ

第一章 定 名

第一條 本公司ハ東三省總督ノ奏准ヲ經テ組織ヲ日清商辦トシ商辦本溪湖煤鐵有限公司ト稱ス

第二章 主 意

第二條 本公司ハ本溪湖煤礦ノ石炭ヲ採掘販賣シ及採掘ノ石炭ヲ以テコークスヲ製造販賣シ竝廟兒溝ノ鐵鑛ヲ採掘シ銑鐵ヲ製造販賣スルヲ以テ目的トス

第三條 本公司ハ第二條ニ規定スル以外ノ事業ヲ兼營スルコトヲ得ス

但シ公司ニ於テ任用スヘキ各種ノ材料ハ自カラ之ヲ製造スルコトヲ得

第四條 本公司ハ用地内ニ於テ運搬用軌道ヲ敷設シ又ハ工場倉庫其ノ他必要ノ家屋ヲ建設スルコトヲ得

但シ所要ノ土地若シ官有地ナルトキハ清國官憲ニ出願シテ許可ヲ受クヘク若シ民有地ナルトキハ地主ノ承認ヲ得テ公平ナル借地料ヲ拂ヒ契約成立後任用ス

第三章 資本及株券

第五條 本公司ノ資本銀ハ清國北洋龍銀四百萬元トス株數ヲ四萬株ニ分チ每株ヲ北洋銀一百元トス

第六條 本公司ノ株主タルヘキ者ハ日清兩國ニ限ル

第七條 本公司ノ株券ハ日清各二萬株トス清國所有ノ株券ハ之ヲ鑛株銀株ノニニ分ツ鑛株ハ計三千五百株清國政府所持ノ權利株ニシテ即清國政府ヲ以テ其ノ株主トス銀株ハ一萬六千五百株、暫ク清國政府ノ出ス所ナルヲ以テ亦清國政府ヲ以テ株主トス日本ノ株券ハ二萬株大倉喜八郎ヲ以テ株主トス
 第八條 株銀ノ額ハ原ト北洋龍銀二百萬元ト定メ開辦ノ日ニ於テ日清兩株主ヨリ鑛株銀株ヲ分チテ之ヲ拂込ミ株券ヲ交付シタリ増資額北洋龍銀二百萬元ハ左記期限ニ依リ兩國株主各其ノ一半ヲ拂込ムヘシ公司ハ其ノ拂込銀額ニ對シ其ノ都度株券ヲ交付スヘシ

壬子年四月十五日 銀 六十萬元

癸丑年四月十五日 銀 八十萬元

甲寅年四月十五日 銀 六十萬元

第九條 本公司ノ株券ハ記名株券トス株券ハ任意ニ賣買又ハ他人ニ讓與スルコトヲ得ス若シ清國政府

昨年十二月龍
 銀七百萬元ニ
 増資ス日支ノ
 出資額ハ平等
 ナリ

持チノ銀株ヲ改メテ商株トナス場合ハ清國政府ハ其ノ旨公司ニ通知シテ登簿更正ス
但シ清國政府ハ此ノ場合必ス信用アル商人ヲ擇ヒテ株主トナスヘシ

第十條 株主若シ其ノ所持スル株券ヲ遺失シ燒失シ又ハ損傷セル場合ニハ速カニ其ノ旨公司ニ届出ツ
ヘシ公司ハ直ニ該株券ヲ廢殘トナシ次年度株主會議ニ報告シ重ネテ補給ス

第四章 利息及利益銀

第十一條 本公司ノ株券ニ付スル利息ハ銀株ト銀株トヲ論セス概ネ常年八釐トシ株券面ニ記明シタル
株券交付ノ日ヨリ起算ス

但シ公司所得ノ利益八釐ノ利息ヲ附スルニ足ラサルトキハ八釐以下ノ利息ヲ附ス

第十二條 本公司ハ毎年各項ノ營業費及株券ニ對スル利息ヲ支拂ヒ尙剩餘金アル場合ニハ純益金トシ
テ之ヲ二十分ニ分配スルコト左ノ如シ

一、五分ハ報效金トシテ清國政府ニ上納ス

二、二分ハ積立金ニ充ツ

三、十三分ハ日清兩株主ニ其ノ株數ニ應シテ按分ス

第十三條 本公司ニ於テ支拂フヘキ利息純益及其ノ他總テノ金員ハ毎年定期會議ノ後一箇月以内ニ支
拂ヲ終ヘルモノトス若シ北洋龍銀現貨ナキトキハ市價ニ依リ換算シテ別種ノ貨幣ヲ支拂フ

第五章 督辦及總辦

第十四條 本公司ノ督辦ハ東三省總督ノ奏派ヲ經テ奉天交渉使之ヲ兼任シ以テ公司ノ經營事務ヲ監督
ス

總辦ハ日清各一名ヲ任派シ公司一切ノ事務ヲ管理シ及全體ノ人員ヲ監視黜陟ス

第六章 株主會議

第十五條 株主會議ハ分チテ定期會議臨時會議ノ二トス

第十六條 定期會議ハ毎年正月内ニ本公司ニ於テ開會ス

第十七條 臨時會議ハ凡テ公司ノ重大事件ニシテ兩總辦ニテ決議シ能ハサル場合或ハ株主ヨリ株券ノ
總數四分ノ一以上ノ賛成者ヲ得テ開會ヲ請求シタル場合ニ其ノ旨ヲ督辦ニ上申シ聯名ヲ以テ日清株
主ニ通知シ時日會所ヲ定メテ後開會ス

第十八條 會議ノ方法ハ每千株ヲ以テ一議決權トシ一千株未滿ノ株主ハ議決權ヲ有セス

第十九條 會議事件ハ議決權ノ總數四分ノ三以上ノ賛成者ヲ得テ議決ス

第二十條 兩總辦及公司ニ職ヲ有スル者又ハ議決事項ニ利害關係ヲ有スル者ハ株主ノ代表者トナリテ
會議ニ參與スルコトヲ得ス

第二十一條 會議ノトキ報告スヘキ事件ハ左ノ如シ

- 一、前年度公司營業ノ情況一切及賬簿ニ關スル件
- 二、本期ニ支拂フヘキ利息及分與スヘキ賞與金及積立金ノ額
- 三、本年度營業豫算案及業務擴張豫算案
- 四、本年度查賬員舉任ノ件

第二十二條 會議事項ハ之ヲ株主會議簿ニ詳記シ各議員署名ノ上公司ニ保存ス

第七章 查賬員

第二十三條 查賬員ハ株主會議ニ於テ日清各一名ヲ選舉シ一年ヲ以テ其ノ任期トス

第二十四條 查賬員ハ公司ニ職務ヲ有スル人及關係ヲ有スル人ヲ任命(選舉)スルコトヲ得ス又同期限内ニ於テ株主會議員タル事ヲ得ス

第二十五條 查賬員ハ公司ノ經營事務ニ干預スルコトヲ得ス

第二十六條 查賬員ハ何時ニテモ公司ニ至リテ賬簿ノ書冊及營業ノ情況ヲ查閱ス

第二十七條 查賬員ハ公司ノ會計賬簿及損益情況ノ調査ヲ終ヘテ其ノ誤謬ナキコトヲ認メタルトキハ其ノ旨ヲ賬簿上ニ明記シ株主會議開會ノトキニ至リテ誤ナキヲ證明シ且ツ其ノ意見ヲ報告スヘシ

第八章 豫算及結算

第二十八條 本公司ハ毎年十二月ニ於テ次期ノ尋常營業豫算案及業務擴張豫算案ヲ作製シテ各株主ニ

送リ株主會議ノ決議ヲ經テ後之ニ據リテ辦理ス

第二十九條 本公司ハ毎年十二月ヲ以テ決算期ト定ム

兩總辦ハ十二月末日迄ニ一切ノ賬簿ヲ止切リ結算シテ財產目錄表貸借表損益計算書營業報告書及利益金分配案ヲ作成シテ之ヲ查賬員ニ交付シ誤謬ナケレハ株主會議ノ開會ヲ待チテ報告ス

第九章 附則

第三十條 本公司ノ事務細章ハ別ニ規定ス若シ本章及事務細章ニ規定ナキトキハ中華民國現行法令及礦務章程ヲ參照シ株主會議ノ決定ヲ經タル後督辦ヨリ督憲ニ具申シテ登錄ス

第三十一條 本則ハ宣統三年 月 日ヨリ施行ス

遼陽電燈公司

一 梗概

名稱	遼陽電燈公司
目的	遼陽城内外及遼陽滿鐵附屬地内ニ於ケル電燈業及電力供給業
設立年月	明治四十四年九月
資本額	金十二萬圓
實收資本額	内金十萬圓ハ滿鐵ヨリ金錢其ノ他ノ財產ヲ以テ出資シ金二萬圓ハ清國遼陽自治會其ノ他ノ清國商人ヨリ出資ス

清國自治會及其ノ他ノ清國人ハ設立ノ時ヨリ向三箇年間ニ金二萬圓ヲ其ノ後ノ二箇年間ニ金二萬圓ヲ出資スルコトヲ要ス此ノ場合ニハ滿鐵ハ其ノ出資額中ヨリ本項ノ額ヲ回收スルモノトス

株式組織
株數千二百株 一株 百圓

滿鐵所有株及清國自治會商會ノ所有株ハ他人ニ賣買讓渡スルコトヲ禁ス但シ其他ノ清國人所有ノモノハ清國人ニ限リ讓渡スルコトヲ得

總辦 一名 支那人
支配人 一名 日本人

(共ニ任期二箇年)

監事 四名 内二名日本人、二名支那人

積立金 純益金ノ十分ノ一以上

役員賞與金 純益金ノ十分ノ一以上

配當金 純益金ノ十分ノ八以内

附

十箇年後自治會商會ニテ遼陽城内外ニテ獨立シテ電燈事業ヲ經營セントスル時ハ公司所有ノ電柱、電線、電燈及該附屬品ハ時價ニテ自治會商會ノ所有ニ歸ス

本章程ニ規定ナキモノ本章程又ハ本章程ニ基テ定メタル一切ノ規則ノ解釋ハ日清兩國法律ニ據リ、兩國法律ノ抵觸スル場合ニハ兩國官憲ノ協議ニ依ル

二 章程

在遼陽日本領事ト遼陽知州ノ協議ヲ經テ遼陽城内外及遼陽滿鐵附屬地内ニ於ケル電燈事業ヲ日清合辦組織ニテ經營スル爲メ章程ヲ定ムル事左ノ如シ

第一條 本公司ハ遼陽城内外及遼陽滿鐵附屬地内ニ於テ電燈及電力供給ノ營業ヲナスヲ以テ目的トス

第二條 本公司ハ遼陽電燈公司ト稱シ營業所ヲ遼陽ニ置ク

第三條 本公司ノ營業年限ハ創立ノ日ヨリ十箇年間トス

但シ株主總會ノ決議ニ依リ之ヲ伸縮スルコトヲ得

第四條 本公司ノ資本金ハ金十二萬圓ヲ以テ定額トシ内金十萬圓ハ差當リ日本南滿洲鐵道株式會社ヨ

リ金錢其ノ他ノ財産ヲ以テ出資シ金二萬圓ハ清國遼陽自治會商會及其ノ他ノ清國人ヨリ出資ス

清國自治會商會及其ノ他ノ清國人ハ一次タルト逐次タルトヲ問ハス向フ三箇年間ニ二萬圓ヲ其ノ後

ノ二箇年間ニ二萬圓ヲ出資スルヲ要ス但シ其ノ増資ハ會計期ニ於テ之ヲ爲スヲ要ス

前項ノ場合ニハ南滿洲鐵道株式會社ハ其ノ出資額中ヨリ清國自治會商會及其ノ他ノ清國人ノ増加額

ヲ收回スルヲ要ス

第五條 十箇年後清國自治會商會ニテ遼陽城内外ニ於テ獨立シテ電燈事業ヲ經營セント欲スル時ハ城

内外本公司所有ノ電柱電線電燈及該附屬品ハ時價ニテ自治會商會ノ所有ニ歸スルモノトス

第六條 南滿洲鐵道株式會社ヨリ出資スヘキ金錢以外ノ財産ニ對スル價格ハ別表定ムル所ニ據ル

第七條 株主ノ責任ハ其ノ出資額ヲ限度トス

第八條 本公司ノ資本金ハ株式ヲ以テ算シ總資本金ヲ一千二百株ニ分テ一株金一百圓トス

第九條 各株主ハ一株ニ付キ一箇ノ議決權ヲ有スルモノトス

第十條 南滿洲鐵道株式會社ト清國自治會商會ノ株式ハ彼我何レモ之ヲ他人ニ賣買讓與スルコトヲ得
ス但シ其ノ他ノ清國人ノ所有スル株式ハ清國人ニ限り賣買讓與スルコトヲ得

第十一條 株券ヲ毀損又ハ紛失シタルトキハ其ノ事實ヲ證明シテ新株券ノ交付ヲ請求スヘシ

第十二條 本公司ノ業務ヲ執行スル爲メ左ノ職員ヲ置キ株主總會ニ於テ之ヲ選舉ス

總辦 一名 支配人 一名

總辦ハ清國自治會商會ヨリ推選セル人ヲ選舉シ支配人ハ日本南滿洲鐵道株式會社ヨリ推選セル人ヲ
選舉スルモノトシ其ノ任期ヲ孰レモ二箇年トス但シ任期滿了後之ヲ再選スルコトヲ妨ケス

第十三條 總辦ハ本公司ノ業務ヲ總理シ支配人ハ總辦ヲ輔テ主トシテ業務ヲ處理シ各自本公司ヲ代表
ス

第十四條 總辦及支配人ハ業務上通常ノ事項ハ例規ニ依リ之ヲ執行スト雖料金ノ改定章程ノ變更主要
財産ノ處分ニ關スルモノハ株主總會ノ決議ヲ經テ施行スルコトヲ要ス

第十五條 本公司ニ監事四名ヲ置キ株主總會ニ於テ之ヲ選舉ス
但シ日清人各二名トス

第十六條 監事ハ何時ニテモ事業ノ施設ヲ監査シ本公司ノ金庫帳簿及諸般ノ文書物件ヲ檢查スルコト
ヲ得

第十七條 監事ハ何時ニテモ本公司ノ營業上諸般ノ計算及營業狀況ニ對シ説明ヲ求メ且ツ意見ヲ陳述
スルコトヲ得

第十八條 二人以上ノ監事又ハ出資總額六分ノ一以上ノ株主ヨリ臨時株主總會開會ノ請求アリタルト
キハ總辦ハ遲滞ナク之ヲ召集スルコトヲ要ス

第十九條 定時株主總會ハ毎年三月九月ノ兩度召集スルモノトス株主總會ヲ召集スル場合ニハ總辦ハ
會議期日五日前ニ各株主ニ會議ノ目的及決議スヘキ事項ヲ通知スルコトヲ要ス

第二十條 株主總會ノ決議ハ議決權ノ過半數ヲ以テ決ス

可否同數ナルトキハ總辦ノ決スル所ニヨル但シ公司ノ存廢料金ノ改正主要財産ノ處分章程ノ變更ニ
關シテハ總辦ハ南滿洲鐵道株式會社及自治會商會ノ同意ヲ得テ之ヲ決スルコトヲ要ス

第二十一條 本公司ノ會計ハ一箇年ヲ二期ニ分チ毎年一月ヨリ六月迄ヲ前半期トシ七月ヨリ十二月迄
ヲ後半期トス

第二十二條 本公司ニハ必要ナル諸帳簿並記錄ヲ備ヘ金錢ノ收支及營業事務狀態ヲ明瞭ナラシムヘ
シ

第二十三條 總辦ハ半期毎ニ財産目錄貸借對照表營業報告書損益計算書ヲ作成シ監事ノ承認ヲ經テ其
ノ確實ヲ證明シ定時株主總會ニ附議スヘシ

第二十四條 本公司ノ利益金ハ定時株主總會ノ決議ニ依リ左ノ通り配當スヘシ

二四

積立金 純益金ノ十分ノ一以上

役員賞與金 純益金ノ十分ノ一以内

資本配當金 純益金ノ十分ノ八以内

第二十五條 本公司業務施行細則ハ別ニ之ヲ定ムト雖其ノ内容本章程ノ趣旨ニ抵觸スルコトヲ得ス
 第二十六條 本章程ニ規定ナキモノ及本章程竝本章程ニ基キテ定メタル一切ノ規則ノ解釋ハ日清兩國ノ法律ニ準據ス兩國ノ法律ニ抵觸スル場合ニハ日清兩國官憲ニ於テ之ヲ折衷解決スルモノトス

明治四十四年九月十一日

南滿洲鐵道株式會社

總裁 中村是公

自治會 會

商會 會

會 會

宣統三年七月十九日

滿鐵會社ヨリ出資スヘキ財産ノ種類及評價額

品名	評價額	原價
建物	五、五〇〇・〇〇〇	九、五〇〇・〇〇〇
百キロワット汽機及直結發電機二臺	一三、〇〇〇・〇〇〇	二〇、二四五・〇〇〇
ゼフト式凝縮機二臺	二、五〇〇・〇〇〇	三、二六九・〇五〇
水管	二、〇〇〇・〇〇〇	三三、〇一四・〇五〇
汽管	一三、〇〇〇・〇〇〇	
合計		

駐遼領事 鈴木要太郎 印
 遼陽州知事 史紀常 印

鐵嶺電燈局

本電燈局ハ清和公司ヲ中心トシテ日清合辦ニテ明治四十三年十一月設立セラレタルモノナリ
 其ノ後清和公司ノ解散ト共ニ章程ノ如キモ改正スル所多キモノアルニ拘ラス種々ノ事情ニ因リ設立當時ノ定款ヲ以テ運用ナシ
 シツアルモノトス

章程

第一條 本局ハ鐵嶺城内外及同地鐵道附屬地内ニ於テ電燈竝各種工場ニ電力供給ノ營業ヲ爲スヲ以テ

二五

目的トス

二六

第二條 本局ハ清和公司鐵嶺電燈局ト稱シ營業所ヲ鐵嶺ニ置ク

第三條 本局ノ資本金ハ日本貨幣十一萬圓トシ内八萬五千圓ハ清和公司ヨリ醸出シ殘金二萬五千圓ハ清國人ヨリ醸出ス資出主ノ責任ハ其ノ出資額ヲ限度トス

第四條 本局ノ資本ハ股分ヲ以テ算シ總資本金ヲ一千一百股ニ分チ每股一百圓ト定ム

第五條 本局ノ營業年限ハ創日ノ日ヨリ向フ十箇年トス但シ出資人ノ協議ニヨリ伸縮スル事ヲ得

第六條 本局ノ事業ハ清和公司監督之ヲ監督ス

第七條 本局ノ業務ヲ執行スル爲メ左ノ職員ヲ置ク共ニ各股東ヨリ推舉ス而シテ推舉ノ法ハ股券ノ多數ニヨリテ之ヲ決定ス

總辦 一名

主任 一名

事務員 若干名

第八條 總辦ハ業務ヲ總理シ營業上外部ニ對シテ本局ヲ代表ス主任ハ總辦ヲ援ケテ營業事務ヲ主管シ場合ニヨリ總辦ヲ代表ス但シ總辦ノ意志ニ違反スルヲ得ス

第九條 總辦以下各職員ノ俸給ハ別ニ定ムル所ニ據ル

第十條 本局ニ議董四名ヲ置ク内二名ハ清和公司ヨリ二名ハ清和公司以外ノ出資人ヨリ選出ス

議董ノ任期並出資人ニ對スル權利義務ノ關係ハ之ヲ選出シタル出資人ノ定ムル所ニ據ル

第十一條 議董ハ之ヲ公舉シタル出資人ヲ代表シ議董會議ニ列シ決議シ及左記各項ノ事ヲ行フ

一、業務執行カ適法ニ行レ居ルヤ否ヤヲ監視シ之ニ對シ意見ヲ述ヘ且ツ質問ヲ發シ答辯ヲ求ムルコトヲ得

二、何時ニテモ職員ニ要求シ諸帳簿及證書類ノ閱覽ヲナシ營業狀態ニ就キ説明ヲ求ムルコトヲ得

第十二條 總辦ハ營業上通常ノ事項ハ例規ニヨリ之ヲ執行スルノ權ヲ有スト雖モ事ノ重大ト思考スルモノ有ル場合ニハ議董會議ノ決議ヲ經テ施行スルヲ要ス

第十三條 議董會議ヲ召集スル場合ニハ會議期日十五日前ニ各議董ニ通知スルヲ要ス

第十四條 議董二人ノ同意ニヨリ議董會議ノ決議ヲ要スト認ムルモノアルトキハ總辦ニ要求シテ議董會議ヲ召集スルコトヲ得

第十五條 議董會議ノ決議ハ過半數ヲ以テ決ス議董ノ決議權ハ一人一箇トス

第十六條 議董ニハ議董會議ニ列スル場合ニ限り別ニ定ムル所ニ據リ手當ヲ給スル外平常俸給ヲ給セス

第十七條 清和公司ノ持分ハ之ヲ他人ニ讓與スルコトヲ得ス其ノ他ノ出資人ノ持分ハ清國人ニ限り任

二七

意ニ其ノ一部又ハ全部ヲ讓渡スルコトヲ得此ノ場合ニハ本局ニ届出スルヲ要ス

第十八條 本局ノ會計ハ清和公司總局ノ會計ト混同スルヲ得ス

第十九條 本局ニハ必要ナル諸帳簿並記録ヲ備ヘ金錢ノ收支及營業事務狀態ヲ明瞭ナラシムルコトヲ要ス

第二十條 現金ハ凡テ確實ナル銀行ニ預入レテ保管スヘシ但シ一千圓以下ハ本局金庫内ニ格納スルコトヲ得

第二十一條 總辦ハ毎年陽曆六月及十二月ノ二回諸勘定ノ決算書ヲ作り議董會議ノ決定ヲ經テ其ノ確實ナルコトヲ證明スヘシ

第二十二條 本局ノ利益金ハ左ノ方法ニヨリ配當ス

積立金 純益ノ十分ノ一

賞與金(議董及職員) 純益ノ十分ノ一

資本金配當金 純益ノ十分ノ八

第二十三條 前條ノ資本配當金ノ率五分ヲ超ユル場合ニハ先ツ五分率ノ配當金ヲ引去リ殘餘ノ内其ノ十分ノ四ヲ創立者ヘ配當シ十分ノ六ヲ配當金ニ加算ス

第二十四條 資本金ノ損益配當割合ハ其ノ出資ニ按分比例ス

第二十五條 利益金ハ損失ヲ填補シタル後ニアラサレハ分配スルヲ得ス

第二十六條 本局ハ業務執行細則ヲ別ニ定ムト雖モ其ノ内容ハ本章ノ趣旨ニ牴觸スルヲ得ス

第二十七條 本章程ノ條項ヲ改訂スル必要アル場合ニハ議董會議ニ付シ之ヲ決定ス(終リ)

奉天瀋陽馬車鐵道有限股份公司

一 梗概

營業許可 明治四十年十一月五日都督府指令第六二七號
命令條件 鐵道施設範圍奉天停車場ヨリ奉天城ニ向ヒ附屬地境界ニ至ル
營業年限十五箇年

其ノ他一般警察事項

同會社章程

名 稱 日清商辦瀋陽馬車鐵道株式會社
目 的 奉天停車場ヨリ小西城門ニ至リ更ニ城壁ヲ一週スル交通

組 織 株式有限組織

資 本 日本側株式 十分ノ四
支那側株式 十分ノ六
十九萬圓

役 員 總理 支那人 一名

取締役 支那人 三名(期限一箇年三分ノ一)
 日本人 二名(若ハ二分ノ一改選)
 監査役 支那人 若干名
 利益配當 配當 純益ノ六分
 報効金 (奉天巡警局へ)純益ノ十分ノ一
 賞與 純益ノ十分ノ二 支日六、四ノ割
 積立金 純益ノ十分ノ二
 存立期間 設立ノ時ヨリ滿十五箇年

二 命令條件

指令第六二七號

許可證

奉天瀋陽馬車鐵道有限股份公司

董事 鏡 平

明治四十年十月十日附願馬車鐵道營業ノ件許可ス

但シ別記ノ命令條件ヲ遵守スヘシ

明治四十年十一月五日

都 督 名

第一條 馬車鐵道線路ハ南滿洲鐵道株式會社奉天停車場ヨリ奉天城ニ向ヒ南滿洲鐵道株式會社鐵道附屬地境界ニ至ルモノトス

第二條 營業年限ハ十五箇年トス

第三條 此ノ命令書ヲ受ケタル日ヨリ二箇月以内ニ左ノ各號ニ準シ線路實測圖工事方法書圖面及工事豫算書ヲ調製シ當府ノ認可ヲ受クヘシ

一 軌間ノ寸法

二 軌條ノ形式重量一碼ニ付何封度以上

三 軌條敷設ノ方法(設令軌條ノ各三尺通ハ木、石砂利其ノ他適當ノ材料ヲ敷キ軌面ト道路ト高低ナカラシメ又道路ヲ橫斷シテ軌道ヲ敷設セル箇所ハ木若クハ石ヲ以テ踏切ヲ設クル等)

第四條 左ノ事項ハ決定ノ上當府ニ届出ツヘシ

一 公司事務所ノ位置

二 公司總裁及重役ノ氏名

三 清國政府又ハ奉天公共團體ニ於テ買收シ又ハ解散シ若クハ解散停止ヲ命セラレタルトキ

四 公司章程營業豫算書及株式募集章程ヲ協訂シタルトキハ其ノ寫、修正變更シタルトキ亦同シ

第五條 工事ノ全部又ハ一部竣工シ運輸ヲ開始セムトスルトキハ當府ニ届出ツヘシ

第六條 停車場ニハ馬尿溜及適當ノ下水溝ヲ設クヘシ若厩舎ヲ設クルトキハ其ノ位置構造竝設備ニ付所轄警察署ノ指揮ニ從フヘシ

第七條 乗客ノ定員、乗車賃、發車並營業時間ハ當府ノ認可ヲ受クヘシ其ノ變更ノトキモ亦同シ

第八條 夜間營業ノ場合ハ三町以上ノ距離ニ於テ容易ニ認め得ヘキ爲車輛ノ前面ニ赤燈後面ニ綠燈ヲ

點スヘシ

第九條 車輛ニハ相當ノ信號器ヲ裝置スヘシ

第十條 進行中ハ各車ノ間ニ相當ノ距離ヲ保タシムヘシ

第十一條 進行中馭者ハ馭者臺ヲ離ルヘカラス

第十二條 馭者臺ニ客ヲ佇立セシムヘカラス

第十三條 左ニ掲クル人又ハ物件ハ之ヲ乘載スルコトヲ得ス

一 泥酔者、傳染病患者、厭忌スヘキ疾病アルモノ又ハ傳染病毒ニ汚染シタル物件

二 爆發物其ノ他危險ノ虞アル物件

第十四條 乗客昇降ノ爲ニスルノ外故ナク途中ニ停車セシムルコトヲ得ス

第十五條 車輛及馬匹ハ常ニ清潔ヲ保持シ車内ノ釣革ハ時々適當ノ消毒ヲ爲スヘシ

第十六條 軌道ハ常ニ掃除散水及除雪ヲ爲スヘシ

第十七條 當府何時ニテモ軌道車輛馬匹其ノ他ノ工作物ヲ監査シ危險ノ虞アリト認めルトキハ改築修

補交換等ヲ命スルコトアルヘシ

第十八條 公益ノ爲必要ト認めルトキハ一時車輛ノ運轉ヲ停止スルコトアルヘシ

第十九條 將來定メラルル法令ノ結果又ハ公益上ノ必要アルトキハ此ノ命令條件ヲ變更スルコトアル

モ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十條 左ノ場合ニ於テハ許可ハ其ノ效力ヲ失フ

一 第三條ノ期間内ニ認可ヲ申請シ其ノ認可ヲ得サルトキ

二 全部ノ營業廢シタルトキ

三 會社解散シタルトキ

四 營業期間滿了ノトキ

三 章 程

第一節 總 則

第一條 本會社ハ株式有限會社ト稱ス資本金ハ十九萬圓ニシテ日本創立委員ヨリ株式十分ノ四計洋銀七萬六千圓ヲ募集シ清國創立委員ヨリ株式十分ノ六計洋銀十一萬四千圓ヲ募集スルモノトス

第二條 本會社ノ制定セル線路ハ奉天停車場ヨリ小西城門ニ至リ更ニ城壁ヲ一週スルヲ以テ全部ノ線路トシ工事ヲ二期ニ分テ第一期ヲ停車場ヨリ小西城門ニ至ル線路トシ第二期ハ小西城門ヨリ更ニ城壁ヲ一週スル線路トス

第三條 本會社ハ第一期ノ線路ヲ二區ニ分チ第一區ヲ停車場ヨリ小西邊門間トシ第二區ヲ小西邊門ヨリ小西城門間トス

第四條 本會社ノ倉庫及事務所ハ南滿洲鐵道附近ノ地ヲ借受ケ指定ノ範圍内ニ建設スルモノトス

第五條 本會社ノ營業規定ハ奉天將軍ノ特許條規ヲ遵守シテ公令ニ違背セサルモノトス

第六條 本會社カ規定ノ線路ヲ布設スル鐵軌ハ適當ノ方法ニ因リ奉天巡警局ノ検査許可ノ所在ニアルヲ以テ路政ヲ害セス

第七條 本會社組織完備シ行車營業開始ノ曉ハ奉天巡警局ノ管理規定ニアル罰則アルヲ以テ清日執務員ハ各自遵守スヘキモノトス

第八條 本會社成立後開ク處ノ議事會選舉會及官府ニ提出スヘキ各事項等ハ大清商法ヲ準用スルモノトス

第九條 本會社カ雇用スヘキ日本社員教習清國職員等ハ清日株主ヨリ開會選舉シ其ノ餘ノ各種勞工者ハ總テ清國創立員ヨリ採適雇用スルモノトス

第十條 清國被選舉人乃チ本社係員ハ各職務分擔上ニ於ケル規定ヲ遵守シテ侵越怠慢ノ行爲アルヘカラス

第十一條 本會社營業ノ期間ハ十五箇年トシ期間内會社ノ有スル權利ハ清日職員ニ於テ各々保護ノ責

任ヲ負擔スルモノトス

第二節 會社社員ノ職務

第十二條 本會社ハ清國創立員乃チ認定セル會社ノ總理ハ事務上監督ノ主權ヲ有シ若シ親理スル能ハサルトキハ會社事項ニ對シ代理人ヲ選定シテ總理ノ職務監督主權ノ一切ヲ承認スルモノトス

第十三條 總理ノ外取締役ヲ選ム即チ日本支配人ト稱ス取締役ハ合同第六條ニ定ムル所ニ照シ清國三名日本二名トシ其職務ハ株主ヲ代表シテ會社ノ事務ヲ協定ス社務簡易ナルヲ以テ取締役ヲ設ケス取締役ハ即チ會社内ニ常任シ業務ヲ處理スルモノトス

第十四條 取締役ノ外監査役ハ又合同第六條ノ定ムル所ニ從ヒ清日株主ヨリ各自開會選舉ス但シ此等監査役ハ工事監査ト同シク株主ヨリ選舉セシモノヲ以テ之ニ當テ會社職員以外トス

第十五條 取締役以下會計員ヲ置ク日本會計係ト稱清國三名日本二名其ノ職務ハ金錢ノ收支ヲ計算シ帳簿ニ記載スルノ職ナルヲ以テ誤謬漏脱亂雜ナルヘカラス

第十六條 切符係員ヲ置ク日本發車係ト稱日本一名清國二名其ノ職務ハ發行スル切符ノ計算賣上代金及賣上殘餘ノ切符計算ヲ管理シ清日係員各自記票簿ヲ具ヘ以テ調査ノ證トス

第十七條 清國書記員一名ヲ置ク其ノ職務ハ清國官府ニ報告スル各種公事ヲ處理シ並會社ノ開會決議ノ事項及株主名簿雇用スル勞工者ノ保證契約及報告書信ノ各事項並雇用スル清文寫字係 名ヲ管理

スルモノトス

第十八條 庶務係員ヲ置ク清國二名日本一名其ノ職務ハ會社ノ指定セル各種雜務購買並雇用スル雜役清國人一名ノ雇用ヲ管理スルモノトス

第十九條 車掌教師ヲ置ク日本ヨリ一名ヲ選用シ其ノ職務ハ發車停車ノ時刻行車ノ往來番數ヲ監督シ各車掌ヲ指揮シ並車掌ノ雇用スル清國人三十名ヲ管理ス

第二十條 馭者教師ヲ置ク日本ヨリ二名ヲ選用ス其ノ職務ハ馭者ヲ指揮シ乘車降車馬匹ノ交換休息馬役ノ馬匹飼養ヲ監視シ並飼料等ノ事項ヲ検査支配シ雇用スル馬役清國人三十名ヲ管理ス

第二十一條 以上各項雇用スル勞工者ハ總テ奉天巡警局管理行車章程ニ限定スルモノニ照シ雇用ヲ望ムモノハ總テ確實ナル商舖ノ保證ヲ俱シ原籍氏名年齢住所ヲ明記シテ出願セシムヘキモノトス

第二十二條 凡ソ會社ノ取締役ハ一年ヲ以テ期限トシ一年ノ期限滿チタルトキハ人數ノ三分ノ二或ハ二分ノ一ヲ酌留シ其ノ餘改任スヘキ人數ハ再ヒ清日株主ヨリ別ニ開會選舉ヲ行ヒ交任就任シ總理ニ此ノ酌留スルモノアルトキハ各株主ニ續任ヲ通告スルモノトス

第三節 會社處務規定

第二十三條 本會社ハ清國國家ノ保護ヲ受クルヲ以テ清國官府ノ監督命令ヲ要スルコトアルトキハ總理自ラ負擔ノ責任ヲ有スルモノトス

三六

第二十四條 本會社ハ交渉事件ノ内清國國土ニ關スル要件アルハ必ス總理ヨリ明ニ奉天ニ稟請シ處分スヘキモノトス

第二十五條 本會社ハ奉天官府ヨリ印證ノ下付ヲ請ヒ信符ヲ明ニシ總理ノ主管ニ歸ス會社ノ文書及店舖取引等ニ用キテ證ト爲シ此ノ印證無キモノハ會社ハ其ノ效力ヲ認めス

第二十六條 本會社總理ハ主管ノ權利ヲ有ス凡ソ各種職員管理ノ事項タリトモ各自任意ニ處理スヘキニアラス均シク總理ノ許可ヲ得テ後處理スヘキモノトス

第二十七條 本會社取締役ハ係員監督ノ權利ヲ有ス凡ソ係員等均シク取締役ノ監督ヲ受ケ清日取締役五名ハ係員等ヲ監督スル責任ヲ負擔シ各種係員等ニ於テ職務上不都合ノ事由アリタルトキハ取締役ヨリ總理ニ向テ其ノ理由ヲ説明シ處分スルモノトス

第二十八條 本會社會計員ハ收支ノ金錢ヲ管理スルノ職ニ當ルヲ以テ金錢出入ノ重要ナル責任ヲ有シ清日各自日記スル處ノ收支帳簿ヲ設ケ一週間毎ニ清日帳簿ヲ對照シテ錯ラサル時ハ之ヲ總帳簿ニ登入シ取締役之ヲ檢シ調印ヲ爲シ總理ニ報告ス此ノ總帳簿ハ專ラ清文ヲ用キ清國會計員ノ管理スルモノトス日本會計員モ亦日文ノ總帳簿ヲ備ヘテ登入スルモノトス

第二十九條 取締役職員ハ各自印形ヲ備ヘ検査ヲ經シ事項ハ自己ノ認印ヲ押捺シ妥當許可ノモノトナシテ證據ニ存ス都テ總理ヨリ報告スヘキモノ及總理自ラ検査ヲ行フモノハ總理又自己ノ印形ヲ押

三七

捺スヘキモノトス

第三十條 管票員ハ發車係トス其ノ職務負擔責任ハ會社收入ノ最モ重要ナルモノナルヲ以テ發車行車ノ規定以外別ニ管票員ヲ置キ日日發行ノ切符收入ヲ明白ニ計算シ日記帳簿ニ登入シ收入ノ金額ハ日々會計員ニ交付シ會計員ハ其ノ額ヲ調査シ帳簿ニ登入シ毎週管票員會計員ニ於テ帳簿ノ對照ヲ行ヒ錯ラサルトキハ取締役ノ検査調印ヲ經テ總理ニ報告スヘキモノトス

第三十一條 凡ソ會社ノ收支帳簿ハ毎週取締役ニ於テ検査ヲナスヲ以テ一定ノ規則トシテ監査役ノ検査施行ハ一定ノ期限ニ拘ハラズ各株主ヨリ臨時酌定スルモノトシ監査役モ又自由ニ施行スルコトヲ得ス

第三十二條 書記員ハ規定及規則内ニ定メタル取扱フヘキ事項ハ期ニ及テ明ニ總理ニ通告施行シ臨時處理スヘキ事項アルトキハ總理ノ命令ヲ受ク凡ソ臨時事項及循例事項ノ件處理スルモノハ原稿ヲ草シ總理ニ提出シテ後取締役ノ調査ヲ受ケ淨書捺印ノ上施行スヘキモノトス

第三十三條 庶務員ノ職務ハ會社ノ認メタル指定ノ各事項ヲ管スルモノニシテ動產不動產ヲ論セス時時検査保護ヲ加ヘ以テ危害損失ヲ防キ材料ノ購買及物品ノ整理ハ通シテ庶務員ノ負擔スル責任ニ歸シ先ニ取締役ニ明示シ認可ヲ得テ購買整理ノ分別ヲナシ購買補充ノ用款ハ傳票ヲ作り取締役ノ檢印ヲ得テ會計員ニ交付シ會計員ハ傳票ニ照シテ帳簿ニ登入ス

第三十四條 各種ノ職員ニ於テ管理スル處ノ各種勞工者ノ權限ニ於テ各該勞工者ノ行為上其ノ管理ノ方法ヲ施スコトアルヘシ若各勞工者ニ於テ不都合ノ理由アリテ職員ノ管理ヲ受ケサルトキハ各職員ヨリ總理ニ報告シテ調査ノ上進退セシムルモノトス

第三十五條 會社ハ執務時刻ヲ定メ分チテ晝夜ノ二期トシ晝ハ何時ヨリ何時ニ至リ夜ハ何時ヨリ何時ニ至ルモノトシ執務時間内ハ雜談ニ時間ヲ費スコトアルヘカラス來客アル場合ハ多クモ一時間ヲ過ルヲ得サルヲ以テ限度トス

第三十六條 清日職員ハ重要ノ職ニアルヲ以テ故ナク請假ヲナスヲ得ス疾病又ハ臨時執務シ能ハスト認ムルトキハ取締役ヨリ相當ノ人ヲ指定シ暫ク代理セシムルモノトス

第三十七條 本會社ハ營業後或ハ不適當ノ方法ニシテ人位ノ權利ヲ害スル場合アルトキハ清日各株主其ノ事由ヲ調査シ臨時議事會ヲ開キ分法ノ商訂改良ヲ決議スルモノトス

第四節 會社結算配當規定

第三十八條 本會社ハ毎年一回ノ結算ヲ限定シ結算期ニ至レハ先ニ各株主ヲ召集シ臨時一二人ノ監査役ヲ選舉シ帳簿ノ検査ヲ行フモノトス

第三十九條 會社ハ結算後利益アレハ必ス六分ノ利益ヲ行フモノトシ剩餘ナキ場合ニハ資本金ヲ移シテ利益トシテ配當スルカ如キ或ハ利益ナキノ故ヲ以テ株金ノ引出ヲ請求スル如キ等ノコトアルヘカ

ラス

第四十條 結算期ニ至テ年報ヲ作製スルニ收入總額ヨリ月月支出スル諸俸給工錢食費薪炭料雜費ノ各經費及馬匹飼料費車掌馭者ノ衣服費並馬匹ノ補充線路車輛ノ修理臨時支費ノ總額ヲ除キ餘ス所ノ金額ヲ以テ會社ノ利益トス

第四十一條 結算シテ既ニ剩餘アレハ先ツ六分ノ利息配當ヲナシ殘額ヲ餘利トシテ出シ僅カニ株式ノ利益ヲ配當スルニ足ル時ハ先ツ利益分配ヲ行ヒ公明ヲ示スモノトス

第四十二條 株式利息配當後剩餘ヲ生スレハ十分ノ一ヲ以テ奉天巡警局ニ納付シ若シ剩餘ナキトキハ實據ヲ提出スルモノトス

第四十三條 結算シテ剩利アレハ巡警局ニ納付スル一分ヲ除キ其餘ノ九分ハ均シク合同第十二條ニヨリ自由融通スルヲ得ス

第四十四條 清日職員等ハ利益ノ二分ヲ賞與シ清日資本六四ノ比例ニ照シテ各自協量シテ清國資本ニ照シ六分ヲ劈キ取締役及職員等分配シ日本ハ四分ヲ劈キ取締役及社員等ニ分配シ勞工者ニ給與セザルモノトス

第四十五條 利益ノ内二分ヲ以テ會社積立金トシ此ノ積立金ニシテ資本金ノ四分ヲ一ヲ有スル時ハ各株主會議ヲ招集シテ可否ヲ決議ニ附スルモノトス

第四十六條 凡ソ會社株式ノ拂込金營業ノ收入及會社積立金等預入スヘキ銀行ハ會議ニ附シ總理ヨリ認定シテ清日株主ノ認可ヲ經テ後取扱銀行ヲ定メ總理保管ノ責ヲ負擔スルモノトス

第四十七條 取扱銀行ニ預金後預金通帳ハ總理ノ保管スル所ニシテ會社ノ預金及引出金ハ總理ノ經理ニ歸シ預金及引出事項ハ通帳ヲ以テ證トス

第四十八條 凡ソ會社ハ一年毎ニ結算ヲ爲シ利益配當ノ後作製スヘキ年報ハ清國官府ヘ報告スルノ外清日各株主ニ報告スヘキモノトス

第四十九條 以上定ムル所ノ會社規定四節ヲ合セテ開業後總理ヨリ清日各株主ヲ招集シテ開會臨時各條規定ノ增減補足ヲ議決シ北京商都ニ報告スルモノトス

第五十條 以上定ムル所ノ會社規則ハ粗略ナルヲ以テ清日株主及職員等ハ盡ク未タ盡サルル各事項ハ總テ大清商法及前奉天將軍趙氏ノ特許條規ヲ遵守スヘキモノトス

營口水道電氣株式會社

一 梗概

名稱 營口水道電氣株式會社
目的 營口及其ノ附近ニ於テ水道事業、電氣鐵道事業、運輸事業及各種電氣事業ノ經營

設立年月	明治三十九年十一月
資本額	金二百萬圓
組織	株式組織 株數四萬株 一株五十圓
利益配當	純益金中ヨリ其ノ百分ノ五以上ノ準備金及純益金ノ百分ノ十以内ノ役員賞與金ヲ控除シタル殘餘ヲ配當ス
役員	取締役七名、監査役五名以内 取締役ノ互選ニテ社長一名、專務取締役一名ヲ置ク
存立期限	會社成立ノ時ヨリ滿十五箇年但シ更ニ協議繼續スルコトヲ得

二 定款

- 第一條 當會社ハ營口水道電氣株式會社ト稱ス
- 第二條 當會社ハ營口及其ノ附近ニ於テ水道事業電氣鐵道事業運輸事業及各種電氣事業ヲ營ムヲ以テ目的トス
- 第三條 當會社ハ本店ヲ營口日本居留地ニ置ク
- 第四條 當會社ノ存立期間ハ會社成立ノ時ヨリ向フ滿五十箇年トシ滿期ニ至リ株主總會ノ決議ヲ以テ更ニ繼續スルコトヲ得
- 第五條 當會社ノ資本金ハ二百萬圓トス
- 第六條 當會社ノ公告ハ本店所在地ノ所轄登記所ノ公告スル新聞紙ヲ以テ之ヲ爲ス
- 第七條 當會社ノ株式ハ之ヲ四萬株ニ分チ一株ノ金額ヲ五十圓トス

第八條 當會社ノ株式ハ一株券(甲種)及十株券(乙種)ノ二種トシ記名式トス

第九條 當會社株金ノ第一回拂込ハ一株ニ付金十二圓五十錢トシ株式募入決定ノ上發起人ノ通知ニ依リ其ノ指定シタル期日內ニ拂込ムモノトス其ノ殘額ハ必要ニ應シ取締役會ノ決議ニ依リ其ノ拂込ノ金額、期日及拂込場所ヲ定メ期日三箇月以前ニ株主ニ通知スルモノトス

第十條 株主株金拂込ノ期日迄ニ拂込ヲ爲ササルトキハ其ノ期日ノ翌日ヨリ起算シ拂込ム可キ金額一
百圓ニ對シ一月金四錢ノ割合ヲ以テ遲延利息ヲ支拂ヒ且ツ遲延ノ爲メニ生シタル損害ヲ負擔ス可キ
モノトス

第十一條 當會社ノ株式ヲ賣買授受スルニハ其ノ株式ノ裏面ニ買受人又ハ讓受人記名調印シ且ツ當會社ノ定ムル書式ニ據リ雙方連署シタル請求書ヲ差出スヘシ當會社ハ株式ノ裏面ニ取締役記名調印シ
買受人又ハ讓受人ニ交附スヘシ

第十二條 相續若クハ遺贈又ハ死去破産其ノ他法律命令ノ結果ニ因リ當會社ノ株式ヲ取得シタルモノ
ハ其ノ事實ヲ證明スルニ足ルヘキ書面ヲ差出シ株式ノ書換ヲ請求スヘシ

第十三條 株主ハ其ノ氏名住所及印章ヲ本會社ニ届出ツヘシ之ヲ變更シタルトキ亦同シ

第十四條 株式ヲ毀損シ又ハ紛失シタルトキハ其ノ事實ヲ證明シテ新株式ヲ請求ス可シ當會社ハ所定
ノ手續ヲ履行シタル上相當ト認めタルトキハ新株式ヲ交附スヘシ

第十五條 當會社株券ノ名義書換ハ株券一枚ニ付金五錢ノ手数料ヲ徴收シ株券ノ再交附ニ對シテハ株券一枚ニ付金二十錢ヲ徴收ス

四四

第十六條 當會社ハ公告ヲ爲シテ定時總會前三十日以内株式名義書換ヲ停止ス

第十七條 當會社ノ株主總會ハ定時總會及臨時總會ノ二種トス總會及臨時總會ノ議事ハ議決權ノ過半數ヲ以テ決ス可ク同數ナルトキハ議長之ヲ決ス

第十八條 定時總會ハ毎年五月十一月之ヲ開ク

第十九條 總會ノ議長ハ社長之ヲ任ス社長事故アルトキハ他ノ取締役之ニ代ルモノトス

第二十條 株主ハ所定ノ書式ニ依リ他ノ株主中ノ一人ニ代理ヲ委任シ株主總會ニ於テ議決權ヲ行ハシムルコトヲ得

第二十一條 株主總會ノ決議事項ハ決議録ニ記載シ議長及出席株主二名署名捺印シテ之ヲ保存ス

第二十二條 當會社ニ取締役七名以下監査役五名以下ヲ置ク

第二十三條 取締役ノ互選ヲ以テ社長一名專務取締役一名ヲ置ク

但シ場合ニ依リ社長ニ於テ專務取締役ヲ兼スルコトアルヘシ

第二十四條 取締役及監査役ハ本會社ノ株式一百株以上ヲ所有スル株主中ヨリ株主總會ニ於テ之ヲ選舉ス

第二十五條 取締役ハ就任ノ日所有株式一百株ヲ監査役ニ供託スヘシ

但シ此ノ株式ハ退任後ト雖モ其ノ在職期間ノ計算ニ付株主總會ノ承認ヲ經タル後ニ非サレハ之ヲ返

附セサルモノトス

第二十六條 取締役ノ任期ハ三箇年トシ監査役ノ任期ハ一箇年トス

但シ監査役全員缺員トナリ又取締役缺員ノ爲メ三名以下ニ減シタルトキハ臨時總會ヲ開キ補缺選舉ヲ爲ス可シ補缺選舉當選者ノ任期ハ前任者ノ殘期ヲ限トス

第二十七條 取締役及監査役ノ報酬ハ株主總會ニ於テ之ヲ定ム

第二十八條 當會社ノ總勘定ハ毎年四月三十日及十月三十一日ヲ以テ前半期間ノ出納ヲ精算シ計算書財産目錄貸借對照表事業報告書配當金分配案ヲ作成シ監査役ノ検査ヲ經テ定時總會ニ提出スルモノトス

第二十九條 當會社毎年度ノ純益金ハ準備金並役員賞與金ヲ引去リ其ノ殘金高ヲ株主ニ分配スヘシ但シ準備金ハ純益金ノ百分ノ五以上役員ノ賞與金ハ純益金ノ百分ノ十以内トス

第三十條 株主配當金ハ毎年四月三十日及十月三十一日現在ノ株主ニ之ヲ配當ス

附則

第三十一條 當會社ノ創立費用ハ金二萬圓以内トシ營業ノ初年度ヨリ漸次償却スルモノトス

四五

第三十二條 本定款ニ定ムルモノノ外總テ日本商法ノ規定ニ遵フ

第三十三條 本定款ハ日清兩國文ヲ以テ之ヲ記スモノトス

株式會社 正隆銀行

一 梗概

名稱	株式會社正隆銀行
營業種目	一 證券ノ割引及代金取立 二 爲替及荷爲替 三 預リ金及貸付 四 貯蓄預リ金 其ノ他營業ノ都合ニ依リ左ノ事業ヲ爲スコトヲ得 一 有價證券地金銀買賣及兩替 二 金銀貸、金屬、證券等ノ保護預リ 三 官衙及諸會社ノ金錢取扱 明治三十九年七月(資本金十六萬圓ヲ以テ開業ス)
設立年月	銀三十萬圓、金七十萬圓内金五萬圓ヲ以テ貯蓄預金部資本ニ充ツ
資本	本店 關東州大連
支店	支店 營口、奉天、旅順、長春、開原
組織	株式組織 株數二萬株、一株金額金五十圓、銀五十圓

株主ハ日、支兩個人ニ限ル

記名式
役員 五名乃至八名(金銀ヲ通シ五十株以上ノ持主)

監査役 二名乃至五名
頭取及事務取締役ヲ取締役中ヨリ互選

利益配當 法定積立金、純益金ノ百分ノ五
株主配當ハ役員賞與、交際費、其ノ他積立金ヲ控除シタル殘額ヲ金株式ニ對シテハ金ヲ銀株式ニ對シテハ銀ヲ以テ配當ス

存立時期 滿三十箇年
二 定款 (大正二年十一月二十六日改正)

第一章 總則

第一條 當銀行ハ大日本帝國銀行條例及貯蓄銀行條例ニ準據シ銀行一般ノ事業及貯蓄預金事業ヲ營ムヲ以テ目的トス

第二條 當銀行ハ株式會社正隆銀行ト稱ス

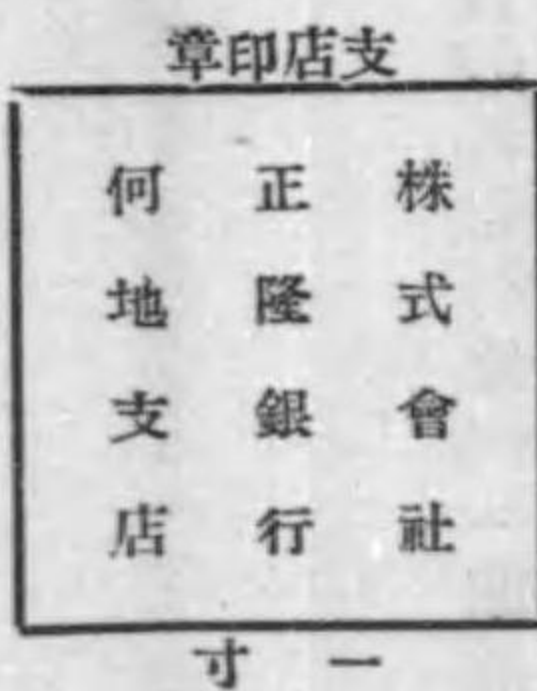
第三條 當銀行ノ資本金額ハ銀三十萬圓(橫濱正金銀行一覽拂銀券)金七十萬圓(大日本帝國金貨)合計一百萬圓トシ内金五萬圓ヲ以テ貯蓄預金部資本金ニ充ツ

第四條 當銀行ハ本支店ヲ左ノ地ニ置ク

本店 關東州大連

營口支店 支那營口
 奉天支店 支那奉天
 旅順支店 關東州旅順
 長春支店 支那長春
 開原支店 支那開原

第五條 當銀行本支店ニ於テ使用スル印章ハ左ノ如シ



第六條 當銀行ハ大連民政署ノ公示スル新聞紙ヲ以テ公告ス
 第七條 當銀行ノ存立期間ハ會社設立ノ日ヨリ滿三十箇年トス

第二章 株式

第八條 當銀行ノ株式ハ二萬株(銀六千株 金一萬四千株)ニシテ一株ノ金額ヲ(銀五十圓 金五十圓)トス
 第九條 當銀行ノ株主ハ日支兩國人ニ限ル

第十條 當銀行ノ株券ハ一株券、十株券、五十株券ノ三種トス

第十一條 當銀行ノ株券ハ記名式トシ無記名式ヲ發行セス

第十二條 當銀行ノ株式ヲ讓渡サントスル時ハ雙方株券裏面ニ署名捺印シ雙方連署ノ請求書ヲ添ヘテ當銀行ヘ差出シ株主名簿ヘ登録ヲ受ケ且ツ其ノ株券ニ取締役頭取ノ證印ヲ受ク可シ

第十三條 相續又ハ遺贈ニヨリ當銀行ノ株式ヲ取得シタルモノ正式ノ證明書ヲ添ヘテ請求スル時ハ當銀行ハ前條ニ準據シ名義書換ヲナスヘシ

第十四條 株券ヲ損傷紛失又ハ滅失シタル場合ニ於テハ其ノ事由ヲ明記シ保證人連署ノ請求書ヲ差出シ新株券ノ交付ヲ請求スル事ヲ得但シ紛失又ハ滅失ノ場合ニ於テハ請求人ノ費用ヲ以テ其ノ旨ヲ公告シ三箇月ヲ經テ尙發見セサル時ハ新株券ヲ交付スヘシ

第十五條 株券ノ分合ヲ要スル時ハ請求書ニ株券ヲ添ヘ當銀行ニ差出スヘシ

前項及第十四條ノ場合ニ於テハ新株券一通ニ付金三十錢又第十二條第十三條ノ場合ニハ一通ニ付金十錢宛ノ手数料ヲ徴收ス

第十六條 當銀行ハ株主總會前ニ於テ三十日以内相當ノ期間ヲ定メ公告シテ株券名義書替ヲ停止ス

第三章 株主總會

第十七條 定時總會ハ毎年二月八月ノ兩度ニ之ヲ開ク

第十八條 臨時總會ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ開ク

- 一、取締役會ニ於テ必要ナリト認メタル時
- 二、監査役ヨリ目的ヲ示シテ其ノ招集ヲ請求シタル時
- 三、資本金十分ノ一以上ニ當ル株主ヨリ目的及理由ヲ記載シタル書面ヲ提出シテ其ノ招集ヲ請求シタルトキ

第十九條 總會ヲ招集スルニハ會日ヨリ二週間前ニ其ノ目的事項日時、場所ヲ各株主ニ通告ス

第二十條 總會ニ於テハ豫メ株主ヘ通知シタル事項ノ外他ノ議事ニ涉ルコトヲ得ス

第二十一條 總會ノ決議ハ總株主ノ四分ノ一(代理權ヲ加算ス)以上ニ當ル株主出席シ其ノ議決權ノ過半数ニ依

テ決議ス

第二十二條 定款ノ變更及任意ノ解散ニ就テハ總株主ノ半数以上ニシテ資本金ノ半額以上ニ當ル株主

出席シ其ノ議決權ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス

第二十三條 前二條ニ定メタル出席株主定數ニ充タサル時ハ出席株主ノ議決權ノ過半数ヲ以テ假決議

ヲ爲シ其ノ旨趣ヲ各株主ニ通知シ更ニ一箇月ヲ經タル後第二回ノ株主總會ヲ開キ其ノ出席株主議決權ノ過半数ヲ以テ假決議ノ認否ヲ決ス

第二十四條 株主ノ議決權ハ金銀共一株ニ付各一箇トス

第二十五條 總會ニ於テ株主ノ議決權ヲ行フ代理人ハ當銀行ノ株主ニ限ル但シ當銀行ノ役員ハ本項ノ代理人トナルコトヲ得ス

第二十六條 總會ノ議長ハ頭取之レニ任ス若シ頭取差支アルトキハ常務取締役之レニ代ル但シ監査役ノ招集シタルモノ又ハ株主ノ請求ニヨリ招集シタル總會ノ議長ハ出席株主中ヨリ之ヲ選任スルコトヲ得

第二十七條 總會ノ議決ニ付可否同數ナル時ハ第二十二條ノ場合ヲ除キ議長ノ裁決スル處ニヨル

第二十八條 總會ニ於テ議決シタル事項ハ決議録ニ記載シ取締役及監査役各自署名捺印シテ之ヲ保存ス

第四章 役員

第二十九條 當銀行ノ役員ハ左ノ如シ

取締役 五名乃至八名

監査役 二名乃至五名

第三十條 取締役ハ金銀ヲ通シテ百株以上監査役ハ金銀ヲ通シテ三十株以上ヲ所有スル株主中ヨリ株

主總會ニ於テ之ヲ選定ス但シ得票同數ナル時ハ年長者ヲ擧ケ同年ナル時ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

第三十一條 役員ノ任期ハ取締役三年監査役二年各其ノ任期終了ノ配當期ニ關スル定時總會ノ終結ニ

至ル迄トス

但シ株主總會ノ決議ヲ以テ其ノ任期ヲ短縮スルコトヲ得

第三十二條 取締役ハ在任中ニ生シタル貯蓄預金部ノ義務ニ付テハ連帶無限ノ責任ヲ負フモノトス
但シ其ノ責任ノ退任後二箇年ノ滿了ニヨリ消滅ス

第三十三條 取締役ハ在任中自己所有ノ當銀行株式一百株ヲ監査役ニ供託スヘシ但シ其ノ株券ニ對スル預リ證ニハ融通ヲ禁スル旨ヲ明記ス

前項ノ株券ハ本人退職スト雖モ株主總會ニ於テ其ノ期ニ屬スル決算報告ノ承認ヲ得タル後ニアラサレハ之ヲ受戻スコトヲ得ス

第三十四條 取締役監査役任期中缺員ヲ生シタル時ハ株主總會ヲ開キ補缺選舉ヲ爲スヘシ其ノ補缺當選者ノ任期ハ前任者ノ殘期トス但シ缺員ニシテ法定ノ員數ヲ缺カス且ツ現任ノ役員ニ於テ業務ニ差支ナシト認定スル場合ニ於テハ其ノ旨ヲ株主へ通告シテ補缺選舉ヲ延期スルコトヲ得

第三十五條 取締役及監査役ハ任期中辭任ノ申出ヲ爲スモ株主總會ニ於テ後任者ノ選定スル迄ハ辭任ノ效ヲ生セサルモノトス但シ取締役ニ在リテハ辭任者以外ニ在任者三名以上アルトキ又監査役ニ在リテハ他ニ在任者アルトキハ辭任申出ト同時ニ辭任ノ效ヲ生ス

第三十六條 取締役ハ互選ヲ以テ頭取及常務取締役各一名ヲ定ム

第三十七條 頭取ハ定款及取締役會ノ決議ニヨリ當銀行ヲ代表シテ諸般ノ事務ヲ實行スルモノトス
頭取差支アル時ハ常務取締役之ニ代ル

第三十八條 取締役ハ當銀行内規及執務細則ヲ議定シテ之ヲ實行スルモノトス

第三十九條 取締役ハ執務ノ便宜上本店又ハ支店ニ支配人ヲ置ク事ヲ得

第四十條 監査役ハ取締役ニ對シ事業ノ報告ヲ需メ又ハ業務及財産ノ狀況ヲ調報シ且ツ株主總會ニ提出セントスル書類ヲ調査シテ總會ニ其ノ意見ヲ報告シ又ハ必要ト認ムル時株主總會ヲ招集スルコトヲ得

第四十一條 取締役ノ年俸及監査役ノ報酬ハ株主總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定メ使用人ノ給料ハ取締役會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第五章 營業

第四十二條 當銀行ノ營業種目ハ左ノ如シ

- 一、證券ノ割引及代金取立
- 二、爲替及荷爲替
- 三、預リ金及貸付
- 四、貯蓄預リ金

第四十三條 當銀行ハ營業ノ都合ニヨリ左ノ事業ヲ爲スコトヲ得

- 一、有價證券地金銀買及兩替
- 二、金銀貨、金屬、證券等ノ保護預リ
- 三、官衙及諸會社ノ金錢取扱

第四十四條 當銀行ハ前二條ノ外左ニ記載スル物件ヲ引取り之ヲ所有シ或ハ賣拂フコトアルヘシ

- 一、營業上必要ナル地所家屋什器
- 二、債務辨濟ノ爲メ引渡サレタル動産不動産
- 三、質又ハ抵當ニシテ裁判上公賣トナリタル動産不動産

第四十五條 當銀行ハ貯蓄預金拂戻ノ擔保トシテ貯蓄預金總高ノ四分ノ一以上ノ金額ヲ利付ノ國債證券又ハ地方債證券ニテ備ヘ置キ之ヲ供託所ニ預ケ入ルヘシ

但シ擔保金額カ貯蓄預金部資本金ノ半額以上ニ及フトキハ商業手形及確實ナル會社債券又ハ株式等ヲ用ウルコトアルヘシ

第四十六條 前條ノ金額ハ毎期末日現在ノ貯蓄預金高ニヨリ之ヲ定ム

第四十七條 當銀行ノ株券ハ當銀行ニ於テ之ヲ取得シ又ハ質權ノ目的トシテ之ヲ受クルコトヲ得ス

第四十八條 當銀行ノ營業時間ハ毎日午前九時ヨリ午後四時迄トス但シ營業ノ都合ニヨリ取締役ノ決

議ヲ以テ之ヲ増加スコトアルヘシ

大祭日、祝日、日曜其ノ他一般ノ休日及支那ニ於ケル大節會ハ休業ス若シ止ムヲ得サル事故アリテ臨時休業ヲ爲スコトアル時ハ豫メ所轄官廳ヘ届出テ其ノ旨ヲ公告ス

第六章 計算

第四十九條 當銀行ノ諸勘定ハ毎年二期(六月)末日ニ於テ決算シ損益計算書、財産目錄、貸借對照表、營業報告書、積立金及利益金ノ配當案ヲ作り監査役ノ調査ヲ經テ株主總會ノ承認ヲ受クルモノトス但シ損益計算ハ(六月)末日ノ相場ニヨリ銀ヲ金ニ換算シテ決算スルモノトス

第五十條 當銀行ノ損益計算ハ每期總益金ヨリ總損金ヲ差引タル額ヲ純益金トシ其ノ内ヨリ役員賞與金及交際費(純益金百分ノ十五以下)其ノ他積立金等ヲ控除シ其ノ殘額ヲ株主ニ配當ス

第五十一條 法定積立金ハ每期純益金百分ノ五以上タルヘシ但シ計算ノ都合ニ依リ別段積立金又ハ配當準備積立金等ヲ設クルコトアルヘシ

第五十二條 利益配當金ハ毎期末日現在ノ株主ニ對シ總會所定ノ割合ニヨリ金株式ニ對シテハ金ヲ銀株式ニ對シテハ銀ヲ以テ配當ス

第五十三條 商法第二百二十一條ノ場合ニ於ケル殘餘財産ノ處分ニ付テハ金銀同率ヲ以テ金株式ニ對シテハ金銀株式ニ對シテハ銀ヲ以テ分配スルモノトス

第五十四條 此ノ定款ハ大正元年八月十八日ヨリ實行ス

追加

一、明治四十四年六月十四日臨時株主總會ノ決議ヲ以テ増加シタル資本金七十萬圓ニ對スル第二回以後ノ拂込金額期日及其ノ方法ハ取締役之ヲ定ム

滿洲製粉株式會社

一 梗概

名稱	滿洲製粉株式會社
目的	南滿洲ニ於ケル麥粉ノ製造販賣並之ニ附帶シタル事業
設立年月	明治三十九年十二月
資本	一百萬圓
組織	株式組織
	株數二萬株
	一株金五十圓
株式ノ讓渡	自由
役員	社長 一名(百株以上ノ持主ヨリ)
	專務取締役 若干名(同)
	常務取締役 同(同)

監査役 同 (五十株以上ノ持主ヨリ)

存立期限 滿十五箇年
役員中ニハ中華人ナシ
株主モ殆ト全部日本人ナリ

二 定款

第一章 總則

第一條 當會社ハ南滿洲ニ於テ麥粉ノ製造販賣並之ニ附帶シタル事業ヲ營ムヲ以テ目的トス

第二條 當會社ハ滿洲製粉株式會社ト稱ス

第三條 當會社ノ資本金ハ一百萬圓トス

第四條 當會社ハ本社ヲ滿洲鐵嶺ニ置キ出張所ヲ東京ニ設ケ總會其ノ他株主ニ關スル一切ノ事務ヲ取扱フ尙出張所ハ清國其ノ他適當ノ地ニ置ク

但シ支社設置ノ時ハ株主總會ニ於テ之ヲ決定ス

第五條 當會社ノ存立時期ハ設立ノ日ヨリ滿五十箇年トス

第六條 當會社ノ公告ハ東京區裁判所ノ登記公告ニ用ウル新聞紙ヲ以テス

第二章 株式

第七條 株式ハ二萬株トシ一株ノ金額ヲ五十圓トス

第八條 株券ハ一株券五株券十株券ノ三種トシ總テ記名式トス

第九條 株金第一回ノ拂込ハ一株ニ付金十二圓五十錢トシ第二回以後ハ取締役會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第十條 株金ノ拂込ヲ怠リタル者ハ其ノ拂込期日ヨリ百圓ニ付一日金四錢ノ遲滯利息ヲ仕拂ヒ且ツ滯納ノ爲ニ生シタル損害ヲ辨償スヘシ

第十一條 株式ヲ賣買讓與シタル時ハ株券ニ名義書換ノ請求書ヲ添ヘ當會社ヘ差出シ株主名簿ニ登錄ヲ請ヒ且ツ其ノ株券ニ證印ヲ受クヘシ相續遺言強制執行其ノ他ノ理由ニ依リ株式ヲ取得セシモノハ其ノ取得ノ原因ヲ證明スヘキ書面ヲモ添付スヘシ

第十二條 株券ヲ毀損シ又ハ汚穢シタル時ハ舊株券ト引換ヘニ新株券ヲ交附ス紛失又ハ滅失シタル時ハ其ノ事實ノ證明ヲ得タル後其ノ旨ヲ廣告シ二箇月ヲ經テ尙發見セサル時ハ新株券ヲ交附ス

第十三條 會社ハ第十一條ノ場合ニ於テ株券一通毎ニ金五錢第十二條ノ場合ニ於テ同ク金二十錢ノ手數料ヲ徴收シ且ツ爲ニ要セシ費用ノ賠償ヲ請求スル事アルヘシ

第十四條 毎年定時總會前三十日間ハ株券ノ名義書換ヲ停止スル事アルヘシ

第三章 株主總會

第十五條 定時總會ハ毎年七月及一月ニ之ヲ開キ臨時總會ハ臨時必要ノ場合之ヲ開會ス

第十六條 株主ノ決議權ハ一株ニ付一箇トス

第十七條 總會ノ決議ニ付キ可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル但シ議長其ノ決議權ヲ行フヲ妨ケス

第十八條 總會ノ議長ハ社長之レニ任シ社長差支アルトキハ取締役之ニ代リ取締役全員差支ヘアルトキハ出席株主中ヨリ選任ス

第十九條 株主カ議決權ヲ行フ爲ニスル代理人ハ當會社ノ株主ニ限ル

第二十條 總會ノ決議ハ決議録ニ記載シ取締役及監査役連署捺印シテ之ヲ保管ス

第四章 役員

第二十一條 取締役ハ七人以内トシ監査役ハ三人以内トス缺員ヲ生スルモ法定ノ數ヲ缺カス且ツ事務ニ差支ナキトキハ次ノ改選期マテ補缺選舉ヲ猶豫スルコトヲ得但シ補缺當選者ノ任期ハ前任者ノ殘期トス

第二十二條 取締役ハ百株監査役ハ五十株以上ヲ所有スル株主中ヨリ選舉ス

第二十三條 取締役ノ任期ハ三箇年トシ監査役ノ任期ハ二箇年トス

第二十四條 取締役ハ社長一名及必要ニ應シ専務取締役又ハ常務取締役若干名ヲ互選スヘシ

第二十五條 取締役ハ在任中自己所有ノ當會社株式一百株ヲ監査役ニ供託スヘシ

第二十六條 取締役監査役ニハ俸給又ハ報酬ヲ支給ス其ノ金額ハ株主總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第五章 計算

第二十七條 當會社ハ毎年五月十一月ノ月末ヲ以テ計算期トス

第二十八條 當會社ノ配當ヲ受クヘキ株主ハ半期末日ノ現在株主ナリトス

第二十九條 當會社配當金ヲ通知シタル後五箇年ヲ經過スルモ之ヲ請求セサルトキハ其ノ配當金ハ當

會社ノ所得トス

第六章 附則

第三十條 取締役監査役ノ協議ヲ經テ相談役顧問役等ヲ囑託スル事ヲ得

第三十一條 株主ハ印鑑ヲ作り之ニ住所氏名ヲ記シテ當會社ニ届出ツヘシ之ヲ變更シタル時又同シ

第三十二條 外國ニ住所ヲ有スル株主ハ日本國內ニ假住所ヲ定メ當會社ヘ届出スヘシ若シ届出ヲ爲サ

サル時ハ當會社ハ其ノ發スヘキ諸般ノ通知ニ對シ一切其ノ責ニ任セサルモノトス

第三十三條 當會社ノ負擔ニ歸スヘキ設立費用ハ金三千圓以内トス

明治三十九年十二月八日創立

滿洲製粉株式會社

日清燐寸株式會社

一 梗概

名	日清燐寸株式會社
稱	株式會社
本社所在地	廣島市
支店	吉林省長春
目的	燐寸及燐寸軸木ノ製造販賣並滿洲國產品販賣
設立年月日	明治四十年
資本	株主福興德ヨリ敷地三萬坪及敷地内ノ家屋ヲ明治四十年十月十箇年ノ契約ニテ租借ス 金三十萬圓
組織	株式組織
役員	株式六千株 記名式 一株 五十圓 取締役 五名 百株以上ノ株主ヨリ選任此ノ内ヨリ社長ヲ互選ス 監査役 三名 五十株以上ノ株主ヨリ選任
利益配當	一、法定積立金 毎期利益金ノ 二十分ノ一以上 一、償却積立金 同 一、特別準備金 同 一、役員以下賞與金 同 百分ノ十以下 一、前四項ノ金額ヲ控除シタル殘額ヲ總株式數ニ平均分配ス
存立時期	滿三十箇年トス 但シ滿期後總會ノ決議ニヨリ繼續シ得

二 定 款

第一章 總 則

第一條 本會社ハ日清燐寸株式會社ト稱シ本社ヲ廣島市ニ置キ支店ヲ清國吉林省長春ニ置ク

第二條 本會社ノ營業目的左ノ如シ

一 燐寸及燐寸軸木ノ製造販賣業並清國產品販賣業

第三條 本會社ノ資本金三十萬圓トス

第四條 本會社存立期限ハ滿三十箇年トス

但シ株主總會ノ決議ニヨリ滿期後繼續スルコトアルヘシ

第五條 本會社ノ公告ハ所轄登記裁判所ノ公告ヲナス新聞紙ニ之ヲ掲載ス

第二章 株 式

第六條 本會社ノ株式ハ之ヲ六千株ニ分チ一株金五十圓トス

第七條 本會社ノ株式ハ記名式トシテ一株券、十株券、五十株券ノ三種トス

第八條 本會社ノ株金ハ第一回ノ拂込額ヲ一株ニ付金十二圓五十錢トシ第二回以後ノ拂込金ハ事業ノ成績ニヨリ株主總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定メ一箇月以前ニ株主ニ通知スルモノトス

第九條 本會社ノ株式ヲ讓渡セントスル時ハ雙方連署ノ書面ヲ本會社ニ差出シ名義書換ヲ請求スヘシ

本會社ハ直ニ株主名簿ノ書替其ノ他ノ手續ヲナスモノトス

第十條 相續遺言強制執行其ノ他法律ノ規定ニ因リ株式ノ所有權ヲ取得シタルモノハ其ノ取得事由ヲ證明シタル書面ニ二名以上ノ保證人ヲ立テ株主名簿及株券ノ書換ヲ本會社ニ請求スヘシ

第十一條 本會社ノ株券ヲ損傷又ハ亡失シタルトキハ株主ハ其ノ事由ヲ詳記シ本會社ニ届出テ新株券ノ交付ヲ請求スル事ヲ得

前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ其ノ亡失ニ係ルモノハ本會社ハ請求人ノ費用ヲ以テ其ノ旨ヲ二回以上公告シ一箇月ヲ經タル後確實ナル二名以上ノ保證人ヲ立テシメ新株券ヲ交付ス前項ノ期間内ニ於テ請求人其ノ亡失シタル株券ヲ發見シタルトキハ直ニ本會社ニ届出ヘシ本會社ハ請求人ノ費用ヲ以テ其ノ旨ヲ公告スルモノトス

第十二條 本會社ハ株券再交付ノ場合ニ於テハ株券一枚ニ付金二十錢名義書換ノ場合ニ於テハ株券一枚ニ付金五錢ノ手数料ヲ徴收ス

第十三條 本會社ノ株主ハ其ノ住所氏名並印章ヲ届ケ置クヘシ變更シタルトキ亦同シ

外國ニ居住スルモノハ其ノ旨本會社ニ届出ルト同時ニ内地居住ノ代理者ヲ定メ雙方連署ノ上届出スヘシ

第十四條 株金ノ拂込ヲ怠リタルモノハ拂込期日ノ翌日ヨリ拂込タル日マテ拂込ヘキ株金ニ對シ金百

圓ニ付一日金四錢ノ割合ヲ以テ遲延利子ヲ仕拂ヒ且ツ其ノ遲延ノ爲メニ生シタル費用ヲ辨償スヘシ

第十五條 本會社定時總會前三十日以内ノ期間ヲ定メ之ヲ公告シテ株式名義書換ヲ停止スルコトヲ得

第三章 取締役及監査役

第十六條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

取締役 五名

監査役 三名

第十七條 取締役ハ一百株以上監査役ハ五十株以上ノ株主中ヨリ之ヲ選任ス

第十八條 取締役ノ任期ハ滿三箇年監査役ノ任期ハ滿二箇年トス但シ滿期再選スルコトヲ得

第十九條 取締役又ハ監査役ニ缺員ヲ生シタルトキハ臨時株主總會ヲ開キ補缺選任ヲナスヘシ此ノ場合ニ於ケル就任取締役又ハ監査役ノ任期ハ初任者ノ殘期間トス取締役又ハ監査役ニ缺員ヲ生スルモ法定ノ人員ヲ缺カス事務差支ナキトキハ次回ノ選任期迄之ヲ延期スル事ヲ得

第二十條 取締役及監査役ノ報酬額ハ株主總會ニ於テ之ヲ定ム

第二十一條 取締役ハ在任中各其ノ所有ノ株式一百株ヲ監査役ニ供託スヘシ

第二十二條 取締役ハ互選ヲ以テ社長一名ヲ選任ス

第二十三條 社長ハ本會社ヲ代表ス

第四章 株主總會

第二十四條 株主總會ハ定時臨時ノ二種トス

定時總會ハ毎年三月九月ノ兩度ニ之ヲ開ク

臨時總會ハ取締役又ハ監査役ニ於テ必要ト認ムルトキ及資本金十分ノ一以上ノ株主ヨリ會議ノ目的事由ヲ明示シテ開會請求アリタルトキ之ヲ開クモノトス

第二十五條 株主議決權ハ一枚ニ付一箇トス

第二十六條 總會ニ於テハ株主ニ通知シタル事項ノ外他ノ議事ニ涉ルコトヲ得ス

第二十七條 總會ノ決議ハ資本ノ半額以上ニ當リタル株主出席シ其ノ出席シタル株主ノ議決權ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス

第二十八條 株主カ議決權ヲ行ハシムル代理人ハ本會社ノ株主ニ限ル但シ其ノ代理人ハ代理權ヲ證スル書面ヲ本會社ニ差出スヘシ

第二十九條 總會ノ通知ハ其ノ開會ノ場所日時及總會ノ目的及決議スヘキ事項ヲ記載シ二週間以前ニ招集通知ヲ株主ニ發スヘシ

第三十條 總會ノ議長ハ社長之ニ任シ事故アルトキハ他ノ取締役之ニ代リ取締役事故アルトキハ出席株主中ヨリ議長ヲ選舉スヘシ

第三十一條 總會ノ議事録ニハ議長監査役及出席株主三名以上記名捺印スヘシ

六六

第五章 計算

第三十二條 本會社ノ計算ハ毎年三月ヨリ八月マテヲ前半期トシ九月ヨリ翌年二月マテヲ後半期トス
毎期財産目録貸借對照表營業報告書損益計算書株主配當金並準備金ニ關スル議案ヲ作り監査役ノ檢
査ヲ經テ株主總會ニ提出スルモノトス

第三十三條 本會社諸積立金及利益ノ配當ハ左ノ順序ニヨル

一、法定積立金 毎期利益金ノ二十分ノ一以上

一、償却積立金 毎期利益金ノ二十分ノ一以上

一、特別準備金 毎期利益金ノ二十分ノ一以上

一、役員以下賞與金 毎期利益金ノ百分ノ十以下

一、株主配當金 前四項ノ金額ヲ控除シタル殘額ヲ總株式數ニ平均分配ス

第三十四條 本會社ノ利益配當ヲ受クヘキ株主ハ每半期末日ノ現在株主トス

明治四十年七月八日

瓦房店電燈株式會社

一定 款(大正三年八月二日創立總會ノ議決ヲ經タルモノ)

第一章 總則

第一條 當會社ハ瓦房店附屬地及其ノ附近ニ於テ電燈及電力供給ノ營業ヲナスヲ以テ目的トス

第二條 當會社ハ瓦房店電燈株式會社ト稱ス

第三條 當會社ハ本社ヲ瓦房店ニ設置ス

第四條 當會社ノ資本金總額ハ金五萬圓トス

第五條 當會社ノ公告ハ所轄登記所ノ登記公告ヲナス新聞紙ニ掲載ス

第二章 株式及株主

第六條 當會社ノ株式ハ記名式ニシテ一千株ニ分チ株券ヲ十株券及一株券トシ一株ノ金額ヲ金五十圓トス

第七條 當會社ノ株主ハ定款ヲ承知シ其ノ株式ヲ引受ケ株主名簿ニ氏名ヲ登録ス

第八條 株式ヲ移轉スルニハ株券裏面ノ相當欄及當會社所定ノ名義書換請求書ニ記名捺印シテ名義ノ書換ヲ請求スヘシ

六七

相續又ハ遺贈ニ依リ株式ヲ取得シタル者ハ其ノ事實ヲ證スヘキ書類ヲ名義書換請求書ニ添付スヘク又裁判ノ結果ニヨリテ取得シタル者ハ判決ノ謄本ヲ添付スヘク氏名變更ノ場合亦同シ

第九條 株式名義ノ書換ハ株主名簿ニ株式移轉ノ登録ヲナシ株券裏面ニ移轉ノ年月日ヲ記入割印シ取縮役記名捺印シテ之ヲ證スヘシ

株式ノ移轉ハ前項ノ手續終了後ニ非サレハ當會社ニ對シテ其ノ效力ナキモノトス

第十條 株主名義ノ書換ハ毎年四月一日ヨリ及十月一日ヨリ其ノ月ニ開會スル株主總會終了ノ日迄之ヲ停止ス

前項ノ外尙停止ノ必要アル時ハ豫メ公告スヘシ

第十一條 株券ヲ汚損シタルトキハ請求ニ依リ新ナル株券ト交換スヘシ亡失ノ時ハ保證人連署ノ亡失保證書ヲ提出シ請求者ノ費用ヲ以テ三種以上ノ新聞紙ニ公告シ三十日ヲ經テ異議ナキ時之ヲ交附ス

第十二條 株主名義書換ノ手数料ハ株券一枚ニ付金五錢トシ新タニ株券交付ノ手数料ハ株券一枚ニ付金二十錢トス

第十三條 株主ハ住所及印鑑ヲ當會社ニ届出スヘク住所印鑑等ヲ變更シタル時亦同シ但シ無能力者ハ其ノ法定代理人前項ノ手續ヲナスヘシ

第三章 株主總會

第十四條 定時株主總會ハ毎年四月及十月ニ開會ス

第十五條 臨時株主總會ハ必要ニヨリ臨時開催ス

第十六條 株主總會ニ於ケル議決權ハ一株ニ付壹箇トス

第十七條 株主ノ代理權ハ他ノ株主ニ委任狀ヲ以テ委任スルニ非サレハ行使スルヲ得ス

第十八條 株主總會ノ議長ハ社長又ハ取締役トシ議決ハ多數決ニ依ル可否同數ノ時ハ議長之ヲ決ス

第十九條 株主總會ノ議事ハ其ノ概要ヲ議事録ニ掲載シ議長及株主二名以上捺印シテ保存ス

第四章 株金拂込

第二十條 株金ノ拂込ハ第一回拂込ヲ金十二圓五十錢トシ以後ノ拂込金額及期日ハ必要ニ應シ取締役之ヲ決定通知スヘシ

第二十一條 株主カ株金ノ拂込ヲ延滞シタル時ハ拂込金額百圓ニ付一日金四錢ノ延滞利息ヲ徵收シ尙商法ノ規定ニ依リ處分スヘシ

第五章 取締役及監査役

第二十二條 當會社ハ株主總會ニ於テ取締役五名以內監査役三名以內ヲ選舉シ社務ヲ執行監査セシム

第二十三條 取締役ノ所有スヘキ株式數ハ二十株以上監査役ノ所有スヘキ株式數ハ十五株以上トス

第二十四條 取締役ノ任期ハ滿三年監査役ハ滿二年トス

但シ補缺選舉セラレタル取締役及監査役ノ任期ハ前任者ノ殘期トス

第二十五條 取締役及監査役ニ缺員ヲ生スルモ商法ノ規定ニ違反セス且ツ會社ノ業務ニ差支ナキ時ハ

次ノ總會迄補缺選舉ヲナササルコトヲ得

第二十六條 取締役ハ互選ヲ以テ社長一名ヲ選舉ス社長ハ會社ヲ代表シテ業務ヲ執行ス

第二十七條 取締役及監査役ノ報酬ハ總會ノ決議ニ依リ之ヲ定ム

第六章 計算

第二十八條 當會社ノ會計ハ毎年四月ヨリ九月迄ヲ上半期トシ十月ヨリ翌年三月迄ヲ下半期トス

第二十九條 毎年度ノ純益金中ヨリ左ノ割合ニ依リ分配シタル殘額ヲ其期末日現在ノ株主ニ配當ス

但シ利益金ノ一部ヲ次期ニ繰越スコトヲ得

純益金百分ノ十以上 積立金

同 百分ノ十以内 役員賞與金

第三十條 株主カ三箇年ヲ經ルモ株主配當金ヲ受取ラサル時ハ會社ノ所得トス

後編

支那會社法ト外國人

但シ補缺選舉セシキハ取締役及監査役ノ任期ハ前任者ノ殘期ニス

第二十五條 取締役及監査役ハ決員ヲ生スルニ商法ノ規定ニ違ハセシキハ會社ノ業務ニ差支ナキ時ハ

次ノ總會迄補缺選舉ヲササハルコトヲ得

第二十六條 取締役ハ五選ヲ以テ社長一名ヲ選舉ス社長ハ會社ヲ代表シテ業務ヲ執行ス

第二十七條 取締役及監査役ノ報酬ハ總會ノ決議ニ依リテ之ヲ定ム

第六章 計算

第二十八條 當會社ノ會計ハ毎年四月ヨリ九月迄ニ主簿ヲ以テ之ヲ算シ三月迄ヲ下半期トス

第二十九條 毎年度ノ純益金中ノ左ノ割合ニ依リ分配セラルル應得ノ其期ハ日現在ノ株主ニ配當ス

但シ利益金ノ一部ハ次期ニ繰越スコトヲ得

純益金百分ノ十以上 積立金

同 百分ノ十以内 役員賞與金

第三十條 株主ハ三箇年ヲ經テモ株主配當金ヲ受取ラザル時ハ會社ノ所得トス

後編

支那會社法ト外國人

本編ハ支那會社ニ關スル一切ノ法規並參考資料ヲ蒐集シタルモノナリ支那會社法ニハ新舊ノ變遷アリ
又支那ノ産業ニハ外國人ノ關係多ク特ニ會社組織ニ關シテハ錯綜セル問題尠カラス故ニ本編ハ會社法
ノ沿革ト外國人關係トニ付キ要領ヲ説明セリ所說正鵠ニ中ラサルモノハ他日は正スヘシ

大正三年九月二十七日

交渉局第一課 眇田熊右衛門

支那會社法ト外國人

目次

第一章 緒言	七五
第二章 舊會社法(公司律)	七六
第一節 公司律ノ沿革	七六
第二節 公司ノ種類及性質	七七
第三節 公司ノ設立	八一
第四節 公司律實施後ノ公司設立情況	八一
第三章 新會社法(公司條例)	八五
第一節 公司條例ノ沿革	八五
第二節 公司ノ種類及性質	八七
第三節 公司ノ設立	九〇
第四節 餘論	九一
第四章 支那會社法ニ於ケル外國人	一〇一

第一節 外國會社……………一〇一

第二節 外國人ハ支那會社ノ株主又ハ社員タルコトヲ得ルヤ……………一〇四

第三節 外國人ノ所有株數ヲ制限スル會社……………一一八

第四節 外國人ノ株主又ハ社員タルコトヲ得サル會社……………一二〇

第五節 會社ノ社員又ハ株主タル權利ト支那内地居住營業權……………一二二

第五章 合辦事業ノ意義……………一二三

附錄參考書……………一二九

支那會社法ト外國人

第一章 緒言

文明國ニ於ケル産業ノ發達ハ生産要素タル資本ノ合同集中ニ依テ始メテ之ヲ期シ得ヘキハ茲ニ贅說スルマテモナク夫ノ個人資本ノ經營ハ既ニ中世ニ於テ合名組織ノ企業ニ移リ近世ニ於ケル大企業ハ盡ク株式組織ノ形式ニ依ルノ趨勢ニ徴シテ明ナリ支那ハ無限ノ豐富ナル天産ヲ擁シ四億萬ノ多數ノ人口ヲ控エ所謂自然ト勞力トニ於テハ充實餘リアルニ拘ハラズ産業ノ發達遲々トシテ振ハサル所以ノモノハ何ソヤ其原因一ニシテ足ラズト雖モ資本合同ノ方法不完全ナルハ蓋シ其ノ主因タラスンハアラス東洋諸國ノ常態トシテ支那モ亦國トシテモ個人トシテモ資本ノ貧弱ナルハ云フヲ俟タス然レトモ今若シ支那人ニシテ克ク資本ノ合同組織ヲ實行シ大企業ヲ經營スルヲ得ルニ至ラハ産業ノ發達、國本ノ培養必シモ難キニアラサルヘシ抑モ支那ニ會社組織ノ起リシハ前清光緒二十九年ニ公司律ノ制定アリシニ始マル其ノ以前ニ在リテハ資本ノ合同ハ之ヲ合夥、合夥、聯財ト稱シ親族親友ノ數人者間ニ行ハレ合同ノ範圍極メテ狭ク資本額亦少カリシモノニシテ其ノ法律上ノ性質ハ稍今日ノ合名會社組織ニ似タルモノナレトモ何等明文ノ規定アルニアラス單ニ漠然タル慣習ニ依テ之ヲ律セルニ過キスシテ其ノ内外ニ對スル法律關係ハ合名會社ノソレノ如ク爾カク明確ナルモノニアラス但シ此ノ種ノ合同組織ハ其ノ流

行ノ範圍今尙甚タ廣ク店舗ノ稍大ナルモノハ多ク皆之ニ準據シテ經營スルヲ常トス臺灣總督府ニテハ同島ニ我商法ヲ施行シ大規模ノ新事業ハ皆盡ク商法ノ會社組織ヲ採用セリト雖モ在來支那人ノ商工業ニシテ合股組織ニ依ルモノハ之ヲ維持獎勵スルノ方針ヲ執リ多年研究ノ結果臺灣合股令ヲ制定セリ想フニ近ク其ノ實施ヲ見ルニ至ルヘシ蓋シ個人事業ト商法ノ會社事業トノ中間ニ位スル合同事業ニ付支那人從前ノ慣習ヲ保存シ之ヲ利用シテ産業ノ開發ニ遺憾ナカラシメントスルモノタリ支那公司律ハ光緒二十九年來本年マテ繼續施行セラレシカ民國政府ハ本年一月新ニ公司條例ヲ制定セリ其ノ内容ハ我商法ノ會社編ノ規定ト殆ト同一ナリ本法ハ本年九月一日ヨリ實施セラレ之ニ依テ不完全ナル從前ノ公司律廢止セラレタリ以下章ヲ分テ新舊會社法ノ内容ヲ敘述シ其ノ外國人ノ關係如何ニ説及スヘシ

第二章 舊會社法

第一節 公司律ノ沿革

公司律トハ會社法ノ義ナリ前清光緒二十九年(明治三十六年)支那政府ハ對外貿易發達ノ趨勢ニ促カサレ商事行政ヲ振興シ商事法ヲ制定シテ新ニ資本合同ノ途ヲ啓キ大ニ産業ヲ振興セントセリ即チ同年中央政府ニ新ニ商部ナル一省ヲ設ケ商律及其ノ附屬法ヲ制定發布セシメタリ公司律ハ即チ商律ノ一部ナリ商部ノ新設商律ノ編纂ニ關シ光緒二十九年三月二十五日上諭ヲ下シテ曰ク
通商惠工ハ古今經國ノ要政タリ積習相沿フテヨリ工商ヲ視テ未務ト爲ス國計民政日ニ益貧弱ナルハ

未タ始メヨリ此ニ因ラスンハアラス亟ニ變通利ヲ盡シ意ヲ講求ニ加フヘシ前ニ政務處ノ議覆ニ據リ載振ヨリ商部ヲ設ケンコトヲ奏請シ業ニ降旨允准ヲ經タリ茲ニ載振、袁世凱、伍廷芳ヲ派シ先ツ商律ヲ訂シ則例ヲ作爲セシメ商律編成奏定ヲ俟テ後即チ大員ヲ特簡シ商部ヲ開辦セン其應ニ如何カ努力工藝ヲ提唱シ商情ヲ鼓舞スヘキヤ一切ノ事宜ハ均シク載振等悉心妥議シ旨ヲ請フテ施行シ總テ官習ヲ掃除シ一氣ニ聯絡スルヲ期シ絲毫モ隔關アリ弊端ヲ啓クヲ致スヲ得ス保護維持尤モ應サニ餘力ヲ遺ササレ庶クハ商務振興蒸蒸日上リ民財ヲ阜ニシテ邦本ヲ培シ厚望アルニ幾カラシ此ヲ欽メヨ次テ同年七月十六日上諭ヲ下シテ商部衙門ノ大官ヲ任命シ同十二月商律ノ編纂成リテ奏定頒布セリ之ヲ大清欽定商律ト云フ是レ實ニ支那ニ外國風ノ法典アル濫觴ニシテ西洋法理輸入ノ第一著歩ナリ日清役後光緒帝ハ新進ノ青年ヲ採用シ銳意變法自強ノ策ヲ講セラレ舊習ヲ打破セントセシニ不幸ニシテ其ノ志ヲ達セス爾來政權再ヒ西太后ヲ中心トスル一派ニ移リ守舊主義ヲ實行セシモ大勢ノ推移ハ阻止スルニ由ナク茲ニ先ツ商律ノ發布ヲ見ルニ至レルモノトス
商律ハ商人通例九箇條公司律百三十一箇條ヨリ成ル(參考)極メテ簡單ナルモノニシテ文明國ニ於ケル所謂商法法典ノ全部ニアラス主眼ハ公司律即チ會社法ノ規定ニ在リテ存ス

第二節 公司ノ種類及性質

公司律ハ十一節ヨリ成ル(一)公司ノ呈報、創辦呈報法(二)股分(株式)(三)股東權利各事宜(株主ノ權利)(四)董

事(取締) (五) 查賬人(監査) (六) 董事會議 (七) 股東會議 (八) 賬目(算計) (九) 更改公司章程(定款)(改正) (一〇) 停閉(解散) (一一) 罰例是ナリ 公司律ノ各節各條ニ就キ詳説スルハ煩雜ニ渉ルノミナラス本法ハ既ニ本年九月一日ヨリ廢止セラレタルヲ以テ今公司ノ種類及性質ニ付概説スルニ止ムヘシ
公司律ハ公司ヲ四種ニ分テリ如左

一、合資公司

二、合資有限公司

三、股分公司

四、股分有限公司

第一 合資公司

合資公司ハ二人又ハ二人以上資ヲ集メテ營業シ一名號ヲ公取スルモノニシテ(公司律第五條) 合資人ハ公司ノ債務ニ付無限責任ヲ負フ(公司律第三一條) 本公司ハ其ノ本質我商法ノ合名會社獨逸法ノ Offen-gesellschaft 英國法ノ Partnership ニ該當スルモノノ如シ但シ公司律カ本公司ノ内外關係ニ關シテ規定スル所僅々二三箇條ニ過キササルヲ以テ其ノ詳細ヲ説明スルニ由ナシ既言ノ如ク支那ニ於ケル從前ノ資本合同ハ合股聯財等ノ名ノ下ニ親族又ハ朋友間ニ行ハレ其ノ組織ハ略合名會社ニ似タルモノタリ茲ニ云フ合資公司ノ如キハ蓋シ舊慣ヲ明文ニ現ハシタルモノト云フヘシ舊慣上ノ合股組織ハ述ヘテ臺灣總督府舊慣調査會

第三回報告書臺灣私法第三編下卷ニ詳ナリ又此ノ舊慣ヲ活用セントスル立法ハ該府法案審査會ノ臺灣合股令草案理由書ニ之ヲ盡セリ支那全國ヲ通ジテ本公司ノ性質ヲ有スル資本合同ハ無數ニシテ各城市ノ大店舖ハ概ネ此ノ組織ニ依ラサルナシ此種ノ合同ニシテ後ニ述フル公司註冊章程即チ會社登記法ニ依テ登記セララルモノハ其僅少部分ニ過キササルヘシ

本公司ハ其ノ合同ノ範圍ハ親族朋友間ノ如キ仲間ニ限ラルルヲ常トスルテ以テ二三萬圓以下ノ小規模ノ營業ニ適スルモ大資本ヲ要スル企業ニハ適當ナラス

第二 合資有限公司

合資有限公司トハ二人又ハ二人以上資ヲ集メテ營業シ所集ノ資本ヲ以テ限ト爲スコトヲ聲明スルモノヲ云フ(公司律第六條) 本公司ハ株式ヲ發行セサル有限責任ノ資本合同ナリ其ノ類例ヲ外國法ニ求ムレハ英國ノ私會社 private company 竝獨逸ニテ有名ナルシューメンズ、シツケルト會社ノ準則トスル有限責任會社 Gesellschaft mit beschränkter Haftung (一八九九年法律) ニ似タル所ナキニアラスト雖モ此ノ二者ハ寧ロ株式會社ノ一變態ナルヲ以テ本公司ニ適切ノ例ニアラス唯我國舊商法第三百三十六條ニ規定セル合資會社ハ新商法ト異ナリ社員全部有限責任タルコトヲ得ヘキモノナルヲ以テ略ホ本公司ニ當ルモノノ如シ三菱合資會社ノ如キハ此ノ種合資會社中ノ有名ナルモノナリ

備考

舊商法第三十六條

社員ノ一人又ハ數人ニ對シテ契約上別段ノ定ナキトキハ社員ノ責任カ金錢又ハ有價物ヲ以テスル出資ノミニ限ルモノヲ合資會社トス

新商法第四條

合資會社ハ有限責任社員ト無限責任社員トナ以テ之ヲ組織ス

商法施行法第三十八條

商法施行前ニ設立シタル合資會社ニハ舊商法ノ規定ヲ適用ス

第三 股分公司

股分公司トハ七人又ハ七人以上ヲ集メテ營業ヲ創辦スルモノニシテ(公司律第十條)附股人即株主ハ公司ノ債務ニ付無限責任ヲ負フ(公司律第三二條)本公司ハ資本ヲ株式ニ分テル無限責任會社ナリ從來英國法ニ存スル無限責任會社 unlimited company ノ僅カニ之ニ比スヘキアルノミニシテ其ノ他ノ外國法ニハ其ノ類例ヲ見ス

第四 股分有限公司

股分有限公司トハ七人又ハ七人以上ヲ集メテ營業ヲ創辦シ資本若干此ヲ以テ限トナスコトヲ聲明スルモノヲ謂フ(公司律第一三條)本公司ハ我商法ノ株式會社大陸法ノ Aktien gesellschaft 英國法ノ limited company ニ相當スルモノトス資本ヲ證券ニ變形シ財產ヲ動化スルカ如キ資本ノ合同組織ハ支那法上未タ曾テ是有ラス本公司ノ如キハ全ク外國ノ制度ヲ輸入セル新現象ナリトス

第三節 公司ノ設立

公司律第二條ニ曰ク「凡ソ公司ヲ設立シ商部ニ赴キ註冊スル者ハ須ラク創辦公司ノ合同、規條、章程(以上ハ定款ニ該當ス)等ヲ將テ一概ニ呈報シ商部ニ存案セシムヘシ」ト即チ公司ノ設立ニハ商部ニ登記スルコトヲ要スルモノタリ登記ノ手續ニ關シテハ公司註冊試辦章程(參考第二條)ニ之ヲ規定ス然レトモ登記ノ效力ハ之ニ依テ會社成立ノ效力ヲ生スル絶對的ノモノニアラス又之ニ依テ第三者ニ對抗力ヲ生スル相對的ノモノニモアラス各公司ハ總テ合同即チ定款ノ作製ニ依テ成立スルモノノ如ク唯登記セサル結果ハ登記後十五日ヲ經サレハ開業スルコトヲ得サルト(公司律第七條第一二條第二〇條)有限責任ノ公司ハ登記セサル以前ハ會社財產ノミヲ以テ其ノ責任ヲ免ルル有限ノ特典ヲ主張スルヲ得サルト(公司律第九條第二九條公)ニアリ故ニ公司ハ之ヲ登記スルコトヲ要シ且罰金ヲ科シテ之ヲ強制ス(公司律第一二六條ノ五)ト雖モ公司ノ成立ト何等ノ關係アルニ非ス畢竟一種ノ行政手續タルニ過キサレモノトス

第四節 公司律實施後ノ公司設立情況

日清戰役以後數年ナラスシテ團匪ノ亂アリ一再ナラス割地賠款ノ屈辱ヲ受ケ清國ハ恰モ租上ノ一樹タ

リ是ニ於テ始メテ自國ノ積弱ヲ自覺シ諸般制度ノ改革ト共ニ大ニ實業ヲ振興シテ國本ヲ培養シ外國ノ經濟的壓迫ヲ抵排セントセリ左レハ當時殖産興業ニ關シ大詔ノ煥發官民ノ上奏枚舉ニ違アラス一世ノ人心漸ク其ノ歸向ヲ新ニセントセリ公司律ノ制定モ亦此ノ氣運ノ醸成セル產物ニ外ナラス先是光緒二十九年四月二十七日ノ上諭ニ曰ク

上諭ス商部奏ス各省ニ於テ路礦農務工藝各項ノ公司ヲ設立セント擬ス請フ各將軍督撫ヲ飭シ會同籌辦セシメラレシコトヲト現在商務ヲ振興スルハ全ク官商一氣ニ連絡シ信ヲ以テ相孚シ内外力ヲ合セテ維持シ廣ク董勸ヲ爲シ以テ日ヲ期シテ起色アラントスルニ在リ各省將軍督撫ハ商部ノ擬設セントスル各項ノ公司ニ付會同籌畫シ悉心經理セヨ並其ノ管下ノ道府州縣ニ飭シ隨時詮議保護セシムヘシ倘推諉因循スルアラハ該部即チ實ニ據テ奏聞ヲ行ヒ壅蔽ヲ力除シ稍遷就スル毋レ此ヲ欽メヨ

上諭ノ趣旨ハ各地方官ニ全力ヲ擧ケテ會社設立ニ從フヘク又人民ヲ保護獎勵スヘシト云フニ在リテ以テ政府力在來ノ個人經營ニテハ到底頹風ヲ力挽シ事業ヲ振興セシムルコト不能ナルコトヲ自覺シ會社組織ノ必要ヲ痛切ニ感シタルモノナルヲ知ルヘシ次テ同年九月獎勵華商公司章程ナル規則(光緒三十三年七月十三日改訂)ヲ發布シ會社設立ニ功勞アル者ニ榮譽ヲ錫ヒ人心ヲ鼓動セリ即チ此ノ規則ニ據レハ資本金五十萬元以上乃至五千萬元以上ヲ醜集スル者ヲ十二級ニ分チ最上ハ商部頭等顧問官ニ列シ頭品頂戴雙龍金牌ヲ特賜シ子孫三代其ノ世襲ヲ准サル以下集資額ニ應シテ等差アリ於是會社設立ノ舉四方ニ起リ先後奏

獎セララル者甚多シ盛京省大凌河牧廠ノ開墾ヲ目的トセル天一墾務公司創辦人李厚祐ノ如キ亦此ノ時功ヲ以テ四等議員ニ列セラレタリ

如是獎勵ノ下ニ成立セル會社ノ數並資本額如何、此ノ點ニ關シテハ正確ナル統計ノ據ルヘキナシ光緒三十四年(明治四十四年)農工商部ノ第一回統計ニ徵スルニ光緒二十九年十二月公司律實施以來同三十四年乃至五年間ニ會社設立ノ數及資本額左ノ如シ

第一	類別	箇數	資本	
			資	本
農事會社	二四	三、三〇四、二〇〇	二、八五八、五〇〇	
工業會社	八九	一、一三二、五三〇〇	八、二〇四、〇〇〇	
商事會社	一七	九、五〇〇、〇〇〇	六、一五〇、〇〇〇	
合計	一三〇	二四、二九、五〇〇	一七、一七七、五〇〇	

即チ會社數百三十三ニシテ其ノ資本金合計約我五千萬圓餘ニ當ルモノトス又東亞同文會調查部前記年間統計ニ據ルニ左ノ如シ

第 二		第 一	
類 別	箇 數	資 本	額
工 業 會 社	二二六	三五、一九九八〇〇	一〇、七一七、〇〇〇
農 業 會 社	一七	一、四九五、〇〇〇	九、六三〇、三〇〇
鑛 業 會 社	一一	二、〇二〇、〇〇〇	一、七四〇、〇〇〇
交 通 業 會 社	一八	六三、〇九〇、八一〇	一、三〇五、〇〇〇
合 計	一七二	一〇一、八〇五、六一〇	一五、一一〇、五〇〇
			三〇〇、三〇〇

右ニ依ルトキハ會社數百七十二ニシテ其ノ總資本額約我一億二千五百萬圓餘ニ當リ此ノ中株式有限會社即チ股分有限公司百二十九ノ大多數ヲ占ム
宣統元年度ニ於ケル登記會社數及資本額ヲ見ルニ左ノ如シ

第 一	第 二
農 業	農 業
種 類	種 類
會 社 數	資 本 額
一	一、〇〇〇、〇〇〇

第 三		第 二	
類 別	箇 數	資 本	額
工 業 會 社	一八	二五、二九八〇〇	四、五三八、三六〇
商 業 會 社	一五	一、一四三、〇〇〇	四四三、〇〇〇
鑛 山 業 會 社	三	五、三二〇、〇〇〇	
海 運 業 會 社	四	五、〇〇〇、〇〇〇	一、一五〇、〇〇〇
金 融 業 會 社	三	四、〇〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
其 他 業 會 社	一	四〇〇、〇〇〇	
合 計	四四	一四、〇三四、五〇〇	六、五九六、三六〇

右ニ依レハ宣統元年度ニ於ケル設立會社數ハ四十四ニシテ總資本額約我二千七百萬圓ニ當ルモノタリ
以上表中假ニ第二ト第三トヲ以テ實際ニ近キモノトシ之ヲ合算スレハ光緒二十九年ヨリ宣統元年ニ至
ル支那會社數ハ二百十六ニシテ其ノ總資本額ハ約我一億五千二百萬圓餘ニ相當ス而シテ宣統二年以後
現在ニ至ル會社設立ニ關スル情況ハ不明ナルモ此ノ間ハ革命政變ニ際シ新事業ノ勃興少カリシモノト
見ルヘク假リニ多少ノ會社設立セラレタリトスルモ結局總資本額二億萬圓ニ達セサルモノト觀レハ大
過ナカラシカ

備考 大正元年末ニ於ケル我會社數ハ一萬三千八百八十七ニシテ其ノ拂込資本金十七億五千六百六十一萬〇四百四十一圓ナ

第二章 新會社法

第一節 公司條例ノ沿革

支那ノ新法典編纂方針ハ前清政府ニテハ民律商律等總テ完全ナル法典トシテ編纂施行スル主義ヲ執リ
民律草案、商律草案等既ニ脱稿シタリシモ民國政府ハ法典主義ヲ棄テ各部分ヲ分離シ單行法トシテ制
定發布スル主義ヲ執レリ是レ蓋シ完全ナル大法典ノ編纂ハ至難ニシテ長年月ヲ要シ其ノ間時急ニ應ス
ル能ハサルヲ感シタルカ爲メナラン左レハ民法ノ如キモ前清ノ民律草案ヲ改訂スルコトヲ止メ各種ノ
單行條例ヲ制定セントシ現ニ既ニ修訂ニ著手セルモノハ法人通例、法律行爲條例、時效條例、契約條
例、買賣條例、繼承條例、婚姻條例等ナリト云フ商法モ亦此ノ主義ニ基ツクモノノ如ク先ツ公司條例、
商人通例ヲ單行法トシテ發布セリ

民國三年一月十三日ノ大總統令ニ曰ク

前ニ國務院ノ呈稱セル大政方針內應ニ辦スヘキ各事適用スル所ノ法律ハ立ロニ籌施シ再ヒ緩フスヘ
カラス先ツ擬訂ヲ行ヒ現行條例ヲ作爲シ提前頒布スルコトヲ准サンコトヲ請フトノ案ハ業ニ決裁ヲ
經テ案ニ在リ今茲ニ國務總理熊希齡、農商總長張謇ノ呈稱ニ據ルニ前清ノ農工商部ハ各商會編成ス
ル所ノ商法調査案ヲ採取シ復タ修訂ヲ加ヘ定メテ商律草案ト爲ス之ヲ前清通行ノ商律ニ較スルニ増

シテ二百餘條多シ頗ル完備セリ今擬ス公司律ノ一部ヲ將テ公司條例ト改稱シ現行條例ノ一ト爲シ凡
ソ二百五十一條請フ先ツ其ノ頒布ヲ行ハン其ノ施行細則及商人通例商事條例等諸關係法規ハ仍ホ農
商部ヨリ擬訂シ頒布ヲ呈請セントス云々ト查スルニ公司條例ハ目前切要ノ需ニ係ル應サニ即チ頒布
スヘシ其ノ施行細則及商人通例商事條例等ノ案ハ即チ農商部ヨリ趕速擬訂シ頒布ヲ呈請セヨ所有前
清舊商律ハ即チ新條例施行ノ日ニ於テ廢止ス此ヲ合ス

同月同日教令第五十二號ヲ以テ公司條例二百五十一條ヲ發布シ其ノ施行期ハ施行細則ヲ以テ之ヲ定ム
ルコトトセリ(政府公報民國三年一月十四日第六〇六號)次テ同年三月二日教令第二十七號ヲ以テ商人通例七十三條ヲ發布シ同
年七月十九日教令第三百三號ヲ以テ商人通則施行細則(參考)教令第四百四號ヲ以テ公司條例施行細則(參考)
教令第五百五號ヲ以テ商業註冊規則(參考)教令第六六號ヲ以テ公司註冊規則(參考)其ノ他公司註冊規則
施行細則(民國三年八月十七日農商部令參考第一〇)商業註冊規則施行細則(同上參考)ヲ發布シ商人通例公司條例ト共ニ此等ノ細
則及規則ハ民國三年九月一日ヨリ一齊同時ニ實施スルコトトナリ前清大清欽定商律及其ノ附屬法令ハ
此ノ日ヲ以テ廢止セラル

第二節 公司ノ種類及性質

公司條例ハ我商法會社編ノ規定ト殆ト同一ナルヲ以テ特ニ詳説スルノ必要ナシ故ニ前同様公司ノ種類
性質ニ付キ略説スルニ止ムヘシ

公司條例ニ依レハ公司ハ左ノ四種トス(公司條例
第二條)

一、無限公司

二、兩合公司

三、股分有限公司

四、股分兩合公司

第一 公司通有ノ性質

公司ハ總テ法人トス(第三條)舊商律公司律並其ノ他現在マテノ法律中ニ法人ノ觀念ヲ明示セルモノナシ本條例初メテ明文ニ之ヲ掲ク會社ヲ總テ法人ト爲シ合名會社ノ如キニ至ルマテ之ヲ法人トスルノ可否ハ姑ク別問題トシ從前法人ノ觀念支那法ニ曖昧ナリシ爲メニ惹起セラレタル問題ハ以來大ニ減少スルコトヲ得ヘシ例ヘハ舊商律ハ公司ハ法人ナルコトヲ明言セサリシヲ以テ外國人カ支那内地ニ在ル支那人ノ組織セル會社ノ株主タルコトヲ得ルヤ否ヤニ付疑ナキニアラサリシカ今後ハ外國人ト外國人ノ關係スル支那法人トハ截然區別セラレ外國人モ支那法ノ下ニ法人ヲ組織シ支那内地ノ事業ニ關係スルコトヲ得ルニ至ルヘシ

公司トハ商行爲ヲ營業トスル目的ニテ設立セル團體ヲ謂フ(第一條)商行爲ヲ營業トスト云フハ商人通例第一條ニ記載スル十七種ノ行爲ヲ營ムモノニシテ此ノ外公司條例施行細則第一條第二項ニ據レハ營利

事業ヲ以テ目的トシ組織セル團體ニ付テハ法令ニ別ニ規定アル場合ヲ除キ公司條例ヲ準用スルモノタリ故ニ結局我商法第四十二條ノ規定ト同意ニ歸ス舊商律ニ在リテハ凡ソ商務ヲ經營シ貨物ヲ貿易買賣販運スル者ハ均シク商人ト爲ス(商人通例
第一條)ト云ヒ凡ソ資本ヲ集湊シ貿易ヲ共營スル者名ツケテ公司ト爲ス(公司律
第一條)ト云ヒ其ノ措辭漠然トシテ公司ノ目的トスル所甚タ不明ヲ免レス其ノ貿易ト云フハ單ニ商事取引ニ限ルモノナル否ヤ疑アリシモ實際ニ於テハ農工商其ノ他一切ノ營利事業ハ皆公司ノ目的ト爲スコトヲ得タルモノノ如ク開墾ヲ目的トスル公司ノ如キモ亦公司律ノ支配ヲ受ケタリ新商人通例及新公司條例ノ規定ハ此ノ點ニ於テ極メテ明晰ナルモノト云フヘシ

公司ハ其ノ本店所在地ノ官廳ニ登記シタル後ニ非サレハ第三者ニ對抗スルヲ得ス(第六條)是レ舊公司律ト異ナリ登記ニ私法上ノ相對的效力ヲ認メタルモノトス又公司ハ本店所在地ノ官廳ニ登記シタル後ニアラサレハ開業ノ準備ニ著手スルヲ得ス(第五條)登記後六箇月内ニ開業セサルトキハ官廳ノ職權ヲ以テ又ハ檢察官ノ請求ニ因リ解散セラル(第七條)ルコト我商法ノ規定ト異ナルコトナシ

第二 各公司ノ性質

一、無限公司 無限公司ハ我商法ノ合名會社ナリ條例第三十五條ニ「公司所有ノ財產其ノ虧欠各款ニ抵補スルニ足ラサルトキハ股東ハ應ニ連帶シテ清償ノ責任ヲ負フヘシ」トアルハ本會社ノ特色ニシテ名ツケテ無限公司ト云フ所以ナリ本條ハ我商法第六十三條ノ規定ト同文ナリ

二、兩合公司 兩合公司ハ我商法ノ合資會社ナリ條例第八十條ニ「兩合公司ハ無限責任股東ト有限責任股東トヲ以テ之ヲ組織ス有限責任股東ハ額定ノ出資ヲ以テ限ト爲シ公司ニ對シテ其ノ責任ヲ負フ」トアルハ即チ我商法第四百條ト同文ニシテ兩合公司ノ本質ヲ明ニセルモノナリ

三、股分有限公司 股分有限公司ハ我商法ノ株式會社ニ當リ條例第二百二十六條ニ「各股東ノ責任ハ其ノ原認或ハ接受セル股分ノ銀數ヲ激清スルヲ以テ限ト爲ス」トアルハ即チ我商法第四百十四條ト同文ニシテ股分有限公司ノ本質ヲ規定セルモノトス

四、股分兩合公司 股分兩合公司ハ我商法ノ株式合資會社ナリ條例第二百三十條ニ「股分兩合公司ノ股東ハ至少一人無限責任ヲ負ヒ其ノ餘ハ各所認ノ股分ニ就キ數ニ照シテ款ヲ公司ニ繳ス」トアルハ我商法第二百三十五條ト同意ニシテ本公司ノ特質ヲ明ニセルモノトス

以上ハ四種ノ會社ノ性質ナリ此ノ外公司條例ニ掲クル所ハ略我商法會社編ノ條文ト大差ナキヲ以テ一ニ茲ニ説及セサルヘシ

第三節 會社ノ設立

第一 成立

無限公司及兩合公司ハ定款ノ作成ニ因リ成立シ(第九條第一〇條第一八條第一二條) 股分有限公司ノ設立ハ所謂資本確定主義ヲ原則トシ發起人カ株式總數ノ引受ヲ爲シタルトキ(第一〇條) 發起人カ株式總數ヲ引受ケサルトキハ株

主ヲ募集シ創立總會ヲ終結シタルトキ(第一一條) ニ成立ス 股分兩合公司ハ創立總會ノ終結ニ因リテ成立ス(第二三條)

(八條)

第二 登記

會社ノ設立ハ登記スルコトヲ要スルモ登記ハ會社成立ノ要件ニアラスシテ第三者ニ對抗スルコトヲ得ル相對的效力ヲ生スル要件タリ(第六條第一一條第八三條) 公司注册規則ニ依レハ會社ノ設立登記ハ之ヲ縣知事ニ申請シテ其ノ注册ヲ爲シ縣知事ヨリ道尹、道尹ヨリ巡按使、巡按使ヨリ農商部ニ順次注册ノ旨ヲ轉送シテ農商部之ヲ核准シ執照ヲ發給シ政府公報ニ登載シテ公布スルモノトス(公司注册規則第二條公司注册規則施行細則第一條)

第三 舊公司律ニ依テ成立セル會社

公司條例施行前成立ノ會社ハ公司條例施行ノ日ヨリ公司條例ヲ適用スヘク新條例ト違犯シ又ハ遺漏アルモノハ公司條例ニ準シテ之ヲ改正スヘキモノトス(公司條例施行細則第二條第四條)

第四節 餘論

新公司條例ハ之ヲ從前ノ公司律ニ比スレハ霄壤ノ別アリ蓋シ會社法トシテ完全ニ近キモノト云フヲ妨ケス然レトモ各民族ニハ牢固トシテ拔ク可ラサル習性アリ又文明ノ程度ニ等差アリ支那人ノ性格ト支那今日ノ民智ヲ以テシテ果シテ能ク法規ヲ遵守シ會社組織ノ事業ヲ遺憾ナク遂行スルコトヲ得ヘキヤ疑ナキヲ得ス今其ノ二三ノ點ヲ舉ケンニ(一)凡ソ團體的ノ共同事業ハ團體其ノ自體ト之ヲ組織スル箇

員トノ間ニハ截然タル人格上ノ區別ヲ畫スルヲ要シ又團體ノ事業ヲ遂行シ團體ヲ代表スル者モ團體ノ機關タル自己ト箇人トシテノ自己トハ公私資格ノ異ナルモノナルコトヲ自覺セサル可ラス支那人ノ性格ハ果シテ克ク此ノ任務ニ適スルヤ殊ニ株式會社ノ如キ大資本團體ニ在リテハ數百乃至數千ノ多數株主ハ盡ク法律定款ノ命スル義務ヲ履行シテ怠慢ナキヲ期シ得ヘキカ其ノ取締役監査役ヲ信賴シテ何等紛擾ヲ起ササルヲ得ヘキカ又取締役監査役タル者モ果シテ忠實ニ會社ノ事務ヲ遂行シ公私ヲ混淆スルノ弊ナキヲ得ヘキカ(二)支那人ハ箇人ノ自治ハ極端ニ發達セリ然カモ團體ノ自治觀念ハ頗ル薄弱ナルヲ免レス之ヲ政治ニ徵スルニ代議制ニ敗レ地方自治制ニ蹶ツキ所謂民主政體ハ全然不成功ニ終レリ之ヲ事業ニ徵スルモ鐵道鑛山ノ如キ大經營ハ專ラ政府、外國人之ニ當ルカ又ハ官商合辦ニアラスンハ成立セス是レ支那人カ大ナル公共事務ニ適セサルモノナルコトヲ證明スルモノニアラスシテ何ソヤ(三)支那人ハ從來箇人營業ノミ馴レ單純ナル收支計算ニハ熟セルモノアラシテ何ソヤ(四)現在支那ノ法制ハ尙甚不備ニシテ僅カニ刑法典ノ見ルヘキアルノ外民法ナク、民事、刑事ノ訴訟法具ラス司法裁判ノ制度ハ盡ク暫行法規ノ不完全ナルモノニ依テ運用セラルルモノタリ之ヲ經濟上ノ制度ニ見ルニ銀行法アルモ著實ナル商業銀行起ラス況ンヤ起業金融ヲ目的トスルモノニ於テヤ工場抵當法、社債信託法ナシ、懋遷公司(取引所)ハ政府ニ其ノ議アルモ實施未タシ凡ソ此ノ種ノ缺陷ヲ舉ケ來リテ將來ヲ豫想スルトキハ支

那會社法ノ前途尙遠ナリト云フヘシ

具體的ニ考慮スルニ今日ノ支那人ニハ合名會社即チ公司條例ノ所謂無限公司ハ最モ適當ナル組織ナルヘシ蓋シ此ノ組織ハ從前合股、聯財、合夥ト稱シテ親族、朋友間ニ行ハレ來リシモノニ外ナラス而シテ此ノ組織ハ支那古來ノ家族制度家產主義ニ胚胎シ父祖死スルモ子孫ハ其ノ家產ト營業トヲ分割セス共同ニ之ヲ存守スル慣習ニ起因セルモノナルヲ以テ公司條例ノ無限公司ナルモノハ敢テ易俗移風ニアラス唯其ノ名ノ新ナルノミニシテ其ノ實ハ舊慣ヲ明文ニ現ハシタルモノニ外ナラス要之支那ハ資本合同ノ制度ヨリ云フトキハ歐洲中世ノ合名會社時代ニ在ルモノト云ハサル可ラス後ニ舉クル如ク支那人ニシテ支那ノ今日ハ公司條例ノ會社中無限公司ヲ先ツ行ヒ次テ兩合公司ニ移ルヲ可トスヘキモノナルニ拘ハラス條例ハ無限公司ヲ兩合公司ニ改組スヘキ規定ヲ缺キタルハ支那ノ事情ニ適セスト論スルモノアリ蓋シ至言ナリ我改正商法ノ第八十三條ノ二乃至三ヲ條例ニ省キタルハ其ノ何ノ理由タルヲ知ラス株式會社ハ資本團體ノ模範ナルヲ以テ資本維持ニ關スル主義ハ極メテ嚴格ニ維持シ財産ノ評價特ニ減價銷却 Depreciation ヲ厲行シ依テ債權者ヲ保護シ且所謂蝕配當ヲ嚴禁セサル可ラス支那會社ハ果シテ克ク此ノ弊ヲ矯正シ得ルヤ我邦ノ營利會社ト雖モ常ニ此ノ弊ヲ免レス左レハ明治四十四年我商法ノ改正ニ當リ政府ハ特ニ株式會社ニ關シ獨逸商法ニ倣ヒ會社財産ノ評價ニ關シ適切ナル條文ヲ置キ減價銷却ニ付「繼續シテ營業ノ用ニ供スル財産ニ付テハ前項ノ規定ニ拘ハララス其ノ取得價格又ハ製作價格ヨ

リ相當ノ減損額ヲ控除シタル價額ヲ附スルコトヲ得」トノ規定ヲ設ケントセシモ此ノ原案ハ貴衆兩院ニ於テ全然排斥セラレ僅カニ商業帳簿ノ第二十六條ニ於テ「財産目錄ニハ動産不動産債權其ノ他ノ財産ニ價額ヲ附シテ之ヲ記載スルコトヲ要ス其ノ價額ハ財産目錄調製ノ時ニ於ケル價額ニ超ユルコトヲ得ス」ト修正セリ支那ニ於テハ會社組織ニ際シ「官利 (Guaranteed or Fixed mini) 卜稱シテ豫メ一定率ノ利益配當ヲ爲スヘキコトヲ會社定款ニ記載シ以テ世人ノ利己心ヲ挑發シ株式ヲ募集スル惡弊アリ是レ各會社ノ常態ニシテ抑モ蝸配當ノ因ヲ作ルモノタリ會社事業ニシテ果シテ豫想ノ如ク成功セハ可ナリト雖モ然ラスンハ不當ニ財産ヲ評價シ強テ利益ヲ假裝シテ官利ノ配當ヲ爲ササル可ラサルニ至ルヘシ今官利ニ關スル支那會社ノ定款ヲ示スニ例ヘハ左ノ如シ

- 一、奉天沿海線絲工廠簡章第四條ノ庚號ニ
本廠股金周年給息四厘凡繳股金在初一日以後者由十五號起息在十五號以後由下月一號起息
- 二、奉天商業銀行招股暫行章程第十三節ニ
本銀行集股時於開辦一月前登報廣告某月某日爲交股期由付進之日起算每週年發給股息六釐
- 三、試辦奉天第一農林會社簡章第十九條ニ
股本官利議定常年八釐
- 四、吉林長嶺縣天利農林蠶牧股分有限公司章程第四十五條ニ

本公司商股週年以七厘行息從入股之日起至第一賬期止、發息一次嗣後按年發息一次均於次年二月開會時憑息摺支取

如右會社カ未タ事業ニ著手セサルニ先テ配當ヲ豫定スルカ如キハ資本維持ノ主義ヲ破壞シ株式會社ノ本質ニ矛盾スルノモノナリ新公司條例ニハ此ノ類ノ弊害ヲ除去スルニ足ルヘキ規定ナキニアラス即チ第八十三條ニテ法定積立金(公積金)ヲ強制シ第八十四條ニ損失ヲ彌補シ且ツ法定積立金ヲ提存シタル後ニアラサレハ利益配當ヲ爲スコトヲ得スト規定シ第八十六條ニテ建設利息 *Bauzins* ノ配當ヲ認メタルモ年六釐ヲ超過スルヲ得ス且ツ監督官廳ノ許可ヲ經ルヲ要件トセリ又商人通例第二十七條ニ公司ハ設立註冊ノ時及毎結賬期ニ財産目錄及貸借對照表ヲ造具スヘキコトヲ強制シ其ノ財産ノ評價ニ付テハ左ノ如ク規定セリ

前項ノ動産不動産債權及其ノ餘ノ財産ハ目錄ヲ造具スル時ニ於テ現時ノ價格ヲ附記ス
時價ニシテ原價ヨリ高キトキハ須ラク其ノ原價ヲ記シ價格不明ナルモノハ即チ其ノ估計ノ價ヲ記シ其ノ索取シ能ハサル債權ハ之ヲ削除ス

右ハ獨逸商法第四十條ノ一部第二百六十一條ノ一部ヲ取り綴リ合ハセタルモノニシテ之ニ據リテ幾分過當ナル財産ノ評價ヲ防キ蝸配當ニ類スル官利ヲ間接ニ禁止シ得ヘキニ似タリト雖モ若シ此等ノ規定ヲ嚴格ニ履行スルトキハ恐ラクハ株式募集ニ應スルモノ少カラシ

左ニ掲クルハ支那人王焜富ナルモノカ支那ニ於ケル株式會社設立ニ關スル惡弊ヲ述ヘテ合名會社ノ適當ナルヲ論シ延テ合名會社ヲ合資會社ニ變更スル規定ノ必要ニ説及シタル一文ナリ

(前略)不觀乎我國之情形乎。前清公司律之出亦已久矣。其股份有限公司之組織。亦全效法他國者也。然而其不假官力之提倡而成者幾何。其不仰官力之補助而成者幾何。其成而卓然有效者又幾何。以吾之所見所聞。除全國信用所歸之數公司外。今日一廣告。明日一傳單。無非某某股份有限公司之發起也。甚至往來奔走。四出演說。其激昂之慨。至一城而全城爲之動。臨一市而舉市爲之靡。發起者非不熱心也。其卒也。至於偃旗息鼓。匿迹銷聲。求一註冊而不可得。問之則切齒痛恨於認股者有人而繳股之無人也。此其一。或者華其居室。美其形式。竊人之名而告於衆曰。吾業之成。如操左券。吾利之厚。如掘金穴。不知者亦遂轉相傳述。靡然從風。其究也。業未成而資已罄。事甫就而人已渺。如是者。非發起者好爲騙詐之行也。特以人民之識力未深。不能不壯其觀聽以耀之。高其官利以誘之。故鋪張需費。付息需費所集之款。未耗於營業先耗於敷衍。此實發起者不得已之苦心也。特款盡之後。無以爲濟。不能不自卸責之法耳。豈其初心哉。此其二。其他光怪陸離之事。筆不勝述。一次失敗之後。繼起者更難。此實吾國最惡之現象也。噫此豈其制之本不善耶。他國行之何以易如反掌乎。然則我國商業實力之不充。法制觀念之猶淺。彰彰無可掩矣。

夫股份有限公司之於我國。驟難期其徧行。既如上所述矣。然則能徧行於我國者。將爲何種公司乎。

吾敢毅然曰。無限公司也。蓋我國老於經商者。多無資金。有資金者又必得素相信託之老於經商者而後肯出其資。故二者之結合。如磁之吸鐵。無待接合也。然無限公司雖易通行。而其制既極幼稚。則立法者不能聽其終於幼稚而不爲之計也。其計維何。即規定無限公司可變爲兩合公司。是也。無限公司之成。易於兩合公司。而兩合公司之用。則廣於無限公司。苟以無限公司開其業。則事無不舉。再改爲兩合公司以廣其用。則利可期其宏。何以言之。無限公司既以個人相結合。自可量力而出資。又可量資而營業。無取乎鋪張。無慮乎虛糜。以之營業。業何患其不成。及成效稍著。苟欲擴充營業。則可改爲兩合公司以吸收資金。吸資於成效已著之後。爲事必易。既見成效。又得巨資。以之致利。利何患其不宏乎。然則此項變更之規定。審情度勢。實不可缺者也。今公司條例於此獨付缺如。其意果何在乎。

或曰。無限公司祇宜於規模狹小之事業。絕不能以之開創大規模之事業也。何則。大規模之事業。大都開創之費重。營業之費輕。而無限公司之股東。出資不必盡爲財產。即以財產出資者。又不必一時盡爲現金(如債權是)其初既無巨資爲其基。而欲以之開創大規模之事業得乎。故不如以兩合公司開創而以無限公司營業之爲愈。此所以公司條例許兩合公司變爲無限公司。而不許無限公司變爲兩合公司也。是說亦非不切事理者也。然大規模之事業。固有非無限公司之所能開創者矣。然同一事業。其規模可大可小者。恆居多數。既有可大可小之事業。即有由小而大之徑途。由小而大者。如液

之化氣。稍加以熱即可。一舉手之勞耳。故有以大規模爲目的。而先營小規模以爲試驗者。亦有小規模既見成效。而臨時改爲大規模者。凡此皆取其駕輕就熟。而可免股分有限公司暴起暴滅之弊也。營小規模者。莫如無限公司。由小規模而擴充爲大規模者。莫如由無限公司而變爲兩合公司。因勢利導。策莫善於此矣。且以我國之實情觀之。苟無限公司不能開其業。雖謂爲我國商人所不能開之業。不爲過也。此等事業。必其資本之流通者少。固定者多。故其開創之時。需資極巨。如鐵道業海運業等是。此於今日之我國。苟任商人之自爲興辦。而政府毫不爲之援。是無異責孺子而舉烏獲之鼎。鮮克有濟也。故此事業。於商業幼稚時代。實政府之責。非所以望於一般之商人者。既不能望於一般商人。更何能望於無限公司。公司條例之頒布。固期其行於一般之商人者也。而無限公司改爲兩合公司。實今日我國一般商人之所最宜者也。然則又烏可因其不能勝此巨任而不之許乎。或又曰。無限公司苟欲增其資。自可加入無限責任股東。若許其加入有限責任股東。則其於虧欠時。難免不借此爲彌補之計。是所增之資。適以填其漏卮。安能望其爲擴充營業之用乎。此論亦警悟之慮。然無限公司變更之時。自當照合併之例。作財產目錄及借貸對照表。並須通知其債權者。如是。則盈虧之情。無從諱。隱苟有虧。欠自無出資之人。固不必爲之總總過慮也。至謂可加入無限責任股東一層。不知無限責任股東之加入。關係較重。雙方皆難協意。且無限責任股東過多。亦非公司之利。實不如加入有限責任股東之爲得也。

且也。無限公司既不能發行公司債。又不能加入有限責任股東。則其金融實無伸張之餘地。金融不能伸張。事業何由發達。夫於我國最易通行之公司。而無發達之道。其於我國商業前途之阻礙。爲何如乎。然則公司條例中。無無限公司變爲兩合公司之規定。得毋昧於我國之實情耶。抑倉卒告成未暇深審耶。至吾獨主張無限公司可變爲兩合公司。而不主張股分有限公司變爲股分兩合公司者。則以股分兩合公司之制。原非盡善。而由股分有限公司變爲此制。既非如兩合公司變爲無限公司及股分兩合變爲股分有限之爲不得已之計。又不能如無限公司變爲兩合公司之有所作用。故無取乎紛更也。又左ニ掲クニ S. R. Wigel 氏カ最近ノ著書「支那經濟事情」ニ於テ支那產業ノ振ハサル所以ヲ論シ資本合同組織ノ起ラサル其ノ一原因ナリト説キ且ツ資本合同組織ヲ阻害スル數多ノ原因ニ説及セル論文ノ一節ナリ

As for general and industrial advancement, the Chinese are not altogether to blame for the very poor and slow progress they have made. It is necessary for me to repeat that the fundamental difficulty with all industrial progress in China, or in most of the Asiatic countries, is the want of capital. Co-operation for business purposes is practically unknown in China to-day; and where there has been such, it is unfortunately only too true that those who had the control or the management proved to be, in nine cases out of ten, men of a very undesirable type. While the Chinese merchant is usually a very straight forward man,

the temptations that are put in his path, when he is able to control money belonging to the corporation, are so great that he has not, as a rule, been able to resist them. Moreover, he has no proper conception of his responsibilities when he has the direction of the affairs of a public corporation. On the other hand, when he does his own business, he realizes to the fullest extent the responsibility vis a vis himself. There is no mutual trust as there is in Europe. The situation is partly to be accounted for by the nature and methods of the Government. The laws are not sufficiently wide or advanced enough to apply to cases arising out of modern industrial development, and whenever the Government saw a big industrial concern or a large accumulation of capital for any purpose, it never hesitated to make as much out of it as possible—although the result of these exactions were known to be such as to wreck the business of the public company. The Chinese do not know accountability or auditing of any kind. In individual business, all sums earned go to profit, and all sums spent go to loss, and the expenses of management of individual business being so small—and depreciation almost unnecessary—the profit and loss account is easily adjusted. But to apply the same to public Companies is simply courting disaster.

第四章 支那會社法ニ於ケル外國人

第一節 外國會社

支那カ列國商工業ノ競争舞臺タルヨリシテ外國法ニ依テ成立シ外國法ニ據テ營業スル會社ニシテ支那ニ本店又ハ支店ヲ有スルモノ其ノ數甚多シ銀行、航海、其ノ他ノ工業上大規模ノ經營ヲ要スルモノハ皆此等會社ノ占ムル所タラサルハナシ然ルニ支那ニハ未タ內國會社ト外國會社トノ區別ヲ明ニスル原則的法規ナク從テ外國會社ノ取締ニ關スル規定モナシ公司條例、公司註冊規則等ニ何等之ニ關スル明文ヲ存スルナシ其ノ結果現在支那ニ於テ外國法ニ準據シテ成立シ又營業スル各會社ナルモノハ依然外國法ニ依テ支配セラレツツアルモノトス此ノ種ノ會社ニ付テハ他日更ニ研究スル所アルヘシ

本年六月中日本人ト支那人トノ合同組織ニ成ル中日實業株式會社(中日實業有限公司)成立セリ民國三年七月一日ノ政府公報ニ掲載セル該會社ノ定款廣告ヲ見ルニ前文ニ

本公司於六月二十二日蒙農商部批准註冊並發給執照一紙在案茲將本公司章程全份及協議節略董事會決議錄等各要件公布如左

トアリテ該會社ハ支那法ニ據リ支那ニ於テ設立セラレタルモノノ如シ左レハ該會社ハ日本商法上外國會社ナレトモ會社定款(參考第一四)第四條ニ

本公司設本店於日本東京市。在中國設總營業所於北京。並設分營業所於上海

トアリテ本店ヲ日本東京ニ設クル結果、商法第二百五十八條ノ「日本ニ本店ヲ設ケ又ハ日本ニ於テ商業ヲ營ムヲ以テ主タル目的トスル會社ハ外國ニ於テ設立スルモノト雖モ日本ニ於テ設立スル會社ト同

一ノ規定ニ從フコトヲ要ス」トノ規定ニ據リ日本ニ於テハ該會社ハ支那ニ設立セル外國會社ニシテ尙日本商法ノ支配ヲ受ケ商法株式會社ノ規定ヲ適用セラルルモノトス但シ日本商法カ内外會社ノ區別ニ本店所在地主義ヲ取レルモノト解スルトキハ本會社ハ當然日本內國會社ナリ

滿洲ニ於テ日本人ノミヲ以テ組織シ又ハ日本人ト支那人トノ合辦組織ニ成ル會社ニシテ日本商法上內國會社ナリヤ將タ外國會社ナリヤ疑ハシキモノナキニアラス今一々各會社ニ就キ批評セス要スルニ問題ハ次ニ述フル原則ニ據テ決セラルヘキモノタルヘシ

會社ノ國籍ヲ定ムル標準ハ數多アリ而シテ日本商法第二百五十八條ノ規定ニ付テモ本條ハ如何ナル主義ヲ採用シタルヤニ付異說アリ今日日本商法カ採用セル主義ノ如何ニ付テノ說明ハ之ヲ學者ノ著書ニ譲リ唯左ノ數原則ヲ擧ケテ在滿洲日本人關係會社ノ籍ヲ決スル標準ノ參考ト爲スヘシ

一、日本商法カ設立地主義ヲ採用シタリトセハ日本ニ於テ設立セラレタル會社ナルトキハ假設其ノ本店ヲ滿洲ニ有シ其ノ營業ヲ專ラ滿洲ニ於テ行フトモ日本商法上ノ內國會社ナルヘシ

二、日本商法カ本店所在地主義ヲ採用シタリトセハ日本ニ本店ヲ置カサル在滿洲ノ會社ハ日本商法上ノ內國會社ニアラス但シ日本商法上ノ內國會社ニアラストスルモ日本ノ法令ニ依テ支配セラルル會社存スルコトアリ例ヘハ關東州ニハ商法ハ法律トシテ直接ニ行ハルルニアラス勅令ノ内容トシテ行ハルルモノタリ又特ニ或會社ノ爲メニ制定セル商法以外ノ法律命令ノ存スルコトアリテ會

社ハ直接ニ此等ノ法令ニ準據シテ設立セラレ間接ニ商法ノ規定ニ據リテ營業スルコトナキニアラサルナリ東京地方裁判所カ明治四十二年七月中東洋拓殖會社ニ關シテ下シタル判決ハ此ノ點ニ付參考ト爲スニ足ルモノアリ左ニ録ス

會社ノ國籍ヲ定ムル標準ニ付テハ從來種々ノ主義行ハルト雖モ我商法ハ內國會社ノ定款ニハ本店ノ所在地ヲ掲グルコトヲ同法第五〇條第一〇六條第一二〇條第二〇三條ニ於テ規定シ又同法第四五條第四六條ニハ會社カ設立セラレタルトキハ其ノ本店ノ所在地ニ於テ登記スヘク之ヲ怠リタルトキハ其ノ成立ヲ以テ第三者ニ對抗スルヲ得ス又開業ノ準備ニ著手スルヲ得サルモノトシ公法人ニ對シテモ我民法第三七條第三九條第四五條ニ於テ同一趣旨ノ規定ヲ設ケタリ要スルニ會社成立ノ實ヲ完フセントスルニハ登記ヲ必要トスルモノナルコト明カナリ茲ニ所謂登記トハ非訟事件手續法ニ規定セル我登記機關ノ登記ヲ指スモノナルコト論テ俟タス內國會社ノ本店所在地ハ必ス我國版圖内ニ限ルヘキモノニシテ我商法ハ輒近國際私法學問者ニ普通行ハルル會社ノ國籍ハ其ノ本店ノ所在地ニ依リ定ムヘシトノ主義ヲ採用シタルモノナリ

本件東洋拓殖會社並東洋拓殖會社ノ定款ニヨレハ其ノ本店ヲ韓國京城ニ置キ且同國ニ於テ拓殖事業ヲ營ムヲ以テ主タル目的トスルモノナルニ依リ前示ノ理由ニ基ツキ之ヲ內國會社ト稱スルヲ得ス或ハ會社ハ法律ノ擬制ニヨリ成立スルモノナルヲ以テ其ノ國籍モ亦其ノ準據法ニ依リ定ムヘク同會社ノ如キハ我國ノ法律ニ從ヒ我國ノ認可ヲ得テ成立シタルモノナルヲ以テ內國會社ナリト云フ者アランモ若シ斯說ヲ採用センカ同會社ハ我國ノ法律ニ從ヒ韓國ノ認可ヲ得テ成立シタルモノナルヲ以テ二箇ノ國籍ヲ有スル奇怪ナル結果ヲ生スルニ至ラン又同會社ハ社員ノ多數カ內國人ナルヲ以テ內國會社ナリト云フ者アレトモ會社其ノ者ト會社ヲ組成スル株主トヲ混同シタルモノニシテ採ルニ足ラス

上述ノ如ク同會社ハ內國會社ニ非サルヲ以テ同會社カ內國ニ於テ株式或ハ社債ヲ募集シ又ハ之ヲ讓渡シ其ノ他內國ニ支店ヲ設ケタル場合ノ外我商法ノ適用ナキニ依リ或者カ同會社ノ監事トシテ爲シタル所爲ニ對シテハ我商法ヲ以テ律スヘキモノニ非ス然ラハ內國法律ハ全然同會社ニ適用ナキカト云フニ凡ソ國家ハ或外國會社ニ對シテ特別ナル關係ヲ有スルトキハ之ニ對シ特別ニ法規ヲ制定シ之ヲ取締リ且ツ之ヲ保護スルコトヲ妨グルモノニアラス而シテ韓國ハ我國ニ於テ之ヲ保護シ之ヲ指導スヘキ地位ニ在ルヲ以テ同國ノ開發ヲ目的トスル同會社ニ對シテモ亦特別ナル法規ヲ設ケ之ヲ保護スルハ至當ノコトニ屬ス故ニ此ノ目

的ヲ以テ制定セラレタル東洋拓殖會社法ハ韓國ニ行ハレ同會社ハ之カ適用ヲ免カレルコトヲ得サルモノトス

右判決ノ判旨ハ本店ヲ内地ニ有スルニ依テ會社ハ內國會社ナリトスルニ在ルモノニシテ而シテ其ノ根據ハ會社ノ登記ハ非訟事件ノ手續法ニ規定スル登記機關ニ於ケル登記ナルカ故ナリト云フニ在リ但シ此ノ論據ニ對シテ併セテ研究スヘキハ我領事館ノ登記ナリ「條約又ハ慣例ニ因リ領事裁判權ヲ行フコトヲ得ル領事館ハ訴訟事件及非訟事件ニ關スル事務及登記ヲ行フ」(明治三十二年法律第七〇號領事館職務ニ關スル制)モノニシテ若シ會社ノ登記ハ非訟事件ノ手續法ニ規定セル登記機關ノ登記ノミヲ指スモノトセハ本店ヲ滿洲ニ置キ其ノ本店ヲ管轄スル領事館ニ登記ヲ爲スモ尙日本商法ノ內國會社ニ非サル結果ヲ生スルモノトス之ニ對シテハ議論ノ餘地アルニ似タリ別ニ研究スヘシ

三、日本商法カ準據法主義ヲ採用シタリトセハ滿洲ニ於テ設立シ滿洲ニ本店ヲ有スルモ日本商法ニ準據スル限リ會社ハ尙日本商法上ノ內國會社タリ

第二節 外國人ハ支那會社ノ株主タルコトヲ得ルヤ

第一 支那ニ於ケル外國人ノ地位

支那ニ於ケル外國人ノ地位如何ニ關シテハ二三ノ場合ニ付國內單行法ニ規定スルモノナキニ非サルモ私權ノ享有ニ關シ我民法第二條ノ如キ原則的規定ヲ掲ケタル法令ナシ而シテ支那政府ハ支那ニ於ケル外國人ノ地位ニ付テハ國際條約ヲ唯一ノ根據トシテ之ヲ決シ條約ニ於テ外國人ニ賦與シタル以外ノ權

利ハ一切外國人ニ否認スル主義ヲ峻守ス即チ支那政府ハ外國人ノ地位ニ關シテハ內外平等主義ヲ執ルモノニアラサルハ勿論相互主義タルニモ至ラス專ラ排外主義ヲ原則トスルモノタリ然ルニ條約ニ於ケル外國人ノ地位ニ關スル規定ハ極メテ概括的ノモノニシテ箇々ノ權利ニ關シ云爲スル所少ナキカ故ニ實際問題ノ起ル毎ニ常ニ輻葛紛紜ヲ免レス試ミニ日清通商航海條約ヲ取テ其ノ日本國民ノ支那ニ於ケル權利享有ヲ保障セル根本規定ヲ見ルニ實ニ左ノ如シ

第四條 日本臣民ハ其ノ家族雇員及僕婢ト共ニ現ニ外國人ノ居住貿易ノ爲メ開キ又ハ將來開クヘキ

所ノ清國ノ諸港諸市ニ往來シ住居シ商工業製造業ヲ營ミ又ハ其ノ他一切合法ノ職業ニ從事シ且其ノ商品及携帶品ヲ搭載シ前記諸開港地ノ間ニ隨意ニ往來スヘク又其ノ地ニ於テ外國人ノ使用及占有ノ爲メ既ニ選定シ若ハ將來選定セラルヘキ地區内ニ於テ家屋ヲ賃借賣買シ地所ヲ賃借シ寺院墓所病院ヲ建設スルコトヲ得但シ此等一切ノ事項ニ付最惠國ノ臣民或ハ人民ニ現ニ附與シ若ハ將來附與スヘキモノト同一ノ特權及免除ヲ享有スヘキモノトス

右規定ノ如キハ居住、營業、旅行、不動産ニ關シ日本人ノ權利ヲ認メタルモノニシテ眞ニ粗枝大葉ヲ概記セルニ過キス若シ支那ニシテ内外人平等主義ヲ執ルコト例ヘハ我國ノ如クンハ其ノ特ニ禁スル權利ハ箇々ノ場合ニ付特別法ニテ明示スルヲ以テ足ルモ排外主義ヲ原則トシ而シテ條約ニ於テ賦與スル權利ノ外ハ一切外國人ニ之ヲ否認スルモノタルニ於テハ是ノ如キ簡單ナル記載ニテハ公私法上ノ權利

ハ實ニ多數ナルヲ以テ各箇ノ權利ニ付果シテ賦與スヘキモノタルヤ否ヤ不明ヲ免レサル場合ヲ生スルコトアルハ當然ナリ從テ箇々ノ問題起ル毎ニ交渉糾紛シ多數ノ特殊條約又ハ特殊協約ヲ締結スルノ已ムヲ得サルニ歸ス

第二 外國人ノ株主

支那ハ法制ノ不備ナル國ナルヲ以テ外國人カ支那會社ノ株主タリ社員タルコトヲ得ルトスルモ是レ甚タ危險ニシテ又不利益ナルカ如シ然レトモ他面ヨリ觀ルトキハ(一)若シ支那會社ノ何レニ在ルヲ問ハス外國人カ其ノ株主タルコトヲ得ルトスレハ外國人ハ箇人トシテハ條約上支那内地ニ居住營業ノ權利ナク從テ支那内地ニ企業ヲ爲スコトヲ得サルモ會社ノ株主タルトキハ間接ニ支那内地ノ企業ニ關係スルヲ得ヘシ(二)外國人ヲ株主トスルトキハ支那人竝外國人ノ雙方ニ取テ外資輸入ノ便法タルヘシ(三)外國人ノミニテ支那事業ノ經營權ヲ得ルコト難ク假ニ之ヲ得タリトスルモ外國人ノミニテ壟斷スルトキハ支那官民ノ反感ヲ招キ所謂利權回收ノ厄ニ遭フヘシ、然ルニ支那人ト合同スルトキハ是ノ如ク嫉視猜排セラルルコト少ナカルヘシ如上ノ利益存スルヲ以テ外國人トシテハ支那會社ノ社員又ハ株主タルコトヲ得ルヲ以テ得策トス但シ支那ニシテ法治ノ完成セサル間ハ外交上ノ擔保ヲ必要トスルコト勿論ナリ

舊公司律ノ時代ニ在リテハ支那官憲ノ間ニ「外國人ハ開港場ニ在ル支那會社ニ限リテ其ノ株主タルコ

トヲ得」トスル說ト「外國人ハ開港場ノ内外ヲ問ハス總テ支那會社ノ株主タルコトヲ得」トスル說トアリタリ地方官ハ前說ヲ主張シ中央政府ノ外務部商部ハ初メ後說ヲ採リタルモ後前說ニ左袒セリ

右問題ノ解決ハ專ラ(一)舊會社法即チ公司律ノ規定ト(二)條約ノ規定トニ根據ヲ有ス

一、公司律ノ規定 公司律中外國人ノ權利ニ關シテ規定セル條文二箇條アリ左ノ如シ

第三十五條 附股人ハ華商洋商ヲ論セス一タヒ株式ヲ引受ケタルトキハ應サニ即チ該公司所定ノ規

條章程ヲ遵守スヘシ

第五十七條 中國人公司ヲ設立シ外國人株式ヲ引受クルモノアルトキハ即チ允許ヲ爲シ中國商律及

公司條例ヲ遵守セシム

右規定ニ依レハ外國人ノ株主タルコトヲ得ヘキ支那會社ノ所在地ニ關シ制限ナキヲ以テ會社カ開港場ノ内外何レニ在ルヲ問ハス外國人ハ均シク其ノ株主タルコトヲ得ヘキモノタリ但シ注意スヘキハ第五十七條下段ノ文言ニシテ「即チ允許ヲ爲シ」ト云ヒ「中國商律及公司條例ヲ遵守セシム」ト云ヘルハ外國人カ株主タラントスルトキハ政府ハ其ノ許否ノ權ヲ有シ既ニ許可ヲ得テ株主タル場合ニハ商律及公司條例ヲ恪守セシメテ專横ノ行爲アルヲ得ストノ意ヲ示セルモノニシテ之ニ依テ假設外國人カ支那内地ノ會社ニ株主タラントスルコトアルモ官廳ノ處分ヲ以テ適宜ニ其ノ節抑ヲ計リ外國人ヲシテ支那内地ニ跳梁跋扈セシメサル用意ニ出テタルモノナリトノ說ハ中央政府ノ商部カ前ニ外國人カ支那内地ニ在

ル支那會社ノ株主タルコトヲ得トノ說ヲ主張セルトキ明言セル所タルモ外國人ノ株式取得ニ關スル允許ノ手續ニ關シテハ何等規則ナカリキ

二、條約 條約ニシテ本問題ニ關係アルモノハ一九〇二年九月五日ノ英清改訂條約即チ通稱マツケイ條約第四條ト第八條第九款ノ第一項ナリ即チ左ノ如シ

第四條 從來外國人ノ事業及會社ニ對シテ清國臣民ノ資本ヲ投スル權利ニ關シテ諸種ノ疑問ヲ生シ且ツ右等ニ對シテ投シタル清國資本ノ額尠少ニアラサルヘキハ賭易キ事實ナルヲ以テ更ニ清國ハ其ノ何種タルヲ問ハス英國ノ合本會社ノ株式所有者トナリ若ハ所有者タラントスル清國臣民ハ英國裁判所ノ解釋スル如ク其ノ株式所有者タルノ行爲ニ依リ其ノ會社ノ設立認可條項又ハ覺書及定款並諸規則ヲ承認セルモノト看做シ且ツ爭訟ノ生スルニ當リ清國株式所有者ノ義務同一會社ニ於ケル英國株式所有者ノ義務ト異ナリ若ハ過大ナラサルニ於テハ清國法衙ハ清國株式所有者ヲシテ之ニ服従スヘキコトヲ強制スルコトニ同意ス

英國政府ハ均シク清國會社ニ資本ヲ投スル英國臣民ハ同一會社ニ於ケル清國株式所有者ト同一義務ノ下ニ在ルヘキコトニ同意ス

本條ノ規定ハ既ニ法衙ノ審理ヲ經及棄却セラレタル訴訟ニハ適用セサルモノトス

第八條 第九款ノ第一項、清國ニ於テ機械ニヨリ製造セララルル綿絲及綿布ニ對シテハ開港地ニ於テ

外國人ニヨリテ製造セララルル開港地以外ニ於テ清國人ニヨリテ製造セララルルヲ問ハス一千九百一年ノ議定書ニ規定セル輸入税ノ倍額ニ相當スル税金ヲ賦課ス

以上條約ノ規定ヲ案スルニ條約第四條ノ規定ハ既ニ成立セル英國人ノ會社ニ對シ清國人カ株式所有者タル場合ト既ニ成立セル清國會社ニ對シテ英國人カ株式所有者タル場合トニ付右株式所有者ノ義務並當事國家ノ義務トヲ定メタルモノナルカ其ノ詳細ノ説明ハ茲ニ省略スヘク要スルニ左ノ點ハ本條ニテ認メラレタルモノタリ

英國人ハ支那會社ノ株主タルコトヲ得ヘク條約文面ニテハ其ノ支那會社ノ所在地ニ關シ制限ナキヲ以テ開港場内ニ在ルト支那内地ニ在ルトヲ問ハス何レノ會社ニテモ其ノ株主タルコトヲ得

然ルニ光緒三十年ニ中央政府ト南洋大臣トノ間ニ意見ノ相違ヲ生シ南洋大臣ハ外國人ニシテ支那内地ノ會社ニ株主タルハ條約違反ナリトノ說ヲ主張セリ其ノ理由ハ商律及英清改訂條約第四條ニテハ外國人ハ支那會社ノ株主タルコトヲ得ヘク且ツ其ノ會社ノ位置ニ付キ何等制限ナシト雖モ英清改訂條約第八條第九款ノ第一項ニ「開港地ニ於テ外國人ニヨリテ製造セララルル」トノ文言ハ即チ外國人ノ設廠製造ノ權利ヲ開港場内ニ制限スル趣旨ニシテ此ノ法意ヲ推擴スルトキハ外國人カ支那内地ニ在リテ製造業ヲ營ム支那會社ノ株主トナルコトハ否認セサル可ラスト之ニ對シテ中央政府ノ商部ト外務部トハ最初反對說ヲ採レリ曰ク「外國人ノ設廠製造ハ開港場内ニ限ルハ明文ノ示ス所ナルモ設廠製造ト會社

ノ株主タルコトハ別論ナリ故ニ外國人カ内地ニ在ル支那會社ノ株主タルハ妨ケンシト右ニ關シ商部外務部南洋大臣間ニ往復移牒セル文書アリ(參考第一二三)其ノ一ヲ左ニ譯載ス

商部ヨリ兩江總督ヘ回答竝各將軍督撫ヘ通牒ノ公文

光緒三十年二月十二日兩江總督ヨリ來文ノ趣ニ曰ク「近年外國人ニシテ内國人ト共同シ清國內地ニ在リテ營業スルコトヲ得ルモノハ單ニ鐵道鑛山ノ兩項ニ止マリ製造事業ノ利益ニ至テハ久シク外國人ノ垂涎シテ未タ得サル所ニシテ即チ内地產業保護上ノ要務タリ前年英國ト條約改訂ノ際英國委員マツケーヨリ再三此ノ件ニ付要求スル所アリタレトモ前總督劉等ノ強硬ナル反對ニヨリ始メテ英清條約第八條第九款ニ外國人カ器械ヲ使用シ製造事業ヲ營ムハ單ニ條約港ニ止マルコトヲ明記シタリ然ルニ此ノ明文アルニ拘ハラズ外國人ハ尙内國人ヲ籠絡シテ安リニ内地ニ在リテ工場ヲ設ケ或ハ資本ヲ融通シテ其ノ事業ヲ侵蝕セント企ツルモノアリ今商法第五十七條ヲ按スルニ該條ハ原ト英清條約第四條ニ依リ株券購買ニ關スル規定ヲ設ケタルモノナルモ英清條約第八條内ニハ外國人器械力ヲ使用スル製造事業ハ單ニ開港地ニ止マルコトノ明文アルヲ以テ前後對照スレハ外國人ハ内國人カ内地ニ設立シタル會社ニ對シ投資スルコトヲ得サルハ自然明瞭ナリト雖モ商法ニ於テ單ニ投資ニ關スル規定ノミニ論及セルヲ以テ深ク將來ノ爲メニ慮レハ或ハ外國人ニシテ法文ヲ曲解シテ内國人ト結託シ又各省官場ニ於テモ當初十分ノ研究ヲ爲サシテ一タヒ惡例ヲ開カハ遂ニ防遏スル能ハサルニ

至ルヘキニヨリ此ニ商法公布ニ際シ誤解ヲ防クカ爲メ貴部(商部)ニ於テ該條約ヲ按シ重ネテ商法第五十七條ノ意義ヲ説明シテ各省一般ニ通告取計方希望ス云々」依テ當部ニ於テ取調フルニ會社法第五十七條中ニ於テ一ニハ清國人カ會社ヲ創立スルニ際シ外國人カ之ヲ籠絡シテ安リニ内地ニ製造所ヲ設ケンコトヲ圖リ貸付金ヲ口實トスル等ノ弊アラハ各地方官ハ詳細ニ事實ヲ取調ヘテ上申シ決シテ曖昧ニ付スルヲ許ス可ラサルコトニハ外國人ノ株主タルモノアレハ英清條約第四條ノ意義ニ合スルト否トヲ論セス各條約ヲ參照スルニ内國人設立ノ會社カ外國人ノ持株ヲ許サストノ特定ノ條項ナキカ故ニ會社法ニ於テハ豫メ此ノ點ヲ考察シテ規定ヲ設ケ置クノ必要アリ三ニハ會社法第五十七條ハ即チ允許ヲ爲シ清國ノ商法及會社法ヲ遵守セシムト定メテ外國人ノ持株ヲ禁遏スル能ハスト雖モ其ノ間ニ處シテ主權ヲ挽回スルノ方法ヲ設ケアル立法ノ精神ハ自ラ顯然タル次第ニシテ本部ハ實ニ深ク此ノ點ニ注意ヲ致シタル所以ナリ抑モ現今法律ノ制定ヲナスニ方リ何レモ慎重審査ヲ加ヘサルナク鐵道鑛山ノ章程ノ如キモ共ニ内外人ノ合資營業ニ關シテハ外資内資ノ額ヲ超過スルコトヲ得サルコト竝土地ヲ抵當トシテ外資ヲ借入ルルコト能ハサルコト等ノ各條ヲ設ケタルハ蓋シ深ク投資ノ結果ヨリ營業權竝土地所有權ニ影響ヲ及サンコトヲ慮リ特ニ制限ヲ明示シタルモノニシテ英清條約第八條第九款ニ於ケル機械製造業ノ一項ノ如キハ暗ニ口岸(條約港)ノ二字ヲ以テ内地ニ對比セシメタルナリ當時談判ノ際固ヨリ明ニ内地ニ於テ製造業ヲ起スヲ得スト記載シ難カリシ事情アルヲ以

テ現今法律ヲ制定スルニ當リ内地ノ會社ニハ外國人ノ持株ヲ許サト明言スルヲ憚カル次第ナリ況
 シヤ該款下文ハ製造税ニ關スル規定ヲ主トスルモノニシテ會社法第五十七條ハ內國人ノ會社ハ力メ
 テ其ノ營業上ノ主權ヲ保持スヘキコトヲ規定シタルモノナルヲ以テ英清條約ニ載スル所トハ全ク關
 係ナク又之ヲ對照セハ其ノ牴觸セサルコトモ明瞭スヘシト雖モ法文ノ含蓄ヲ廣クスルヲ要スルト體
 例ノ關係トニヨリ條約文ノ如ク範圍ヲ限定スルヲ得サルヲ以テ今後若シ外國人ニシテ内地ニ製造業
 ヲ起サントスル如キモノアラハ凡テ條約ノ明文ニ依遵セシメ內國人ノ會社ニシテ外資ヲ附帶スルモ
 ノアラハ會社法ヲ適用セハ外國人モ亦決シテ該法文ヲ曲解シテ内地ニ製造事業ヲ起スノ根據トナサ
 サルヘシト信ス是レ偏ニ各省將軍督撫ノ權變操縱ノ手腕ニ待ツ所ナルヲ以テ十分條約及法文ノ精神
 ヲ玩味セラレナハ庶幾クハ能ク主權ヲ保持スルヲ得ヘシト思料ス尙貴官ヨリ普ク論達シ弊害ヲ豫防
 スルコトヲ希望ス(原文參考第一二ノ一)

右商部ノ通牒文ハ辭令紆餘曲折ノ妙ヲ極ムルモノナルカ要スルニ外國人カ工場ヲ設ケテ製造ニ從事ス
 ルハ開港場内ニ限ルモ支那會社ノ株主タルコトハ其ノ會社ノ開港場ノ内外何レタルヲ問ハス差支ナシ
 トノ結論ニ歸スルモノノ如シ然ルニ其ノ後再ヒ南洋大臣ヨリ商部ニ反對意見ヲ提出シ「外國人ノ設廠
 製造權ヲ開港場ニ限ル上ハ其ノ支那會社ノ株主タル權利モ亦開港場内ニ在ル支那會社ニ局限セサル可
 ラス」ト主張セルニ商部ハ前說ヲ翻シテ之ニ贊同セリ之ニ關スル商部ヨリ南洋大臣ニ宛テタル移牒回

答左ノ如シ

光緒三十年五月二十五日接手セル貴大臣ノ移牒ニ據レハ「前ニ本部(商部)ヨリ奏定商律第三十五條及
 第五十七條ノ意義ハ附股(即チ株ノ引受)ヲ指シテ言ヘルモノニ係リ決シテ設廠(工場ヲ設ケルコト)ヲ指シテ言ヘルモノ
 ニ非ス然レハ嗣後外國商人ノ附股ハ均シク應ニ第三十八條ノ原文ヲ按照シテ辦理ス可ク竝鐵路礦務
 章程ヲ援照シテ華股(支那人ノ持株)ノ數ヲ超過スルヲ得サラシム可シトノ咨ニ接シタリ思フニ此ノ事タルヤ
 全國内地ノ商務ニ關係シ約案ヲ統核スルモノナルカ故ニ其ノ說ヲ再申シ以テ折衷ヲ求メサルヲ得ス
 蓋シ前議セル英約ハ華股ヲ附有スル英人ノ惠通公司カ擅ニ別業ヲ營ミテ缺損ヲ招キタル結果之ヲ附
 股華商ヨリ追補センコトヲ請求セシモ事定章ニ違背シ且ツ條約ニ華洋合股ノ條文ナキヲ以テ駁シテ
 准理セサリシニ因リ故ニ此ノ款(英清改訂條約第四條)ヲ設ケテ以テ前虧ノ追償ヲ圖ラントセシモノ
 ニシテ其ノ後彼此兩國國民ノ附股ヲ認許セシモ此ニ依リテ前文ヲ追理スル能ハサラシメタルモノトス
 故ニ約案ノ要旨ハ華人ノ洋股ニ附スル場合ハ應ニ公司定章ヲ遵守ス可キモノタル點ニ在リ下文云フ
 所ノ英民カ中國公司株券ヲ購ヘル者ノ當ニ守ル可キ本分ハ華民ニシテ株主タル者ト同シトハ是レ唯
 對待ノ法ニ過キスシテ附股ヲ許スト否トニ付テハ仍ホ當ニ條約全部ノ意義ヲ統核シテ考證セサル可
 ラサルモノナリ是レ約文第八款ニ既ニ洋商ノ設廠ヲ通商場ニ限ルトナス以上附股ヲ認許スル場合モ
 亦必ス華商カ通商場ニ開設シタル工廠ニ限ルヘキ理ナリ是レ前文ニ聲明シタル所ニシテ附股ト設

廠ト同一條約内ニ載セタル點ヨリ先後參觀セハ其ノ義自ラ明ナル可シ日本新約ニ至リテハ本ト英約ニ基キテ設ケタルモノニシテ單ニ洋商ノ附股ヲ許スノミナラス且ツ亦合股經營、合辦公司ヲモ許セリ其ノ所謂合股經營、合辦會社トハ即チ合設公司及各項貿易ヲ言フモノニシテ廠ヲ設ケ行ヲ開クト異ルコトナシ何ソ附股ヲ以テ比較スルヲ得ンヤ且ツ當日立約ノ命意ヲ按スルニ日約（追加清國通商航海條約）第一款ニ已ニ一切ハ悉ク各國中國間ニ商定セル辦法ニ依リ毫モ岐異アル所ナシト明載セルヲ以テ見レハ其ノ權利商務モ亦各國ト較ヘテ軒輊アル可キ理ナシ日約既ニ英約ニ基キ其ノ辦法權利又各國ト差異ナク而シテ英約已ニ洋商ノ設廠ヲ通商場ノミニ限ルト載明セル以上ハ則チ附股ト合辦公司トモ亦必ス通商場ノミニ限ラサル可ラサルハ約文ノ意義ヨリ推シテ確證スルニ難カラサルナリ鐵路各處ノ訂章ニ至リテハ多ク借款ニ依リテ築造シ其ノ鐵道ヲ以テ該借款ノ擔保トナスモノニシテ本ト洋商ノ產業ト看做ス能ハス次ニ鑛務新約ハ本ト已ニ合資ヲ許スモノナルカ故ニ亦製造等ヲ目的トスル會社カ條約上必ス通商場ニ設ク可シト制限セラルモノト同視スルヲ得ス誠ニ目下交渉ノ難事件アル毎ニ當ニ慎重セサル可ラサルヲ以テ此ノ管見ヲ披キ再ヒ考核ヲ咨請シ遵循セシメラレンコトヲ乞フ」等ノ趣查スルニ公司律第三十五條及ヒ第五十七條ノ意義ハ貴臣大ヨリ本部宛ノ咨文ニ於テ已ニ兩回ニ亘リテ詳細申明セル通りニシテ既ニ洋商ノ設廠ヲ通商場ニ限リテノミ許スモノトセハ則チ商律載スル所ノ洋商附股モ亦必ス通商場ノミニ限ル可ク是レ華商ヲ保護シ輻輳ヲ豫防スル爲

ニ外ナラサルモノトス此ニ文ニ據リテ申明シ誤解ヲ免レ流弊ヲ防カンカ爲メ貴大臣ニ咨行シテ查照備案スルモノナリ（原文參考第一二二三）

右ノ如ク商部ハ終ニ南洋大臣ノ意見ニ左袒シ外國人ハ支那内地ニ在ル支那會社ノ株主タルコトヲ得スト決定スルニ至レリ而シテ右商部ノ移牒中ニ援用セル清國ト日本トノ條約ハ即チ左ニ掲クルモノナリ追加清國通商航海條約（明治三十一年一月）

第四條 清國臣民ニシテ日本國臣民ト共同シテ正當ナル目的ヲ以テ組合又ハ會社ヲ組織スル場合ニハ契約又ハ覺書並定款及右ニ基キ作リタル細則ニ據リ右組合及會社ノ各員ト共ニ公平ニ損益ヲ分ツモノトス又右清國臣民ハ自ラ承認シ且ツ日本國裁判所ノ解釋ニ從フヘキ該契約又ハ覺書並定款及右ニ基キ作リタル細則ニ定メタル義務ヲ履行スヘキモノトス若シ清國臣民ニシテ斯ク定メタル處ノ義務ヲ履行セサルカ爲メ訴訟ヲ提起セラレタルトキハ清國裁判所ハ直ニ右義務ノ履行ヲ強制スヘシ

日本國臣民ニシテ清國臣民ト共同シテ組合又ハ會社ヲ組織スル場合ニハ契約又ハ覺書並定款若ハ之ニ基キ作リタル細則ニ據リ公平ニ損益ヲ分ツヘシ若シ日本國臣民カ契約又ハ覺書並定款若ハ之ニ基キ作リタル細則ニ定メタル處ノ義務ヲ履行セサルトキハ日本國裁判所モ亦右同様直ニ義務ノ履行ヲ強制スルコト勿論タルヘシ

右條約文ハ大體前顯英清改訂條約第四條ニ則レルモノナレトモ英清改訂條約ニテハ支那人カ英國會社ノ株主タル場合ト英國人カ支那會社ノ株主タル場合ニ關シ規定セルニ過キサルニ此ノ條約ノ規定ニテハ兩國人合同シテ組合又ハ會社ヲ設立スル場合ニマテモ擴張セリ第一項ニ清國臣民ニシテ日本國臣民ト共同シテ正當ナル目的ヲ以テ組合又ハ會社ヲ組織スル云々トハ支那人カ日本人ト共同シテ日本會社(又ハ組合)ヲ組織スル場合ヲ指スモノナルヘク之ニ對シテ第二項ノ場合ハ日本人カ支那人ト共同シテ支那會社(又ハ組合)ヲ組織スル場合ヲ指スモノナラン是レ此ノ條約ノ基本トセル英清改訂條約第四條ヨリ推シテ明ナリ

此ノ條約ノ規定ヨリシテ起ル重要ナル問題ハ第二項ノ日本人カ支那人ト共同シテ支那會社(又ハ組合)ヲ組織スル場合ニ其支那會社ノ所在地ハ開港地ノ内外ヲ問ハサルヤ否ヤノ問題ナリ南洋大臣及商部ノ意見ニテハ前掲移牒文中ニ見ル如ク是亦開港地内ニ限ルヘシト云フニ在リ然レトモ吾人ノ考フル所ニ據ルトキハ組合ニ付テハ疑アレトモ會社特ニ株式會社ニ關シテハ英清改訂條約第四條ノ場合タルト將タ又追加清國通商航海條約第四條ノ場合タルトニ拘ハラズ外國人カ支那會社ノ株主ト爲リ又ハ外國人カ支那人ト共同シテ支那會社ヲ設立スル場合ニ其ノ會社ニシテ支那法上法人格ヲ有スルモノナルトキハ必シモ之ヲ開港地内ニ限ルヘキ理由ナシト信ス何者一般條約ニテハ外國人ノ居住營業權ハ之ヲ開港地内ニ局限セラルルモ支那法人ハ外國人ニアラサルカ故ニ假設外國人カ其ノ法人ノ一員タルモ法人ノ

行爲ハ外國人ノ行爲ニアラス從テ其ノ會社ノ支那内地ニ在ルヲ妨ケサルヘシ支那内地ニ在ル支那會社ニ對シテ株主タル外國人ノ有スル權利ハ學者ノ所謂固有權並其ノ他ノ債權、請求權等アルヘシ然カモ此等ノ權利ハ條約ノ禁スル不動産上ノ權利ニアラス廣義ナル通商取引ヨリ生スル權利關係ノ内ニ包含セラルヘキモノニシテ條約ノ公認スル所タリ然ルニ支那官憲ハ僅カニ英清改訂條約第八條中ニ「開港地ニ於テ外國人ニヨリテ製造セラルル」云々ノ語アルヲ口實トシテ消極論ヲ主張スルハ不法ナリ公同律ニ於テモ又條約ニ於テモ外國人ノ株主タルコトヲ得ヘキ支那會社ノ位置ニ關シ制限ナキ以上ハ外國人ハ總テ支那會社ノ株主タルコトヲ得ヘキモノト云フヘシ商部ノ最初ノ主張ハ正當ニシテ支那人中亦之ヲ以テ正當ナル最後ノ權威アル解決ト認ムルモノアルハ參考書中ニ收メタル英文ニ徴シテ之ヲ知ルヘシ(參考第一三三)

新公司條例ヲ案スルニ外國人カ支那會社ノ社員タリ又ハ株主タルコトヲ得ヘキヤニ付外國人ト支那人トヲ區別シタル條文一モ之有ルナシ但シ公司條例施行細則第十二條ニ

法令ノ規定ニ依リ祇タ中華民國人民ヲ以テ之ヲ組織スルコトヲ許ス股份有限公司及中華民國人民ヲ以テ組織スルヲ條件トシ特別ノ權利ヲ享有スル股份有限公司ハ無記名股票ヲ發行スルヲ得ス

トアリ此ノ規定ノ意ヲ敷衍スレハ左ノ如シ

支那株式會社(股份有限公司)ハ外國人ノミヲ以テ又ハ外國人ト支那人ト共同シテ之ヲ組織スルコト

ヲ得ヘシ唯法令ハ支那人ノミヲ以テ組織スルコトヲ許シ又ハ支那人ノミヲ以テ組織セルコトヲ條件トシテ特權ヲ與フルコトアリ此ノ會社ニ在リテハ無記名式株券ヲ發行スルコトヲ許サス

即チ外國人ハ支那株式會社ヲ設立シ又ハ其ノ株主タルコトヲ得ルモノト解セサル可ラス然ラサレハ施行細則第十三條ノ規定ハ無意義ナルヲ以テナリ而シテ公司條例ハ總テノ會社ニ付外國人關係ヲ規定セス故ニ既ニ株式會社ニシテ外國人之ニ關係スルコトヲ得ルモノトスレハ他ノ會社モ亦同様ナリト云ハサル可ラス即チ無限公司、兩合公司、股分兩合公司等ニ在リテモ外國人ノミヲ以テ之ヲ組織スルコトヲ得ヘク又ハ支那人ト共同シテ組織スルコトヲ得ルモノト云ハサル可ラス

新公司條例ハ公司ハ總テ法人ナリト明文ヲ以テ定メタルヲ以テ外國人ノ關係スル會社ハ開港地ノ内外何レニ在ルヲ問ハサルハ勿論ナリ舊公司條例ニテハ公司ヲ法人トスル規定缺如セシヲ以テ此ノ點疑ナキニアラサリシモ股分分限公司ノ如キハ之ヲ法人ト解スルニ非スンハ有限責任ノ根據ヲ説明シ難キモノタリ獨逸商法ノ如キ會社ハ法人ナリトノ規定ヲ存セサルモ株式會社ノ法人タルハ異說ナシ

第三節 外國人ノ所有株數ヲ制限スル會社

舊公司律新公司條例共ニ股分有限公司ノ外國人株數ヲ制限スル規定ナシ唯特別法ニテ之ヲ制限スルモノアリ

鑛業條例(民國三年三月十一日) 第四條ニ曰ク

凡ソ中華民國ト約アルノ外國人民(即チ條約國民)ハ中華民國人民ト合股シテ鑛業權ヲ取得スルコトヲ得但シ須ラク本條例及其ノ他關係諸法律ヲ遵守スヘシ

外國人占ムル所ノ股分(株式)ハ全股分ノ十分ノ五ヲ逾ユルヲ得ス

本條文ハ二ツノ要點ヲ規定セルモノナリ如左

一、條約國民ハ支那人ト合同シテノミ鑛業權ヲ取得スルコトヲ得ヘキコト

二、條約國民ノ所有株ハ其ノ全數ノ半ヲ超過スルコトヲ得サルコト

明治四十二年九月(宣統元年七月)日清間ノ協約第四條ニ據レハ

安奉鐵道沿線及南滿洲鐵道幹線沿線ノ鑛務ハ撫順及煙臺ヲ除キ明治四十年即チ光緒三十三年東三省督撫カ日本國總領事ト議定セル大綱ヲ按照シ日清兩國人ノ合辦ト爲スヘク其ノ細則ハ追テ督撫ト日本國總領事トノ間ニ商定スヘシ

トアリテ安奉沿線南滿洲沿線ノ鑛業ハ撫順煙臺ノ外日清人ノ合辦タルヘキモノタリ而シテ此ノ鑛業權ハ特殊條約ニ基クモノナルカ故ニ支那新會社法又ハ鑛業條例ノ支配ヲ受クヘキモノニアラス一ニ今後ノ日支官憲ノ商定ニ依テ其ノ合辦組織ヲ定ムヘキモノタリ

第四節 外國人ノ株主又ハ社員タルコトヲ得サル會社

特別法ニ據レハ外國人ノ株主又ハ社員タルコトヲ得サル會社アリ即チ如左

第一、外國人ハ官有地ヲ拂下ケ開墾ヲ目的トスル會社ノ社員又ハ株主タルコトヲ得ス
 國有荒地承墾條例(民國三年三月四日教令第三一號)ニ左ノ規定アリ

第三條 凡ソ國有荒地ヲ承領シ開墾セントスル者ハ其ノ箇人タルト法人タルトニ論ナク均シク認メ
 テ承墾權者ト爲ス

第四條 前條ノ箇人又ハ法人ノ團體員ハ中華民國ニ國籍ヲ有スル者ニ非サレハ承墾權ヲ享有スルヲ
 得ス

支那新會社法ニ據ル會社ハ皆法人ナルカ故ニ外國人ヲ社員又ハ株主トスル會社ハ官有地ヲ拂下ケ開墾
 ヲ爲スコトヲ得サルモノトス

第二、外國人ハ政府ノ保護ヲ受クル會社ノ社員又ハ株主タルコトヲ得ス

民國三年一月十三日教令第五一號公司保息條例(公布第一五)即チ會社保護法ニ依レハ政府ハ棉織業、
 毛織業、製鐵業、製絲業、製茶業、製糖業ノ六種事業ニ對シテ保護ヲ與フルモノニシテ該條例第四條
 ニ如左規定セリ

凡ソ本條例ニ依據シテ保息ヲ呈請スルヲ得ルモノハ本國人民ヲ以テ本國法律ニ依リ新ニ成立スルノ
 公司ヲ以テ限ト爲ス

即チ外國人ハ保護會社ノ株主又ハ社員タルコトヲ得サルモノトス但シ本條ノ規定ハ上記ノ各業ヲ營ム

會社カ外國人ヲ社員又ハ株主ト爲スコトヲ得スト云フニアラスシテ外國人カ社員又ハ株主タルトキハ
 政府ノ保護ヲ呈請スルヲ得スト云フニ在ルヲ以テ保護ヲ受ケサル會社ナルトキハ外國人ノ加入スルコ
 トヲ妨ケサルモノトス又此ノ種ノ會社ニシテ現ニ政府ノ保護ヲ受ケツツアルモノナルトキハ外國人カ
 之ニ加入スルコトヲ得サルモノト解スヘシ

第三、外國人ハ左ノ銀行ノ株主タルコトヲ得ス

一、中國銀行則例(民國二年四月十五日公布)第五條ニ曰ク

中國銀行ノ股票ハ概ネ記名式ヲ用キ中華民國人民ヲ除クノ外買賣轉讓ノ權利無シ

二、交通銀行則例(民國三年四月七日教令第四七號)第五條ニ曰ク

交通銀行股票ハ概ネ記名式ヲ用キ其ノ賣買讓與權ハ另ニ章程ヲ以テ之ヲ定ム但シ中華民國國民ヲ以
 テ限ト爲ス

第四、外國人ハ政府ノ保護ヲ受クル公海漁業會社ノ社員又ハ株主タルコトヲ得ス

公海漁業獎勵條例(民國三年四月二十日教令第五五號)第一條ニ曰ク

凡ソ本國人民公司或ハ箇人名義ヲ以テ漁船ヲ購置シ公海漁船檢查規則ニ依リ檢查合格シテ註冊セル
 モノハ本條例ニ依リ獎勵金ヲ給與スルヲ得

以上ノ外尙各法令ニ就キ精査スルトキハ外國人ノ株主又ハ社員タルコトヲ得サル會社アルヘキモ今一

第五節 會社ノ社員又ハ株主タル權利ト支那内地居住營業權

箇人ノ居住權營業權ヲ制限スルハ國家對個人ノ問題ニシテ主トシテ憲法行政法ノ畛域ニ在リ而シテ一國カ外國人ニ此ノ自由ヲ如何ナル程度ニ於テ認ムルヤノ問題ハ其ノ國ノ公法的规定ト國際條約ニ依テ定マルモノニシテ私法關係ヲ規定スル法令ニ據テ決スヘキモノニアラス支那ハ國際條約ヲ以テ外國人ノ居住營業權ヲ開港地内ニ制限セリ日本人ニ關シテハ日清通商航海條約第四條ニ於テ此ノ旨ヲ規定セリ公司條例及其ノ附屬法令ノ上ヨリシテ外國人モ支那會社ノ株主タリ社員タルコトヲ得ルモノナリト雖モ公法的规定ニシテ未タ外國人ノ居住營業權ヲ支那内地ニ認ムル旨ヲ宣明シタルモノナシ從テ假令外國人カ支那内地ニ在ル支那會社ノ株主又ハ社員タルコトヲ得ルトスルモ之ヨリシテ當然ニ支那内地ニ居住營業權アルコトヲ主張スルヲ得サルヘシ外國人カ支那會社ノ社員タリ又株主タルコトヲ得ル結果或ハ業務執行社員タリ或ハ取締役タルコトヲ得ルニ至リ支那内地ニ居住スルヲ便宜トスル場合ヲ生スルニ相違ナシト雖モ私法上ノ權利ヨリ公法上ノ權利ヲ變生セシムル能ハサルナリ、故ニ此ノ場合ハ特殊條約ヲ締結スルカ又ハ支那政府ヲシテ自ラ制限解除ノ公法的规定ヲ發布セシムル外策ナシ

第五章 合辦事業ノ意義

合辦事業トハ字義ヨリ論スレハ個人企業ニ對スル協同企業ノ概稱ナレトモ從來人民ト政府ト協同スル

トキハ官商合辦ト云ヒ支那人ト外國人ト協同スル場合ハ華洋合辦ト云ヒ日本人ト支那人ト協同スル場合ハ日支合辦ト云フカ如ク階級ヲ異ニシ又ハ種族ヲ異ニスル者ノ間ニ成立スル協同企業ヲ指シテ云フ場合ニ用キラレ普通ノ支那人民間ニ於ケル協同事業ニハ餘リ多ク用キサルモノノ如シ

法律上合辦ノ何タルヤヲ確定セルコトナキヲ以テ一言ニシテ其ノ内容ヲ明ニスルコト能ハサレトモ從來ノ例ヲ見ルニ借款合同即チ支那政府又ハ支那人カ外國又ハ外國人ヨリ資本ヲ借受クル契約ハ之ヲ合辦ト稱セサルニ似タリ例ヘハ吉長線新奉線ニ對スル借款ノ如キハ是ヲ合辦ト稱セス又外國人カ既ニ成立セル支那會社ノ株式ヲ取得シ支那人カ既ニ成立セル外國會社ノ株主トナルカ如キ場合モ之ヲ合辦ト稱セス例ヘハ滿鐵會社ノ株主ハ日清兩國政府及日本人、支那人ニ限り、支那人カ株主タルモノアルモ之ヲ合辦ト稱セス左レハ合辦事業トハ結局「協同スルモノ甲乙カ各資本額ノ一部ヲ分擔醸出シ組合又ハ會社ヲ創設シ其ノ事業ノ經營ニ對シ甲乙各之ニ干預スル權利ヲ留保スル協同組織」ヲ云フモノノ如シ

合辦ノ法律上ノ形式ハ一様ナラス試ミニ滿洲ニ於ケル日支合辦ニ付之ヲ舉クレハ左ノ如クナランカ

- 一、日本商法上ノ會社組織ニテ協同スルコトアリ例ヘハ營口水電株式會社ノ如シ
- 二、支那會社法ニ據テ協同スルコトアリ例ヘハ瀋陽馬車鐵道會社本溪湖煤鐵有限公司ノ如シ
- 三、特殊條約ニ據テ協同スルモノアリ例ヘハ鴨綠江採木公司ノ如シ

四、契約ニ據テ協同スルコトアリ今之ニ當ル適例ヲ發見セス

以上ノ四種ノ形式中何レヲ以テ最モ適當ナルモノト爲スヤ第一ノ日本商法ニ據ル合辦ハ日本人ニ在リテハ最モ便宜ナルヘシト雖モ支那人ヲ誘致スルニ困難ナルヘク又日本商法ニ依ル會社ハ支那法上外國法人ナルヲ以テ支那内地ノ企業ニ之ヲ利用スルヲ得サルヘシ第二ノ支那會社法ニ據ル合辦ハ即チ支那法上ノ人格者ナルヲ以テ支那内地ノ企業ニ當ルヲ得ヘク又支那人ヲ誘致スルニ比較的容易ナルヘシ但シ會社法ハ完備セリト雖モ他ノ法律制度ハ未タ備ハラサルヲ以テ外交上ノ保障ヲ有スルニ非サレハ運用困難ナルヘシ第三ノ特殊條約ニ據ル合辦ハ是レ最モ安全便利ナルモノナリ但シ此ノ組織ノ應用ハ外交當局ノ手腕ニ待ツ外ナキヲ以テ迅速ニ成立ヲ期シ難ク又大小ノ事業ヲ盡ク之ニ據ラシムル能ハサルハ勿論ナリ第四ノ契約ニ據ル合同ハ多クハ組合ノ性質ヲ有スルモノナルカ故ニ支那内地ノ事業ニ適セス又會社組織ト異ナリ多數ノ間ニ行ハルルコト困難ナリ又準據法ヲ日本法ニ取ラハ可ナリト雖モ否ラズンハ支那法ノ不備ナル結果常ニ糾紛ヲ絶エサルヘク都度外交當局ノ介入ヲ依頼スルノ煩ヲ免レサルヘシ

日支人間ノ合辦事業ニ關シテハ明治三十七年ノ追加清國通商航海條約第四條(第四章第(二節既掲)ハ豫メ合辦ヨリ生スヘキ糾紛ニ備ヘンカ爲メ規定セルモノニシテ支那人カ日本人ト協同シテ日本法ノ組合又ハ會社ヲ組織スルトキハ支那人カ其ノ承認シ且ツ日本國裁判所ノ解釋ニ從フヘキ契約、覺書定款及之ニ基キ作

リタル細則ニ定メタル義務ヲ履行スヘク若シ之ヲ履行セサルトキハ支那ハ其ノ裁判所ヲシテ其ノ履行ヲ強制セシムヘキ國際上ノ義務ヲ負擔スルモノトス之ニ對シテ日本人カ支那人ト協同シテ支那會社ヲ組織セル場合ニモ日本ハ其ノ裁判所ヲシテ日本人民ノ契約、覺書、定款竝之ニ基ツキ作レル細則ニ據テ負フ義務ノ履行ヲ強制セシムル義務ヲ負擔ス

附錄

支那會社法並關係法規

附錄 支那會社法並關係法規

第一 公司律	一一九
第二 公司註冊試辦章程	一四八
第三 公司註冊暫行章程	一五二
第四 公司條例	一五八
第五 商人通例	一九八
第六 商人通例施行細則	二〇八
第七 公司條例施行細則	二一〇
第八 商業註冊規則	二二二
第九 公司註冊規則	二二四
第十 公司註冊規則施行細則	二二六
第十一 商業註冊規則施行細則	二二四
第十二 外國人ノ株主ニ關スル支那官文書	二二九
第十三 外國人ノ株主ニ關シ英書中ノ記述	二三六

第十四 中日實業公司定款.....二四〇

第十五 公司保息條例.....二四四

附 商會法.....二四六

商事公斷處章程.....二五五

同 辦事細則.....二五九

附錄 支那會社法並關係法規

參考第一 欽定大清商律 (光緒二十九年十二月五日)

商人通例

- 第一條 凡經商務貿易賣買販運貨物者。均為商人。
- 第二條 凡男子自十六歲成丁之後。方可為商。
- 第三條 凡業者。設上無父兄。或本商病廢。而子弟幼弱。尚未成丁。其妻或年屆十六歲以上之女。或守貞不字之女。能自主持貿易者。均可為商。惟必須呈報商部存案。或在該處左近所設之商會。呈明轉報商部存案。如該處未設商會。即就近赴各業公所呈明轉報商部存案。
- 第四條 已嫁婦人。必須有本夫允准字據。悉照第三條辦理。呈報商部。方可為商。惟錢債轉轉虧折等事。本夫不得辭其責。
- 第五條 凡商人營業。或用本人真名號。或另立店號。某記某堂名字樣。均聽其便。
- 第六條 商人貿易。無論大小。必須立有流水賬簿。凡銀錢貨物出入。以及日用等項。均宜逐日登記。
- 第七條 商人每年。須將本年貨物產業器具。以及人欠人款目。盤查一次。造冊備存。
- 第八條 商人所有一切賬冊及關係貿易來往信件。留存十年。十年以後。留否聽便。倘十年之內。實有

意外燬失情事。應照第三條呈報商部存案例辦理。

第九條 無論何項商人。何項公司。何項鋪店。均須按照第六七八條。遵守無違。

公司律

第一節 公司分類。及創辦呈報法。

- 一、凡湊集資本共營貿易者爲公司。共分四種。一合資公司。一合資有限公司。一股分公司。一股分有限公司。
- 二、凡設立公司。赴商部註冊者。務須將創辦公司之合同規條章程等。一概呈報商部存案。
- 三、公司名號後設者。不得與先設者相同。
- 四、合資公司。係二人。或二人以上。集資營業。公取一名號者。
- 五、合資公司。所辦各事。應公舉出資者一人。或二人經理。以專責成。
- 六、合資有限公司。係二人或二人以上集資營業聲明以所集資本爲限者。
- 七、設立合資有限公司。集資各人。應立合同聯名簽押。載明作何貿易。每人出資若干。某年某月日起。期限以幾年爲度限先期十五日。將以上情形呈報商部註冊。方准開辦。
- 八、合資有限公司招牌。及凡做貿易所出單票圖記。均須標明某某名號。有限公司字樣。
- 九、合資有限公司。如有虧蝕倒閉欠賬等情。查無隱匿銀兩訛騙諸弊。祇可將其合資銀兩之儘數。並該

公司產業變售還債。不得另向合資人追補。

第十條 股分公司係七人。或七人以上創辦集資營業者。

第十一條 股分公司創辦人。訂立創辦合同。所應載明者如左。

- 一、公司名號。
- 二、公司所做貿易。
- 三、公司資本若干。
- 四、公司總共股分若干。每股銀數若干。
- 五、創辦人每人所認股數。
- 六、公司總號。設立地方。如有分號。一併列入。
- 七、公司設立後。布各股東。或衆人之法。或登報。或通信。均須聲明。
- 八、創辦人姓名住址。

第十二條 設立股分公司者。應將第十一條各項限先期十五日。呈報商部註冊。方准開辦。

第十三條 股分有限公司。或七人。或七人以上。創辦集資營業。聲明資本若干。以此爲限者。

第十四條 股分有限公司。創辦人訂立一創辦合同。與第十一條同。惟須聲明有限字樣。

第十五條 股分有限公司招牌。及凡做貿易所出單票圖記。亦均須標立某某名號。有限公司字樣。

第十六條 股分公司。不論有限無限。如須招股。必先刊發知單。並登報布告衆人。其知單及告白中。所應聲明者如左。

- 一、公司名號。
- 二、公司作何貿易。及所作貿易。大概情形。
- 三、公司設立地方。
- 四、創辦人性名住址。
- 五、公司總共股分若干。每股銀數若干。現招股若干。及分明繳納之數。
- 六、收取股銀地方。
- 七、創辦人有無別得或他人應許之利益。
- 八、創辦人為所設公司。先與他人訂立有關銀錢之合同之類。
- 第十七條 凡創辦公司之人。不得私自非分之利益。隱匿以欺衆股東。倘有此項情弊。一經查出。除追繳所得原數外。並按照第一百二十六條罰例辦理。以示懲警。至其應得之利益。先在衆股東會議時。聲明允認者。不在此例。
- 第十八條 公司招股已齊。創辦人應即定期招集各股東會議。即由衆股東公舉一二人。作為查察人。查察股數。是否招齊。及公司各事。是否妥協。

第十九條 如股東查出公司創辦人。不遵照按第十六條聲明各項辦理。及有他項弊竇者。衆股東可以解散不認。

第二十條 如股東查明公司創辦人。確係遵照按第十六條聲明各項辦理。亦無他項弊竇。該公司應於十五日內。呈報商部。註冊開辦。

第二十一條 公司呈報商部註冊時。所應聲明者如左。

- 一、公司名號。
- 二、公司作何貿易。
- 三、公司總共股分若干。
- 四、每股銀數若干。
- 五、公司設立後。布告股東。或衆人之法。或登報。或通信。均須聲明。
- 六、公司總號。設立地方。如有分號。一併列入。
- 七、公司設立之年月日。
- 八、公司營業期限之年月日。如無期限。亦須聲明。
- 九、每股已交銀若干。
- 十、創辦人及查察人姓名住址。

第二十二條 公司開辦三月後。限於一月內董事局須邀請衆股東會議。將開辦各事宜。詳細陳說。俾衆股東知悉。如有關緊要者。即可請衆股東酌奪。

第二十三條 凡現已設立與嗣後設立之公司。及局廠行號舖店等。均可向商部註冊。以享一體保護之利益。

第二十四條 股分銀數。必須劃一。不得參差。

第二十五條 每股銀數。至少以五圓爲限。惟可分期繳納。

第二十六條 每一股不得析爲數分。

第二十七條 公司必須遵照第二十一條聲明各項辦理。方能刊發股票。違者股票作廢。他人因此受虧者。准控官向該公司索賠。

第二十八條 公司股票。必須董事簽押。加蓋公司圖記爲憑。依次編號。並將左列各項叙明。

一、公司名號。

二、公司註冊之年月日。

三、公司總共股分若干。

四、每股銀數若干。

五、股銀分期繳納者。應將每期所交數目。詳細載明。

六、附股人姓名住址。

第二十九條 股分有限公司。如有虧蝕倒閉欠賬等情。查無隱匿銀兩詭騙諸弊。祇可將其股分銀兩繳足。並該公司產業變售還債。不得另向股東追補。

第三十條 無論官辦商辦官商合辦等。各項公司及各局。(凡經營商業者皆是)均應一體遵守商部定例辦理。

第三十一條 凡合資公司。股分公司。於呈報商部註冊時。未經聲明有限字樣。應作無限公司論。如遇虧蝕。除將公司產業變售還外。倘有不足。應向合資人附股人。另行追補。

第三十二條 無限公司。或舖戶等。欠賬虧短。則可向股東舖東追償。並將已名下產業變售封抵。(詳倒賬追欠各專條內)

第二節 股分

第三十三條 附股人應照所認股數。任其責成。

第三十四條 附股人應在公司入股單上。按式填寫簽押。送交公司。指定收單之處。依期繳納股銀。

第三十五條 附股人無論華商洋商。一經附搭股分。應即遵守該公司所定規條章程。

第三十六條 附股人不能以公司所欠之款。抵作股銀。

第三十七條 數人合購一股者。應准以一人出名。其應得權利。即由出名人任領。分給合購各人。至有

繳納股銀。不能應期繳足者。仍由各人分任其責。

第三十八條 如無違背公司章程。股票可以任便轉賣。惟承買之人。應赴公司總號註冊。方能作准。

第三十九條 公司不能自己買回。及抵押所出股票。

第四十條 附股人到期不繳股銀。創辦人應通知該附股人限期半月。逾限不繳。可將所認股數。另招他人接受。

第四十一條 公司令各股東續繳股銀。應於十五日前通知。逾期不繳。再展限十五日。仍不繳。則失其股東之權利。

第四十二條 股東於展限內。不續繳股銀。公司可將所認股數。招人承買。得價不足。仍向原股東追繳。

第四十三條 公司欲給紅股。應於創辦時。預行聲明。不得隱匿。

第四十四條 附股人不論職官大小。或署已名。或以官階署名。與無職之附股人。均祇認為股東。一律看待。其應得餘利。暨議決之權。以及各項利益。與他股東一體均沾。無稍立異。

第三節 股東權各事宜。

第四十五條 公司招集股東會議。至少於十五日通知。或登報布告。其知單及告白中。應載明所議事項。

第四十六條 公司董事局。每年應招集眾股東。舉行尋常會議。至少以一次為度。

第四十七條 舉行尋常會議董事局。應於十五日前。將公司年報。及總結分送眾股東查核。

第四十八條 舉行尋常會議時。公司董事。應對眾股東宣讀年報。並由眾股東查閱賬目。眾股東如無異言。即行列冊作准。決定分派利息。並公舉次年董事。眾股東有以賬目為未明析者。可即公舉查察人一二名。詳細查核。

第四十九條 公司遇有緊要事件。董事局可隨時招集眾股東。舉行特別會議。

第五十條 有股本共合全數十分之一之股東。(或一人。或多人。不限人數。)有事欲會議者。可即知照董事局。招集眾股東舉行特別會議。惟必須將會議事項。及緣由。逐一聲明。如公司董事局不於十五日內照辦。該股東可稟由商部核准。自行招集股東會議。

第五十一條 股東於所認股數。到期不能繳納者。不能會議。

第五十二條 眾股東無論舉行尋常及特別會議。即將所議各事由。書記列冊。凡議決之事。一經主席簽押作准後。該公司董事人等。必須遵行。

第五十三條 眾股東會議。時如有議決之事。董事或股東意為違背商律。或公司章程者。均准赴商部稟控核辦。惟須在一月以內呈告。逾期不理。至股東稟控。必須將股票呈部為據。

第五十四條 公司創辦時。所訂合同及記載。眾股東歷次會議時。決議各事之冊。並股東總單。須分存公司總號及分號。俾眾股東及公司債主。可以隨時前往查閱。

第五十五條 公司總號應立股東姓名冊。冊內所應載者如左。

- 一、股東姓名住址。
- 二、股東所有股數並其股票號數。
- 三、每股已繳銀若干。何時所繳。
- 四、股東購入股票之年月日。

第五十六條 凡購買股票者。一經公司註冊。即得為股東。所有權利。與創辦時附股者無異。其應有之責成。亦與各股東一律承任。如須續加股銀。亦應照繳。

第五十七條 中國人設立公司。外國人有附股者。即作為允許遵守中國商律及公司條例。

第五十八條 凡公司有股之人。股票用已名者。無論股本多少。遇有事情。准其赴公司查核賬目。

第五十九條 股東赴公司查核賬目。應先期限三天函告該公司總辦。如無總辦即總司理。俾可預備。(公司股東不一其人。司事逐日有應辦之事。任意查賬。未免難於應接。致有掣肘誤公等弊。故應先行函訂。)

第六十條 公司往來信札。以及各項事件。如股東欲赴公司查閱。亦須先期三天函告總辦或總司理人預備。如所查之書札及各事。於該公司較有關係。或略有窒礙者。總辦或總司理人。可請董事局酌奪。如有應行秘密之書函。不合宣布者。亦不得交與股東閱看。

第六十一條 如有股東以查核公司賬目書札及各事為名。實係借端窺覷虛實。私自別圖他項利益。損碍公司大局者。董事局應禁阻其查閱。

第四節 董事

第六十二條 公司已成。初次招集眾股東會議時。由眾股東公舉董事數員。名為董事局。

第六十三條 公司董事至少三人。至多不得過十三人。惟必須成單數為合例。

第六十四條 董事局議會。如有三人到場。即可議決各事。惟務須遵守會議條例。

第六十五條 充董事者。必須用本人姓名。暨至少有該公司股份十股以上者。

第六十六條 董事薪俸。如創辦合同未經載明者。應由眾股東會議酌定。

第六十七條 各公司以董事為綱領。董事不必常川住公司內。然無論大小應辦商各事宜。總辦或總司理人。悉宜陳明於董事局。

第六十八條 董事任事之期。以一年為限。期滿即退。最初一年。應掣籤定留三分之二。以後按舉輪替。(如人數不能合三分之二者。即取其相近之數。)

第六十九條 董事期滿。如眾股東以為勝任。可於尋常會議時。公舉續任。

第七十條 董事期滿。股東欲另舉他人。應於尋常會議兩日以前。將擬舉之人姓名。通知公司總辦或總司理人。其願充董事者。亦可先向公司報名。候會議時。由眾股東公舉。

第七十一條 董事如有事故。不能滿任。董事局人數不敷。可由董事局暫委一妥慎之股東代理。俟衆股東於尋常會議時。再行公舉充補。

第七十二條 董事辦事不妥。或不孚衆望。衆股東可於會議時決議。即行開除。

第七十三條 董事遇有以下各事。即行退任。

一、倒 賬。

二、被控監禁。

三、患瘋癲疾。

四、董事局會議時。並未商明他董事。接連三月不到。

第七十四條 董事未經衆股東會議允許。不得做與該公司相同之貿易。

第七十五條 公司股本及公司各項銀兩。係專做創辦合同內所載之事者。不得移作他用。

第七十六條 公司虧蝕股本至半。應即招集衆股東會議。籌定辦法。

第七十七條 公司總辦或總司理人司事人等。均由董事局選辦。如有不勝任及舞弊者。亦由董事局開除。其薪水酬勞等項。均由董事局酌定。

第七十八條 公司尋常事件。總辦或總司理人司事人等。照章辦理。其重大事件。應由總辦或總司理人請董事局會議。議決後列册施行。

第五節 查賬人

第七十九條 公司設立後。衆股東初次會議時。應公舉查賬人。至少二名。其酬勞由衆股東酌定。

第八十條 查賬人任事之期。以一年爲限。限滿衆股東於尋常會議時。另行公舉。如衆股東願留者。可以續任。

第八十一條 董事不能兼任查賬人。

第八十二條 查賬人不能兼任董事。如經衆股東舉爲董事。即開去查賬人之職。

第八十三條 查賬人因有事故不能滿任。董事局可以委人暫代代理。股東於尋常會議時再行公舉。

第八十四條 查賬人可以隨時到公司查閱賬目。及一切簿册。董事及總辦人等不能阻止。如有詢問。應即答覆。

第六節 董事會議

第八十五條 董事局會議。至少必須三人到場。方能開議。

第八十六條 董事局會議。應就董事中推一人充主席。一人充副主席。

第八十七條 董事局會議。主席董事主議。主席不到。由副主席代理。副主席亦不到。臨事另舉一人代理。

第八十八條 董事局會議時。所議之事。有與董事一人之私事牽涉者。該董事應自行迴避。

第八十九條 董事局會議時。每人有一議決之權。(所謂議決之權者。指一人有決事之一權也。假如有五人在場。共議一事。則五人得有決事之五權。)

第九十條 董事局會議事件。如有意見不相同者。總以從衆爲決斷。如董事在場共有五人。有三人以爲可行。二人以爲不可行。所議之事。即可從衆照行。即由書記註明記事冊內。主席簽字作准。

第九十一條 董事局會議時。如在場董事連主席共有六人。會議一事。三人以爲可行。三人以爲不可行。則彼此議決之權相等。主席董事可加一人決之權酌理。以決定其事。若議決之權不相等。主席即不得加一議決之權。

第九十二條 董事局會議時。應就公司司事中。選派一人充書記。將所議決各事登記董事局會議記事冊。

第九十三條 書記將議決各事登記會議記事冊。候下次會議對衆董宣讀。如無不合。即由主席簽押作准。

第九十四條 董事局會議議決之事。於下次會議之時。經主席簽押。其原未到場之董事。若無異言。即爲默許。

第九十五條 董事局每一星期。須赴公司會議。至少一次。總辦或總司理人。可將應辦各事。向董事局請示。如有緊要事件。可請董事局。隨時至公司會議酌奪。

第九十六條 董事局尋常會議期數。任便酌定。如有緊要事件但有二人欲行會議者。可即定期舉行特別會議。

第九十七條 董事局會議議決之事。該公司總辦及各司事人等。必須遵行。

第七節 衆股東會議

第九十八條 股東尋常會議。及特別會議。以主席董事充主席亦可。由股東另行公舉。

第九十九條 會議時股東有事請議。即由請議之人建議。並須一人贊議。再由衆人決議。

第一百條 會議時有一股者。得一議決之權。(如一人有十股者。即有十議決之權。依此類推。惟公司可預定章程。酌定一人十股以上議決之權之數。如定十股爲一議決之權。或二十股爲一議決之權。依此類推。

第一百一條 凡會議各事。決議必從衆所言爲定。如彼此議決之權相等。則主席可另加一議決之權。惟必須照第九十第九十一兩條辦法。一律辦理。

第一百二條 凡決議可否。即由書記登記股東會議記事冊。由主席簽字作准。

第一百三條 公司有重大事件。(如增加股本。及與他公司併合之類。)招集股東。舉行特別會議。若議決准行。限一月內復行會議一次。以實其事。議畢施行。

第一百四條 股東會議時。所議之事。有與股東一人之私事牽涉者。該股東仍可到場會議。毋須迴避。

第一百五條 股東不能到場會議者。可出具憑證。派人代理。代理人如非股東。祇能代行議決之權。不能有所辯駁。以申論其原因。

第一百六條 股東派會議代理人所出憑證。應於三日送交公司總辦。或總司理人查核。

第八節 賬目

第一百七條 董事局每年務須督率總辦。或總司理人等。將公司賬目詳細結算。造具年報。每年至少一次。

第一百八條 董事結算時。應先由查賬人詳細查核。一切賬冊。如無不合。查賬人應於年結冊上。書明核對無訛字樣。並簽押作據。

第一百九條 公司年報所應載者如左。

- 一、公司出入總賬。
- 二、公司本年貿易情形節略。
- 三、公司本年贏虧之數。
- 四、董事局擬派利息。並撥作公積之數。
- 五、公司股本。及所存產業貨物。以至人欠人之數。

第一百十條 董事局造成年報。應於十五日前。由總號分號分送眾股東查核。並分存總號分號。任憑眾股東就閱。

第一百十一條 公司結賬。必有贏餘。方能分派股息。其無贏餘者。不得移本分派。

第一百十二條 公司結賬盈餘。至少須撥二十分之一作為公積。積至公司股本四分之一之數。停止與否。

乃可聽便。

第九節 更改公司章程

第一百十三條 公司有權。可以訂立詳細規條章程。以補歷載之不足。惟不得與明定之條例。有所違背。

第一百十四條 董事局欲將公司創辦合同。或公司章程更改。必須由眾股東會議議決。

第一百十五條 眾股東會議議決。必須股東在場者。有股東全數之半。其所得股分。必須有股分全數之半。

若不能如上所限。而在場股東。以為事在可行者已居多數。可以暫時決議。公司董事。將決議之事登報。並通知眾股東。限一月內重集會議。從眾決定。

第一百十六條 公司如欲增加股本。亦須照第一百十四條。第一百十五條辦理。並於決議後十五日內。呈報商部。

第一百十七條 公司欲增加股本。必須眾股東將原定每股銀數繳足之後。方能舉辦。

第一百十八條 公司增加股本。其新股票。因漲價所得之利。應歸公司。

第一百十九條 公司增加股本。其新票銀兩繳足後。董事因即招集眾股東會議。當眾宣布。其會議眾股東有欲查核者。可公舉查核人一二名。詳細查明。是否繳足。

第十節 停閉

第一百二十條 凡公司遇有後列各款情事者。即作為停閉。

- 一、經衆股東照第一百五條會議例議決停閉。
 - 二、股本虧蝕及半。
 - 三、公司期滿。
 - 四、股東不及七人。
 - 五、與他公司併合。
- 第二百一十一條 公司停閉之時。即以董事充清理人。如董事不能勝任。可由衆股東會議公舉。所公舉之清理人。衆股東亦可隨時會議開除。
- 第二百二十二條 公司停閉之時。如衆股東不克公舉清理人。可呈請商部派人清理。
- 第二百二十三條 有公司股本全數十分之一之股東。若以清理人辦理不善。可呈請部派人接辦。
- 第二百二十四條 清理人將賬目算結款項清還後。應開具清冊招集衆股東會議決定允准。方能了結。
- 第二百二十五條 公司停閉後。所有賬簿來往緊要信件。必須留存十年。十年限滿。留否聽便。
- 第十一節 罰例
- 第二百二十六條 公司創辦人。董事查賬人。總辦或總司理人司事人等有犯以下所列各款者。依其事之輕重。罰以少至五圓。多至五百圓之數。
- 一、不依期呈報商部註冊。

- 二、不將律定布告各事布告。或布告不實。
 - 三、凡以上各條明定。應交人查閱之件。若無第六十條第六十一條情事。不交查閱人查閱。
 - 四、阻止他人查閱。以上各條應當查閱之事。
 - 五、未經註冊。先行開辦。
 - 六、未經註冊。先發股票。
 - 七、不遵律設立股東姓名冊。或不依第五十六條開載。或開載不實。
 - 八、股票不遵依第二十八條所定開載。或開載不實。
 - 九、股票不遵依第五十四條。及第一百條。將公司創辦合同。或記載衆股東歷次會議之事之冊。或股東總單公司物業總賬。總結年報。贏虧總賬公積賬分息賬。分存總號分號。或以上各件開載不全。或開不實。
 - 十、股本虧蝕至半。不遵依第七十六條招集股東會議。
 - 十一、公司創辦人。有違第十七條私自得有非分之利益。
- 第二百二十七條 公司人等。不論充當何職。如不遵依第七十五條。將公司股本。或公司各項銀兩。移作他用者。除追繳移用之款外。並罰以少至一千元。多至五千元之數。
- 第二百二十八條 董事總辦。或總司理人司事人等。違背商律。及公司章程。被人控告商部。商部應視其

事之輕重。罰以少至五元。多至五十元之數。

第二百二十九條 董事總辦。或總司理人司事人等。有偷竊虧本公司款項。或冒騙他人財物者。除追繳及充公外。依其事之輕重監禁。少至一月。多至三年。或並罰。少至一千元。多至一萬元之數。若係職官。並詳參革職。

第三百十條 如有違背以上條律。而未載明罰款者。即酌其輕重。罰以少至五元。多至五百元之數。

第三百十一條 以上各條例。奉

旨批准頒行後。自應永遠遵守。此係初定之本。如於保護商人。推廣商務各事宜。未能詳盡。例無專條者。仍當隨時酌增續行。請

旨核准頒行。

參考第二 奏定公司註冊試辦章程十八條

第一條 本部於光緒二十九年。十二月初五日。具奏商律之公司一門。業蒙欽定頒行在案。凡商人經營貿易。均可照例載合資公司。合資有限公司。股分公司。股分有限公司。此四項中。認明何項。在本部呈報註冊。無論現已設立。與嗣後設立之公司局廠行號舖店。一經註冊。即可享一體保護之利益。

所有註冊章程。茲特釐訂於後。以資開辦。

第二條 註冊局即於本部設立。遴選廉正明幹之司員。專筭公司註冊事宜。局中立有公司註冊案檔。分類編號。按照公司律所載各項。詳細註寫。不得疏漏。

第三條 凡公司呈報本部註冊。所應聲明各款如左。(凡屬公司。無論局廠行號舖店等。均須准此)

公司名號。公司作何貿易。公司有限無限。合資人數及其姓名住址。資本共合若干(係指有限者言。)公司股分總共若干。每股銀兩或銀圓若干。每股以交銀若干。創辦及查人姓名住址。公司總號。設立地方。如有分號一併列入。公司設立後布告。股東。及衆人。或登報。或通信。均須聲明設立之年月日。(如無期限。亦應聲明。)鈔呈合同規條章程。

第四條 公司所擬出之股票款式。應於呈報註冊時。附粘一張存案。其票式照律載第二十八條列入如左。公司名號。註冊之年月日。總共股分若干。每股銀數若干。股銀分期繳納者。應將每期所交數目詳載。附股人姓名住址。其票必須公司董事簽押。加蓋公司圖記編號。並登給發之年月日。

第五條 凡各省各埠之公司局廠行號舖店等。一經遵照此次。奏定章程赴部註冊。給照後。無論華洋商。一律保護其未經註冊者。雖自稱有限字樣。不得沾公司律。第九條。第二十九條之益利。

第六條 公司註冊。應按照律載在開辦十五日前。呈報本部。方可開辦。各公司呈報註冊。應扣算程途遠近。郵寄遲速。早日呈報到部。隨到隨辦。以免阻滯。

第七條 凡公司設立之處。業經舉行商會者。須先將註冊之呈。由商會總董蓋用圖記。呈寄到部。以憑核辦。其未經設有商會之處。可暫由附近之商會。或就地著名之商立公所。加蓋圖記。呈部核辦。

第八條 合資公司。凡合資營業。未聲明股本若干者。應繳註冊公費。悉如後列之等次。甲凡公司註冊。聲明合資。人不過二十名者。繳銀五十圓。每圓合庫平銀七錢二分。以下照此。乙合資人逾二十名。在百名之內者。繳銀一百圓。丙合資人數。如過百名外。每多五十名。或不足五十名。均加繳銀十圓。依次遞加。丁凡合資人數。聲明無限者。即不論其人數多寡。繳銀三百圓。戊凡註冊報明人數後。如欲續加合資人數。每加五十名。或不足五十名。均加繳銀十圓。惟連原繳之數。統計不得過三百圓。

第九條 股分公司。凡股分營業者。應繳註冊公費。悉如後列之等次。

甲、公司註冊。聲明股本不過一萬圓者。繳銀五十圓。

乙、股本過一萬圓者。每股本五千圓。或不足五千圓。均加繳銀十圓。以至二萬五千圓為率。

丙、股本過二萬五千圓外。每多股本一萬圓。或不足一萬圓。均加繳銀三圓。以至五十萬圓為率。

丁、股本若過五十萬圓。每多股本一萬圓。或不足一萬圓。均加繳銀半圓。

戊、如已報明股本若干。註冊後續加股本。每加一萬圓。或不足一萬圓。均照以上丙丁所列加繳銀數。

惟連原繳之數。統計不得過三百圓。

第十條 註冊公費。均按銀圓註冊。如股本係銀兩者。其註冊費。即應按兩數計算。平色並從其股本為準。

第十一條 凡公司遇有緊要情事。報明本部立案。或按公司律應呈報註明立案者。每件應繳公費銀三圓。

第十二條 公司開辦註冊後。如有該公司股友。或他體面商人。欲至註冊局檢視。某公司註冊詳情者。每人繳費銀一圓。准其檢視一次。

第十三條 如公司股分。或他體面商人。欲鈔錄某公司在本部註冊全案者。一百字內。應繳鈔費銀一圓。過一百字。每百字遞加銀半圓。所鈔之件。如更須蓋用印信以為證據者。除鈔費外。每件繳銀五圓。

第十四條 註冊局之設。原為利商起見。凡商人欲查問事件。儘可隨時赴局會晤。除章程載明應繳公費外。餘無他費。

第十五條 註冊局收取各費。當即掣付收據。蓋明商部註冊局圖記。以昭信實。

第十六條 公司呈報註冊到部。查明如不合式。立即飭令更正。其應行照准者。即給發執照一紙。蓋用印信為憑。

第十七條 無論何國商人公司。在本部呈報註冊。悉以譯成華文為憑。本部註冊給照。亦均用華文。以歸一律。

第十八條 如右所列。作為公司註冊試辦章程。開辦後。仍當酌量情形。隨時增改。

參考第三 工商部咨各省公司註冊章程文

案查公司註冊。係屬本部職掌。前農工商部會頒試辦章程十八條。歷經通行遵辦在案。本部成立。逮今年餘。關於所辦註冊事項。深覺該章未盡妥協。如原章第二條內稱公司註冊由部設局專管。本部以設局專辦。徒多周折。業將該局裁撤。歸司直轄。以期簡便。又如第八第九兩條所訂註冊公費。分股分合資兩項。合資公司。以人數多寡。定冊費等差。此項規定。殊欠公允。且公費應繳數目。殊嫌過重。亟應從輕規定。以恤商艱。其他條文。應行修改者。亦不一而足。本部為便商起見。照現行公司律範圍。另訂公司註冊暫行章程十八條。現已印刷成帙。相應附書咨行貴都督民政長轉飭所屬暨各商會一體遵照。二年五月三十一日

公司註冊暫行章程

- 第一條 本章程係按照現行公司律規定公司註冊辦法。
- 第二條 凡依現行公司律組織之公司局廠。均須呈報工商部核准註冊。方准開辦。
- 第三條 凡設公司。先行來部呈請立案者。自立案之日起。限六箇月內。須呈請核准註冊。如逾期不呈請時。即行註銷。
- 第四條 公司呈報註冊時。須按各該公司性質。依附列呈式將所應聲明各款逐條填具。並將合同章程呈

部核奪

股分公司。並須將股票式樣呈核。

- 第五條 公司呈請立案。須開具營業概算書。呈部核奪。如先未立案。逕請註冊者亦同。

第六條 合資公司。須資本全數繳足。方准呈請註冊。

第七條 股分公司。須股分全數招足。實收股本過半數以上。方准呈請註冊。

第八條 凡公司局廠所集資本。須經地方官廳及商會證明屬實。方准呈請註冊。

第九條 各種公司註冊費。比照左列定額。分別繳納。

- 一、五萬元以內者。繳銀五十元。
- 二、十萬元以內者。繳銀一百元。
- 三、二十萬元以內者。繳銀一百五十元。
- 四、五十萬元以內者。繳銀二百元。
- 五、百萬元以內者。繳銀二百五十元。
- 六、百萬以上。統繳銀三百元。

如已報明資本數目。經部核准註冊。嗣後續加資本。應參照前列各項。併合原繳之數計算。

註冊費均按銀元計算。如公司資本係銀兩者。即以兩數合作銀元核算。

第十條 凡公司局廠經部核准註冊。當即發給執照。以資信守。並通行該地方官廳保護。

第十一條 工商部收到註冊費時。由收發處給發收條為據。

第十二條 已經註冊之公司局廠。均分類登錄註冊底簿存案。凡有關係者。得來部聲請閱看。

檢視某公司及行號閱看註冊底簿者。每人每次須繳銀一元。

鈔錄註冊全案者。每百字以內繳銀一元。過百字遞加銀半元。

第十三條 凡關於註冊事項。得隨時來部詢問。

第十四條 各項行號店鋪。欲請註冊。准照本章辦理。

第十五條 外國商人所設公司呈請註冊。須以華文為憑。執照亦用華文。以歸一律。

第十六條 凡在本章施行以前。所有未經註冊之公司局廠。統限自施行日起六箇月以內補報註冊。逾期

不報。按照公司律第一百二十六條查明懲罰。

第十七條 本章自民國二年七月初一日施行。舊有公司註冊試辦章程。即行作廢。

第十八條 本章係屬暫行章程。有所修改。以部令定之。俟新商法頒布另訂施行細則後。即行作廢。

股分公司註冊呈式

具呈人 姓名

為呈請註冊事今因設立
核准註冊謹呈

公司謹按公司註冊章程第四條所應聲明各款條列於後呈請

工商部

計開

- 一、名 號
- 二、營 業
- 三、責任種類
- 四、股分定額
- 五、每股銀數
- 六、現收股銀
- 七、總分號地方
- 八、創辦人姓名住址
- 九、查察人姓名住址
- 十、設立年月
- 十一、營業期間

民國 年 月 日
合資公司註冊呈式

具呈人 姓名

爲呈請註冊事今因設立

公司謹按公司註冊章程第四條所應聲明各款條列於後呈請

核准註冊謹呈

工商部

計開

- 一、名 號
- 二、營 業
- 三、資本數目
- 四、總分號地方
- 五、出資人姓名住址
- 六、總經理人姓名住址
- 七、設立年月
- 八、營業期間

民國 年 月 日
獨資商業註冊呈式

具呈人 姓名

爲呈請註冊事今因設立

謹按註冊章程第四條所應聲明各款條列於後呈請

核准註冊謹呈

工商部

計開

- 一、名 號
- 二、營 業
- 三、資本數目
- 四、總分號地方
- 五、出資人姓名住址
- 六、總經理人姓名住址
- 七、設立年月
- 八、營業期間

民國 年 月 日

一五八

參考第四、大總統令

茲制定公司條例公布之此令

大總統
印

中華民國三年一月十三日

國務總理 熊希齡
農商總長 張謇

教令第五十二號

公司條例

第一章 總綱

第一條 本條例所稱公司謂以商行爲業而設立之團體

第二條 公司共分爲四種

一 無限公司

二 兩合公司

三 股份有限公司

四 股分兩合公司

第三條 凡公司均認爲法人

第四條 公司爲其本店所在地爲住所

第五條 公司非在本店該管官廳註冊後不得著手於開業之準備

第六條 公司之設立非在本店該管官廳註冊後不得對抗第三者

第七條 公司既經本店該管官廳註冊後滿六箇月尙未開業者該管官廳得以職權或因檢察官之請求解散之

前項所定之期限如確有正當之事由公司亦得呈請准予展限

第八條 公司有違背法令妨害治安及紊亂風俗之行爲該管官廳得以職權或因檢察官之請求解散之

第二章 無限公司

第一節 設立

第九條 凡二人或二人以上設立無限公司應公同訂立章程署名簽押

第十條 無限公司所訂章程應載明左列各款

一五九

一 商號

二 公司所營事業

三 股東之姓名住址

四 本店及支店所在地

五 股東出資之種類及價值或估價之標準

第十一條 公司自章程簽押後十五日內因將左列各款向本店及支店該管官廳註冊

一 前條第一至第三各款

二 本店及支店

三 設立之年月日

四 定有存立年限或解散之事由者其年限或事由

五 定有代表公司股東者其姓名

六 股東出資之種類及以財產爲出資之價格

第十二條 公司添設支店時應於添設後十五日內照前條所開各款向該管官廳註冊並於同期限內將添設支店事向本店及他支店該管官廳註冊

如在本店或支店該管官廳之同一區域內添設支店時祇須將添設支店事註冊

第十三條 公司本店或支店如有遷移應於遷移後十五日內向該管官廳照第十一條各款註冊並於原處該管

官廳將遷移事註冊

如在本店或支店該管官廳之同一區域內遷移時祇須將遷移事註冊

第十四條 公司註冊各款如有變更時應於變更後十五日內向本店及支店該管官廳註冊

第二節 公司內部之關係

第十五條 公司內部一切權利義務之關係除本條例規定外得以章程明訂之

第十六條 以債權抵作資本之股東到期而債款無著者應自任清償之責

遇有前項情事除加算利息外尚有損害更應賠償

第十七條 公司分派盈虧如別無預定之比例以各股東出資之多少爲準

僅於盈餘或虧損之一面定有分派之比例時其所定比例於盈虧兩面均適用之

第十八條 各股東不論出資之多少均有執行業務之權利而負其義務但章程訂明股東中之一人或數人執行業務時不在此限

第十九條 執行業務者爲股東之全體或其中數人時公司業務之執行均以其過半數取決

公司尋常事務執行業務之股東均得各自執行但其餘執行業務之股東有一人述異議時即應中止以俟取決

第二十條 經理人之選任及解任雖有特定執行業務之股東亦須全體股東過半數取決

第二十一條 公司變更章程及為公司事業範圍外之行爲均應得全體股東之同意

第二十二條 不執行業務之股東亦得質問公司營業情形稽查帳簿貨物及信件

第二十三條 執行業務之股東非有特約不得向公司索取報酬

第二十四條 股東因執行業務於急需用代爲墊付者得向公司照數索償並計算墊付後利息如係擔任債款尙未到期者亦得請給相當之擔保

股東因執行業務受有損害並非由自己過失者得向公司請求賠償

第二十五條 公司章程訂明專歸某股東之一人或數人執行業務時其人不得無故自行辭職及使之退職

遇有正當事由使之退職除章程訂明由多數取決外應得全體股東之同意

第二十六條 股東執行事務應照章程及股東決議所定宗旨妥慎經理倘違背此義務致公司受有損害者應任賠償之責

第二十七條 股東代收公司銀錢不於相當之期日交納或股東於公司業務上應用款項私自挪移時應加算到期以後或挪用以後利息一併追繳倘有損害更應賠償

執行業務之股東因公司之請求應以執行業務之情形報告之

第二十八條 股東非經他股東全體允許不得爲自己或他人爲本公司營業範圍內之行爲及附入同類營業之他公司爲無限責任股東

違背前項之規定時公司得照他股東過半數之決議以其爲自己所營之商業視爲爲公司而爲者

前項之權利由其他股東中之一人覺察之日十五日內或自事成之日一年內不行使者即行消滅

第二十九條 股東非經他股東全體允許不得以自己股份之全數或若干轉讓於他人

第三節 公司對外之關係

第三十條 公司得依章程或各股東之同意特定某股東代表對外事務如未經特定者各股東均有代表公司之權

第三十一條 代表公司股東凡關於公司營業事務無論涉訟與否均有辦理之權限

第三十二條 以章程或各股東之同意所加於代表權之限制不得對抗不知情之第三者

第三十三條 代表公司之股東或經理人因執行其業務所加於他人之損害除由本人過失外公司應任賠償之責

第三十四條 代表公司之股東如爲自己或他人與本公司爲買賣貸借其他法律行爲不得同時兼爲本公司之

代表但向公司爲清償債務之行爲時不在此限

第三十五條 公司所有財產不足抵補其虧欠各款時股東應連帶負責清償之責任

第三十六條 公司成立後而加入爲股東者於其未加入前所有公司原欠各款亦負責任

第三十七條 非股東而有可以令人信其爲股東之行爲者對於不知情之第三者應於股東負同一之責任

第三十八條 股東出資額之減少不得以之對抗公司之債權者

但既以減少出資事於公司本店及支店該管官廳註冊後二年內債權者並無異議時不在此限

第三十九條 公司如有歷年虧折非經彌補後實有盈餘不得分派利益

違背前項之規定而分派時公司之債權者得令其退還

第四十條 公司之債務者不得以其債務與對於股東之債權彼此抵消

第四十一條 各股東非於退股及公司解散後不得按自己之股分請求分析公司財產

第四節 股東之退股

第四十二條 凡章程中未定公司存立年限或定以某股東之終身為期者各股東得於每屆結帳時退股但應於

六箇月前向各股東聲明遇有不得已之事故時無論公司會定存立年限與否該股東亦得商請隨時退股

第四十三條 除前條規定外各股東因左列各款而退股

- 一 章程所豫定之事由發生
- 二 其餘股東全體之同意
- 三 死亡
- 四 破產
- 五 患瘋癲

六 除名

第四十四條 股東之除名以左列各款為限由其餘股東之同意行之但非通知後不得對抗該股東

- 一 應出之資本不能照繳或屢催不繳者
- 二 違背本條例第二十八條第一項之規定者
- 三 執行業務或代表公司時確有不正之行爲者
- 四 非執行業務之股東干預公司業務濫用公司牌號圖記銀錢貨物者
- 五 不盡重要之義務者

第四十五條 公司之商號中有列股東之姓或姓名者當該股東退股時得請其停止使用

第四十六條 股東因退股與公司分析財產照時價核算退股股東所出資無論其種類如何均得以銀錢給還

退股時如有尙未了結之事項得俟其了結後核算盈虧照舊分派公司於退股股東仍有關係之事項得由其餘各股東照自己最利益之方法妥爲了結

第四十七條 凡以勞務或信用爲出資之股東退股時亦得準用前條之規定但章程中別有訂明者不在此限

第四十八條 退股股東應於本店該管官廳註冊未註冊前所有公司債務仍負連帶無限之責任此責任自註冊後滿二年消滅轉讓其自己股分之股東得他股東允許者亦同

第五節 公司之解散

第四十九條 公司因左列各款而解散

- 一 存立期滿或定款所豫定之事由發生
- 二 所營事業已成功或不能成功
- 三 股東全體之同意
- 四 股東僅餘一人
- 五 與別公司合併
- 六 破產
- 七 官廳之命令

第五十條 因前條第一款而當解散之公司得以股東全體或二人以上之同意續辦其不願續辦之股東即爲退股

第五十一條 公司除破產及合併外應於解散後十五日內向本店及支店該管官廳註冊

第五十二條 公司得以全體股東之同意與他公司合併

第五十三條 公司決議合併時應十五日內造具財產目錄及貸借對照表

公司應自決議後十五日內將合併辦法向各債權者分別通知及公告併限某期間內得述異議但其所定期限至少應在三箇月以上

第五十四條 公司非過前條所定之期限及對於述異議之債權者照數償還或給相當之擔保不得合併

第五十五條 公司不如法通知及公告或不願債權者之異議而合併時不得對抗各債權者

第五十六條 公司實行合併時應於十五日內向本店及支店該管官廳將合併後情形分別註冊

- 一 因合併而存續之公司照變更例註冊
- 二 因合併而消滅之公司照解散例註冊
- 三 因合併而另立之公司照設立例註冊

第五十七條 因合併而消滅之公司其權利義務應歸合併後存續或另立之公司承受

第五十八條 遇有不得已之事故各股東得呈請該管官廳將公司解散

前項不得已之事故若股東中有應任其責者該管官廳得據他股東之呈請免令解散祇將有損公司之股東判示除名

判示除名之股東其與公司財產之分析應照起訴時公司財產之時價核算

第六節 清算

第五十九條 凡解散之公司在清算範圍內視爲尙未解散者

第六十條 公司解散後之財產除有股東過半數決議選定之股東或他人使任清算外應由全體股東清算

第六十一條 公司解散後之財產由股東議定有處置方法時應於解散後十五日內算結各帳造具財產目錄及

貸借對照表其對於公司債權者之關係準用本條例第五十三條第二項第五十四條第五十五條之規定

第六十二條 股東死亡關於清算事務應由其繼嗣行之其繼嗣有數人時祇能以一人行其權利

第六十三條 因本條例第四十九條第四款第七款而解散之公司其清算人得由該管官廳據利害關係人或檢察官之呈請選派之

第六十四條 股東所選任之清算人得由股東過半數決議隨時解任

有必要事由時該管官廳得據利害關係人或檢察官之呈請將清算人解任

第六十五條 被選為清算人者應於選任後十五日內向本店及支店該管官廳將其姓名住址註冊清算人之解任或更易亦應於十五日內向本店及支店該管官廳註冊

清算人由官廳選任及解任時應由官廳先期公告

第六十六條 清算人之職務如左

一 了結現在事務

二 索取債權清償債務

三 分派餘存財產

清算人因前項職務上所必需無論涉訟與否有執行一切事務之權限

第六十七條 清算人有數人時關於清算事務之執行以其過半數決之但對於第三者各有代表之權限

第六十八條 於清算人之代理權加以限制不得對抗不知情之第三者

第六十九條 清算人就任後應即檢查公司財產現時情形造具財產目錄及貸借對照表送交各股東察核

清算人遇有股東詢問時應將清算情形據實報告

第七十條 清算人雖由官廳選任者亦應遵守股東及其他利害關係人會同決議之條件以行其職務

第七十一條 清算人應於就任後兩月內以至少三次之公告限期催告各債權者令於某期限內報明債權併聲明逾期將其債權剔除但其所定期限應在三箇月以上

催告期限未滿不得先於一部分之債權者提款歸還

清算人於明知之債權者應分別通知不得將其債權剔除

其過期始行報明之債權者對於償清他債務尚未分派之財產得請求之

第七十二條 公司現存財產不足清償其債務時清算人得請股東出資

股東不能出資時清算人應即呈請宣告破產清算人交付其事務於破產管財人時即為終了其任

第七十三條 清算人非清償公司之債務後不得將公司財產分派於各股東

第七十四條 餘存財產分派之比例以各股東所出資本之價額定之

第七十五條 清算人於清算了結後應即造具帳簿送交各股東查閱如滿一箇月並無異議即視為各股東之承認但清算人有情弊時不在此限

第七十六條 清算了結後清算人應即向本店及支店該管官廳註冊

第七十七條 已解散之公司所有帳簿並關於營業及清算事務之書信契據應自清算了結註冊後計滿十年妥善保存

經手保存之人以股東過半數定之如有爭議呈由該管廳判決
保存之商業帳簿並一切書信契據凡利害關係人均得查閱

第七十八條 公司之設立因事經官廳批駁或被註銷時須照解散例清算其清算人由該管官廳據利害關係人或檢查官之呈請選派之

第七十九條 股東之連帶無限責任自解散註冊後滿五年消滅但依其他法律所定有五年以內之消滅期間者不在此限

解散註冊後雖滿五年如有尚未分派之餘存財產公司債權者仍得向之索償

第三章 兩合公司

第八十條 兩合公司以無限責任股東與有限責任股東組織之有限責任股東以額定出資為限對於公司而負其責任

第八十一條 兩合公司除本章規定外關於無限責任股東準用前章之規定

第八十二條 設立兩合公司之章程除記載本條例第十條所列各款外應記載各股東之責任無限或有限

第八十三條 兩合公司自訂立章程後應於十五日內向本店及支店該管官廳註冊除照本條例第十一條所列

各款外應將各股東之責任無限或有限註冊

第八十四條 有限責任股東僅得以銀錢或別種財產為出資

第八十五條 無限責任股東章程上無特別訂明時均有執行業務之權利而負其義務

第八十六條 無限責任股東有數人時其業務之執行以其過半數取決

第八十七條 經理人之選任及解任雖特定有執行業務之股東時亦以無限責任股東過半數取決

第八十八條 有限責任股東得於每屆結帳時索閱公司之財產目錄及貸借對照表並檢查公司之業務及其財產情形有必要事故該管官廳得據有限責任股東之呈請許其不論何時檢查公司之業務及其財產情形

第八十九條 有限責任股東非得無限責任股東全體之允許不得以其自己股份之全數或若干轉讓於他人

第九十條 有限責任股東得為自己或他人為與本公司營業相同之商行為又得為他公司無限責任股東

第九十一條 除章程或全體股東之同意特定代表外凡無限責任股東均得各自代表公司

第九十二條 有限責任股東不得執行公司業務及代表公司

第九十三條 有限責任股東如其行為有使人信其為無限責任股東時對於不知情之第三者與無限責任股東負同一之責任

第九十四條 有限責任股東雖患瘋癲不必因此退股有限責任股東死亡時其自己之股份歸其繼承

第九十五條 兩合公司遇有無限責任股東或有限責任股東之全體退股即行解散但在有限責任股東全行退股時不妨以無限責任股東之全體同意改為無限公司

第九十六條 兩合公司改為無限公司時應於十五日內向本店及支店該管官廳將兩合公司為解散之註冊無限公司為設立之註冊

第四章 股份有限公司

第一節 設立

第九十七條 股份有限公司應有七人以上為發起人

第九十八條 發起人應訂立章程載明左列各款署名簽押

- 一 商號
- 二 公司所營事業
- 三 股分總銀數及每股銀數
- 四 本店及支店所在地
- 五 公告之方法
- 六 訂明若干股數以上方有被選董事之資格
- 七 發起人姓名住址

前項第四款至第六款若未載入章程中得由創立會或股東會補足之

第九十九條 左列各款非載明於章程者無效

- 一 存立年限及解散之事由
- 二 發行股票超過票面之銀數
- 三 發起人所當受之特別利益及其姓名
- 四 有以銀錢外之財產抵作股銀者其姓名並其財產之種類價目及公司核給之股數
- 五 應歸公司開支之設立費用及發起人當受報酬之數

第一百條 股分由發起人認足時公司即從此成立

第一百一條 發起人認足股分總數時應從速按股各繳至少四分之一以上之股銀並選任董事及監查人其選任方法以發起人議決權之過半數決之

第一百二條 董事被選後應即呈報該管官廳選派檢查員查驗第一次股銀是否繳足並九十九條第三款至第五款所開各事是否正當

第一百三條 官廳得檢察員報告後查核發行人所當受特別之利益與其報酬及設立費用如有冒濫得裁減之其銀錢外抵作股銀之財產如有估價過高得裁減所給股數或責令補足但其人亦得以銀錢退換之

第一百四條 發起人自認足之股分應於公司成立前招募足額

第一百五條 發起人應備有聯單式之認股書載明左列各款凡認股者各填寫所認股數署名簽押

一 訂立章程之年月日

二 本條例第九十八條至第九十九條所列各款

三 各發起人所認之股數

四 第一次繳納之銀數

發行股票超過票面銀數時認股者須於認股書註明認繳之銀數

第一百六條 認股者有各照所認股數繳納股銀之義務

第一百七條 各股票發行之定價不得較少於票面銀數第一次當繳之股銀不得少於票面銀數四分之一

第一百八條 股分總數招足時發起人應速向各股東催取第一次當繳之股銀

以超過票面銀數發行股票時其溢額應與第一次股銀同時繳足

第一百九條 認股者延欠第一次當繳之股銀時發起人應通知該認股人限期照繳並聲明逾期不繳失認股分之

權利但其期限至少應在一箇月以上

發起人已照前項辦法通知認股人仍不如期照繳即失其權利其所遺股分另募他人接受

因前兩項情事如有損害仍得向該認股者要求賠償

第一百十條 第一次銀數繳齊後發起人應速召集創立會

第一百一十條 創立會之召集及決議準用第一百四十五條第一項第二項第三項第一百四十七條第一項第三

項第一百五十條第一項第二項之規定

創立會應有認股者之過半數而有總股分之過半數者到場以其議決權之過半數決議一切事項

第一百十二條 發起人應報告設立各事於創立會

第一百十三條 創立會應選任董事及監察人

第一百十四條 董事及監察人應調查左列各款報告於創立會

一 股分總數已否招足

二 各股東第一次當繳之股銀已否繳足

三 調查本條例第九十九條第三款至第五款所開各事是否正當

董事及監察人如有由發起人中選出者創立會得另選檢查人為前項之調查報告

第一百十五條 發起人所當受特別之利益與其報酬及設立費用如有冒濫創立會得裁減之

其銀錢外抵作股銀之財產如有估價過高者創立會得裁減其收數或責令補足但其人亦得以銀錢退換之

第一百十六條 有未認定之股分及已認定未繳第一次股銀者應由發起人連帶擔任其已認定而由原人撤銷者

亦同

第一百十七條 照前二條辦法公司倘有損害之處該發起人應負賠償之責

第一百八條 創立會於定款所列事項得決議修改並得於公司之設立決議廢止

第一百九條 公司股分非由發起人認足者其公司以創立會完結時成立

第二十條 股分總數招足後滿一年於第一次股銀尚未全行繳納或已繳納而發起人於半年內尚不召集創立會認股者得撤銷其所認之股及索還已繳之銀數

第二十一條 公司成立後發起人應於十五日內將左列各款向本店及支店該管官廳註冊

一 本條例第九十八條第一第二第三及第五各款

二 本店及支店

三 設立之年月日

四 各股已繳之銀數

五 董數及監察人之姓名住址

六 定有存立年限或解散事由者其年限及事由

七 定有開業以前分派利息者其利息之定率

第二十二條 公司成立後添設支店及本店或支店遷移他處又設立時業經註冊之各事中有變更時準用本條例第十二條第十三條第十四條之規定

第二十三條 公司自經設立註冊後認股者不得藉口於受詐欺或被強迫向公司將股分撤銷

第二節 股分

第二十四條 股分公司之資本應分為各股每股銀數應一律平均至少以五十元為限但一次繳全者妨不以二十元為一股

第二十五條 公司得依章程發行優先股

第二十六條 各股東之責任以繳清其所原認或接手之股分銀數為限

股銀應繳現款不得向公司以別種債權作抵

第二十七條 股分如係數人共有時其共有者應定一人行使股東之權利

股分共有者之各人對於公司負連帶清繳股銀之義務

第二十八條 公司非設立註冊後不得發行股票

違背前項之規定而發行股票時其股票無效但不妨對於發給此票者要求損害賠償

第二十九條 股票應載明股分編號及左列各款由董事署名簽押

一 公司之商號

二 設立註冊之年月日

三 股分之總數及每股銀數

四 若有優先股者其優先股之總銀數及其應有之權利

五 股分銀數分期繳納者其每次分繳之股銀

第三百三十條 公司之股分除章程別有訂明外不待公司允許可以轉讓於他人但非設立註冊後不得轉讓及為轉讓之豫約

第三百三十一條 股分爲記名式者以之轉讓時非將承受人之姓名住址記載於股東名簿並將其姓名記載於股票不得以其轉讓對抗公司及其他第三者

第三百三十二條 公司不得自將股分收買及收作抵押其因股東失權或抵償債款而暫由公司收存者即應定期公估出售

第三百三十三條 公司非因減少資本不得銷除其股分

第三百三十四條 公司每屆收取股銀應先期至少一箇月向股東催告

第三百三十五條 股東於過期繳銀應加算到期以後之利息倘章程上定有違約金辦法公司得據以向該股東索取

第三百三十六條 公司已按第一百三十四條各項公告後該股東仍不照繳者即失其股東之權利

第三百三十七條 失其利權之股東其股分如係疊次轉讓者所應繳之股銀公司得查照股東名簿催告各轉讓人

令於一箇月內繳納

各轉讓人受前項之催告其最先付入欠款者取得其股分前項之轉讓人經過催告不照繳股銀時公司得以拍賣之方法轉售其股分拍賣所得之銀數有不足時仍得向原股東及轉讓人請求追補

第三百三十八條 前條所定轉讓人之責任如已將其轉讓載於股東名簿後過二年即行消滅

第三百三十九條 股銀非繳足後不得因股東之請求發給無記名式之股票

股票爲無記名式者其股東得不論何時請改爲記名式

第四百十條 股東名簿應將所有各股分依次編號並載明左列各款

- 一 各股東股分之數及其股票之編號
- 二 各股東之姓名住址
- 三 各股分已繳之銀數及其年月日
- 四 各股分取得之年月日

若發行無記名式股票其票數及其編號並發行之年月日公司發行優先股時應於編號下註明優先字樣

第三節 股東會

第一百四十一條 股東會每年至少一次依公司每屆結賬後一定之時期召集之

第一百四十二條 股東會除定期召集外如有關於公司利害必要時亦可臨時召集

第四百三十三條 股東會除由本條例或公司章程訂明其他人員可以召集外概由董事召集

第四百三十四條 股東會之決議除本條例或公司章程有特別訂明外以到場各股東議決權過半數行之

第四百三十五條 公司各股東每一股有一議決權但一股東而有十一股以上者其議決權之行使得以章程限制之

股東如出具囑託書託人到場代理決議者其書應呈明公司存留為證

股東於會議事項有特別之利害關係者於其事項之議決不得加入決議之數並不得為他人代理而行使其議

決權執有無記名式之股票者非於會期五日前將其股票交存公司不得到會決議

第四百三十六條 有股分總數之十分之一以上之股東得將提議事項及其理由請求董事召集股東會

董事於前項之請求十五日內不為召集之預備時股東得呈由該管官廳之允許自行召集

第四百三十七條 公司召集股東會應於一箇月前通知各股東

公司對於執有無記名式之股票者當召集時應於四十年前公告之通知及公告中應載明召集之宗旨及所應議決之事件

第四百三十八條 股東會所有議決各事項應清繕決議錄由議長簽押

決議錄應列記會議日時議長之姓名及決議之方法並附存股東到會名簿

第四百三十九條 定期會查核每屆公司董事所具簿冊監察人之報告並決議分派贏餘及利息

因查核前項事件得由股東會選任檢查人

第四百四十條 股東會之召集及決議違背法令及章程時股東得呈控該管官廳註銷之其呈控由決議之日起算以一月內行之

第四百四十一條 董事監察人以外之股東為註銷會議之呈控時必先繳存其股票且由公司之請求應更出相當之擔保

第四節 董事

第四百四十二條 公司董事由股東會就股東中選任之

第四百四十三條 董事被選就任後應將章程所定被選合格之股票數交由監察人存執

第四百四十四條 董事應得之報酬如章程未經訂明者應由股東會議定

第四百四十五條 董事任期不得過三年但任期滿後不妨公舉續任

第四百四十六條 公司因正當理由不論何時得以股東會決議開除董事如無正當理由而開除之董事得向公司要求損害賠償

但董事無正當事由而告退於公司有不利時對於公司宜負損害賠償之責

第四百四十七條 董事之職行業務除章程別有訂明外其過半數決之關於經理人之選任及解任亦同

第四百四十八條 董事得各自代表公司